

ワコーゴルフクラブ諸井ショートコース
造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

団子塚遺跡 (I)

1992年 3 月

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

ワコーゴルフクラブ諸井ショートコース
造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

団子塚遺跡 (I)

1992年 3 月

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

例 言

1. 本書は、団子塚遺跡の発掘調査報告書（Ⅰ）である。
2. 本遺跡は、浅羽町では従来から北山遺跡と呼称していたが、今回の調査を機会に遺跡の名称を袋井市と統一するために団子塚遺跡と改称した。このために、浅羽町で既刊の北山遺跡や北原遺跡は、広義の団子塚遺跡になるが、混同を避けるために旧名称のままとした。本調査でA地点を欠番にしているのは、北山遺跡をこれに充てたためである。
3. 本調査は、ワコーゴルフクラブ諸井ショートコース造成工事に伴うもので、調査費用は原因者である和光商事株式会社が負担した。
4. 調査は、1990年5月1日から1991年3月31日まで行った。また、整理は1991年4月1日から1992年3月31日まで行った。
5. 調査の体制は下記の通りである。
 調査主体者 浅羽町教育委員会 教育長 岡本幸夫
 調査担当者 柴田 稔（浅羽町文化財保護審議委員）
6. 遺構等の測量は国家座標に基づいている。座標値は全体図に示した。
7. 実測図の整理・写真撮影は柴田 稔が行ったが、これらの一部と基準杭設置は株式会社フジヤマに業務委託した。業務委託した実測図と写真は目次末に記した。
8. 本遺跡は袋井市と浅羽町にまたがるが、調査は行政単位で行った。このため両市町にまたがるB地点、C地点は遺構名・遺構番号の統一を計り、下表のようにした。

地 点 名		団 子 塚 遺 跡 B 地 点		団 子 塚 遺 跡 C 地 点	
遺 構 名	略称	浅羽町北山地内	袋井市高尾向山地内	浅羽町北山地内	袋井市高尾向山地内
方形周溝墓	S X	S X 1～S X 8 S X 10～S X 11	S X 9	S X 1～S X 19	S X 20～S X 95
溝 状 遺 構	S D	S D 1～S D 33 S D 44～S D 52	S D 34～S D 43	S D 1～S D 60	S D 61～S D 278
土 坑（墳）	S K	S K 1～S K 16 S K 18～S K 27	S K 17	S K 1～S K 23	S K 24～S K 61
土 器 棺	S P			S P 1～S P 2	S P 3～S P 5
古 墳	なし	13号墳～15号墳		11号墳～12号墳	1号墳～10号墳
小 石 室	S F			S F 1～S F 4	S F 5

※なお、浅羽町分については次の略号がある。

RP－土器、RS－石器、ST－竪穴住居跡、SH－掘立柱建物跡、SG－古墳、S－石（礫）、ドット－焼土

9. 発掘調査および本書の発行に係わる事務は浅羽町教育委員会社会教育課が担当した。
10. 本書の執筆は、Ⅰ－事務局、Ⅱ～Ⅳ－柴田 稔が担当した。
11. 袋井市域の発掘調査は袋井市教育委員会社会教育課学芸員 永井義博氏が担当し、袋井市教育委員会より1992年3月に発掘調査報告書が刊行されているので参照されたい。

目 次

I 調査の経過	1
II 周辺の環境	3
III 各地点の概要	7
(1) 概況	7
(2) B地点の概要	10
(3) C地点の概要	16
(4) D地点の概要	24
(5) E地点の概要	33
(6) F地点の概要	34
(7) G地点の概要	42
IV おわりに	43

挿 図 目 次

第1図 位置図	2
第2図 周辺の遺跡分布図	4
第3図 浅羽平地の復元	5

表 目 次

表-1 B地点周溝墓観察表	11~13
表-2 C地点周溝墓観察表	18~22
表-3 D地点掘立柱建物跡観察表	25~26
表-4 D地点小穴観察表	27~28
表-5 D地点竪穴住居跡観察表	29~31
表-6 F地点遺構切り合い関係	34
表-7 F地点竪穴住居跡観察表	35~41
表-8 F地点掘立柱建物跡観察表	41

写真図版目次

図版 1 団子塚遺跡全景〔フジヤマ〕

B地点写真図版

図版 2 上 中央区完掘状況(空撮)〔フジヤマ〕

下 SX 1 (東から)

図版 3 上 SX 2、SX 3 (南東から)

下 SX 4 (東から)

図版 4 上 SX 5 (南から)

下 SX 6、14号墳(南から)

図版 5 上 SX 7、SX 8 (南から)

下 SK 8、SK10~13付近(南から)

図版 6 上左 SD 1 (SX 1) 遺物出土状況

上右 SD17(SX 6) 遺物出土状況

中左 SD21遺物出土状況

中右 SD24(SX 5) 遺物出土状況

下左上SD28(SX 7) 遺物出土状況

下左下SD27(SX 7) 遺物出土状況

下右 SD31(SX 8) 遺物出土状況

図版 7 上 東区完掘状況(空撮)〔フジヤマ〕

下 SX10・11(西から)

図版 8 上 SK23(東から)

下 SK25(西から)

C地点写真図版

図版 9 上 C地点調査前全景(東から)

下 C地点空撮〔フジヤマ〕

図版10上 D地点からC地点を望む

下 SX 2 (西から)

図版11上 SX 2、SX 3、SX 5、SX 7 (西から)

下 SX 3、SX 5 (西から)

図版12上 SX 4 (西から)

下 SX 4、SX 5、SX 6、SX 7、SX 9、SX10、SX12(西から)

図版13上 SX 6、SX 7、SX 8、SX 9、SX10、SX11(西から)

下 SX 9、SX10、SX11(西から)

図版14上 SD32(SX10) 遺物出土状況

下 SX10、SX12(西から)

図版15上 SX13、SX14、SX15(西から)

下 SX16(西から)

- 図版16上 SD49(SX16)遺物出土状況
 下 SX17(西から)
 図版17上 SX18(西から)
 下 SX19(西から)
 図版18上 SX2南東側土器棺(SP1)出土状況
 下 SD31内土器棺(SP2)出土状況
 図版19上 SF1～3全景(西から)
 下左 SF1
 下右 SF2
 図版20上 SF3
 下 SF3遺物出土状況

D 地点写真図版

- 図版21上 D地点全景〔フジヤマ〕
 下 SH1～3(上はSB6その他、右はSD2、南から)
 図版22上 SH4・5、SB1・8、SX1、SK5(北から)
 下 SH4～8、SB1(東から)
 図版23上 SH9～11、SB3(南から)
 下 SH12・13(右上はSB4・5、南東から)
 図版24上 SH14・15、SB7排水溝(南から)
 下 SB2(上はSK2、南から)
 図版25上 SB4・5(南から)
 下 SH18、SB6・11・12(南から)
 図版26上 SH6遺物出土状況(東から)
 下 SB8、SD6(西から)
 図版27上 SB8遺物出土状況
 下 SB9(東から)
 図版28上 SB9遺物出土状況(試掘トレンチ)
 下 SD1遺物出土状況(試掘トレンチ)
 図版29上 SD2遺物出土状況(南から)
 下 SD2遺物出土状況(溝北半、西から)
 図版30上 SK5遺物出土状況(南から)
 下 SK2遺物出土状況(南から)

F 地点写真図版

- 図版31上 SB1(東から)
 下 SB1遺物出土状況
 図版32上 SB2・SB2-1(南東から)
 下 SB3(東から)

- 図版33上 S B 3 遺物出土状況(欠山式)
 下 S B 4・S B 4-2 (南から)
- 図版34上 S B 5・S B 5-2 (南から)
 下 S B 6・S B 6-2 (南から)
- 図版35上 S B 6 遺物出土状況No.1
 中左 S B 6 遺物出土状況No.2
 中右 S B 6 遺物出土状況No.3
 下 S B 7・S B 7-2 (右側はS B 8・S B 8-2、南側から)
- 図版36上 S B 8 (南側から)
 中左 S B 8 炉跡
 中右 S B 8 遺物出土状況No.1
 下左 S B 8 遺物出土状況No.2
 下右 S B 8 遺物出土状況No.3
- 図版37上 S B 8・S B 8-2・S B 7・S B 7-2 (手前はS B 9、東から)
 下 S B 9 (右上はS B 3、左下はS B 8、西から)
- 図版38上 S B 10・S B 10-2 (上はS B 11・S B 12、西から)
 下 S B 11(南から)
- 図版39上 S B 12(南から)
 中左 S B 13(左はS B 14、西から)
 中右 S B 13炉跡
 下 S B 14(南から)
- 図版40上 S B 15(上はS B 16、西から)
 下 S B 16・S B 16-2・S B 16-3・S B 16-4 (西から)
- 図版41上 S H 1 (南から)
 下 S H 2 (西から)

E・G地点写真図版

- 図版42上左 E地点土器棺出土状況(確認調査)
 上右 E地点不明遺構遺物出土状況(確認調査)
 中 G地点S B 1 (南から)
 下左 G地点S B 1 炉跡
 下右 G地点S B 1 遺物出土状況(小型石斧)

遺構図版目次

- 図版43 B地点遺構配置図〔フジヤマ〕
図版44 B地点遺構平面図(中央区)(No.1)〔フジヤマ〕
図版45 B地点遺構平面図(中央区)(No.2)〔フジヤマ〕
図版46 B地点遺構平面図(中央区)(No.3)〔フジヤマ〕
図版47 B地点遺構平面図(中央区・東区)(No.4)〔フジヤマ〕
図版48 B地点遺構平面図(東区)(No.5)〔フジヤマ〕
図版49 B地点土坑実測図(S K 9・11・21~25)
図版50 C地点遺構配置図(No.1)〔フジヤマ・柴田〕
図版51 C地点遺構配置図(No.2)〔フジヤマ〕
図版52 C地点遺構配置図(No.3)〔フジヤマ〕
図版53 C地点遺構平面図(No.1)
図版54 C地点遺構平面図(No.2)
図版55 C地点遺構平面図(No.3)
図版56 C地点土坑・土器棺および遺物出土状況実測図(S P 1・2、S K 2・4・23、S D 32)
図版57 C地点土坑実測図(S K 9・10・12・13・15・16)
図版58 C地点1・2号墓実測図(S F 1・2)
図版59 C地点3・4号墓実測図(S F 3・4)
図版60 C地点保存用地現況測量図(C'地点)
図版61 D地点遺構配置図(上)、D地点土坑実測図(下)
図版62 D地点S H 1・2・3、S K 4、S B 9実測図
図版63 D地点S H 4・5・6(上)、S H 7・8(下)実測図
図版64 D地点S H 12・13(上)、S H 14・15(下)実測図
図版65 D地点S B 1(上)、S B 2(下)実測図
図版66 D地点S B 3、S H 9・10・11実測図
図版67 D地点S B 4・5実測図
図版68 D地点S B 6・11・12、S H 17・18実測図(下はS B 6内遺物出土状況)
図版69 D地点S B 7(上)、S H 19(左下)、S H 16(右下)実測図
図版70 D地点S X 1、S B 8、S K 5実測図〔フジヤマ〕
図版71 F地点遺構配置図
図版72 F地点S B 1(上)、S B 2(下)実測図
図版73 F地点S B 3(上)、S B 4(下)実測図
図版74 F地点S B 5(上)、S B 6(下)実測図
図版75 F地点S B 7(上)、S B 7-2(下)実測図
図版76 F地点S B 8実測図
図版77 F地点S B 8-2(上)、S B 9(下)実測図
図版78 F地点S B 10(上)、S B 12(左下)、S B 11(右下)実測図
図版79 F地点S B 13(左上)、S B 14(右上)、S B 15(下)実測図
図版80 F地点S B 16(上)、S B 17(下)実測図

- 図版81 F地点SH 1 (上)、SH 3 (中)、SH 2 (下)実測図
図版82 E地点全体図(上)、E地点土器棺出土状況(下)実測図
図版83 G地点SB 1 実測図

別図図版目次

- 別図1 団子塚遺跡周辺の地形および調査地点〔松和・柴田〕
別図2 F地点SB 6 内遺物出土状態〔フジヤマ〕

I 調査の経過

1987年1月4日から同年3月31日までの間に、ワコーゴルフ倶楽部練習場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行った。この調査は、ゴルフ練習場建設に伴うものであったが、この時点から業者の側には、将来はゴルフショートコースを併設したいという計画があった。

この計画に伴う文化財の分布調査の依頼が1988年10月にあった。

これを受けて教育委員会では、分布調査を柴田 稔氏に依頼し、1988年11月3日現地調査を行い、柴田氏より「浅羽町諸井字北山地内の埋蔵文化財分布調査について」という報告書が提出された。分布調査では、浅羽町域の工事対象地には遺跡3箇所、古墳21基が予測された。また、「遺跡の分布密度が普通以上に高い場所であるばかりか、文化財として貴重な資料が埋蔵されている可能性が高い場所と考えられる。……………相当広い範囲に遺跡の可能性を拡大して考える必要があると思われる。」という所見を添付して業者に報告した。

一方、工事の対象範囲が隣接の袋井市にもまたがっており、遺跡を市町境が分断している可能性が高いために、静岡県 の指導をうけて袋井市との協議に入った。

この協議は1988年12月21日を第1回として数度開催された。

協議では、保存対策、調査が必要な地点の袋井市との合同調査計画、調査実施時期の調整などが話し合いの対象となった。

調査の時期については、ゴルフ場建設の諸手続きの進行に併せて検討することとしたが、袋井市、浅羽町共に1989年度は他の調査が計画されており、事実上不可能であった。

合同の調査については、各方面から協議したが、最終的には袋井市、浅羽町共に独自の調査体制でのぞむこととし、境界線上にある遺跡については随時協議することとした。

遺跡の保存については、設計変更をも含めて協議を重ねた。浅羽町側については、原則として現況で確認できる古墳は全て保存し、遺跡についても極力工事対象から減らすことで業者の同意を得た。

この保存計画では、業者側も文化財保護の精神を良く理解し多大な協力を得られた。これらの協議によって保存した部分については後に記す。

このような事前の協議を行った後、1989年12月に調査計画と予算を明示し、さらに工事計画との整合を計った。

1990年4月9日に、諸井地区埋蔵文化財に関する協定と、発掘調査委託契約を締結し、発掘調査の準備を開始した。

発掘調査は1990年5月1日に開始した。

調査は遺跡確認から開始した。

確認調査は原則としてトレンチ調査であるが、その設定状況は全体図に示した。

第1次の確認調査は、D、G、E、Fの順に行ったがその概要は後に記す。

この確認調査の結果に基づいて5月21日に業者と教育委員会で協議し、D、E地点は現状保存し、G、F地点は発掘調査をすることとした。ただし、後にD地点は事実上遺跡を破壊する可能性が出て来たために、工事面積を約30%減らして発掘調査を行った。

B地点は茶の美園であり、1番茶の時期に確認調査をして茶園を荒らすのが忍びがたく、8月以降に確認調査をすることとした。

C地点は当初から遺構の存在が確実だったために、地形測量後、ただちに面調査を行った。

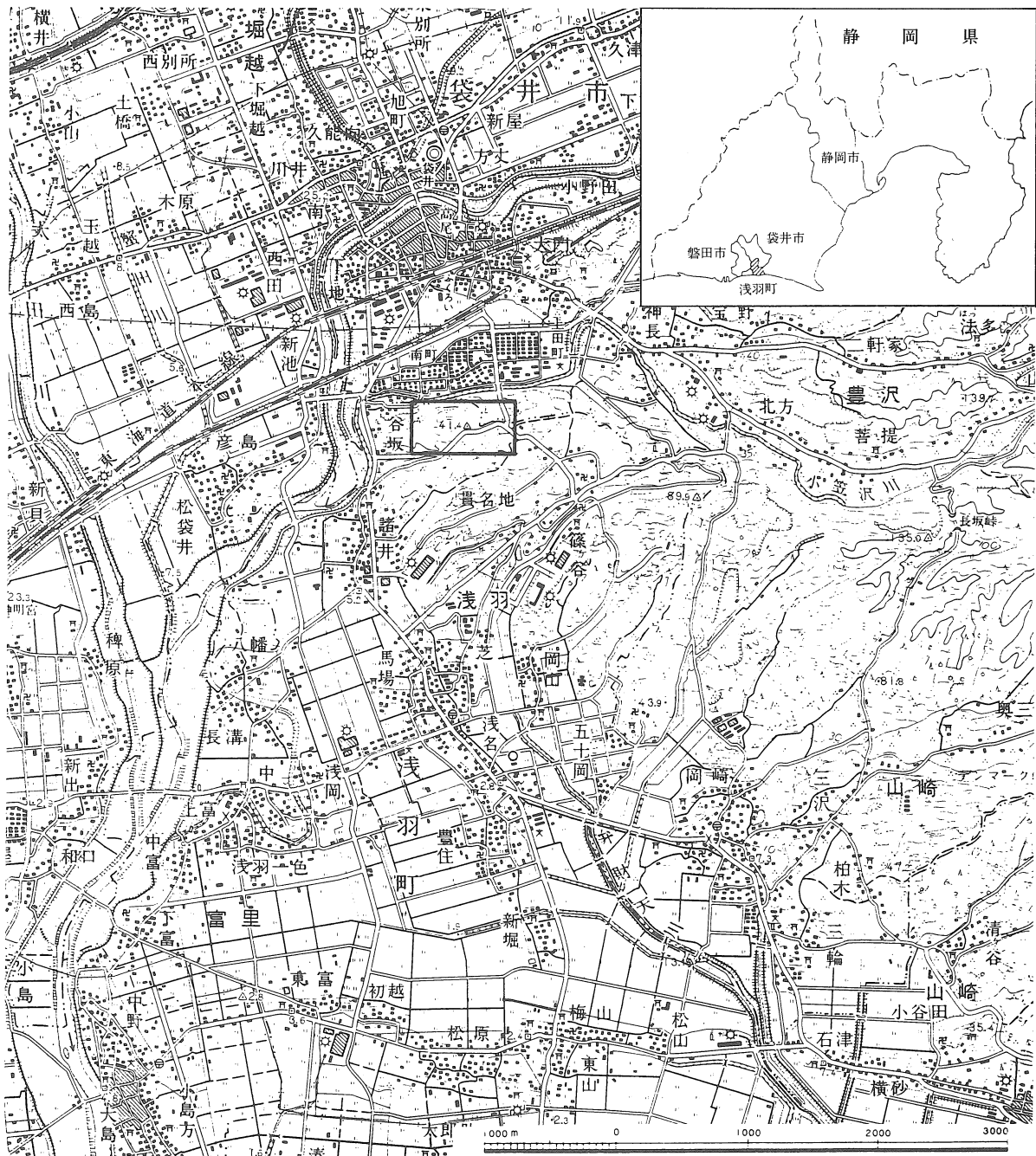
10月21日にはF地点を中心とした第1回現地見学会を行い、E・F・G地点の調査を完了した。

B地点の調査は、F地点の調査が終了した後に開始し、B地点終了次第D地点を開始した。

1月27日にはB・C・D地点を中心とした第2回現地見学会を行い、3月末日に調査は終了した。

今回の調査は、ゴルフのショートコースの造成ということで、調査の進行と遺跡の内容に併せて随時保存計画や調査計画を検討し策定するという作業が伴っていた。また、後半は工事との同時進行になったために、調査と工事との調整も必要になった。したがって、これらの調整のために調査期間を通じて、隔週で現場会議を行った。

現場会議は、教育委員会事務局、調査担当者、原因者である和光商事、工事担当者の石川建設で構成したが、調査の進行にはこの会議が極めて有効に作用した。



第1図 位置図 (NI-53-2-4使用)

II 周辺の環境

団子塚遺跡は、浅羽町諸井字北山、袋井市高尾字向山に所在する。

本遺跡周辺の地理的環境は、すでに加藤芳朗氏によって克明に記されている（註1）が、小笠山塊の高位段丘に立地している。

段丘面は侵食が進み、丘陵地形に近い状態にまで至っているが、北原、南原、弥太井原などの通称があるように、小規模な平坦地が鞍部を挟みながら連続している。本遺跡もこのような小規模な平坦地に立地している。

侵食によって形成された谷地形は、主谷、支谷、小支谷という分類ができるほどに入り込んでおり、各所から伏流水の湧出がみられる。谷地形の出口は、完新世の原野谷川の自然堤防に塞がれて、伏流水を溜めた池沼化した状況が現在でも観察できる。

小笠山塊の洪積層に沖積層が覆い被さる浅羽町諸井・浅羽付近の微高地は、原野谷川の堆積によるが、これらや、南に伸びる浅名・新堀などの自然堤防上での遺跡立地をみると、少なくとも弥生時代後期には生活可能なまでに安定していたことがうかがえる。

第3図は、遺跡立地を中心とした検討から復元した浅羽平地の状況である。このような状況がいつ頃に成立し、また、いつ頃までに現代の景観になったかは正確には表現できない。しかし、このような地形が縄文海進とその後に続いた海退とによって成立したことは確実であり（註2）、この景観の一部は江戸時代にも残存していた（註3）ことが知られており、この観点に立てば、松山遺跡（註4）などに縄文人の進出が見られる縄文時代後期頃には類似した景観となり、水田開発が進んだ時期まで残存していたと見て良いであろう。したがって、この景観を弥生から奈良時代頃の浅羽平地の景観とみることは可能であろう。

具体的な解説は別の機会に行うとして、浅羽町内の遺跡を理解する上で重要になりそうな、【宝水川】について若干を記す。

宝水は、江戸時代に浅羽平地を対象に存在した、浅羽井組との関連でとらえることが出来る（註5）。土地の伝承では、宝野（袋井市宝野）の水という意味で宝水と呼んだのではないかとされているが、【宝水川】の起点が、袋井市宝野や豊沢という「ハウ」と読める地名の水が滞水する笠西池にあることから見れば、傾聴に値する内容である。

この【宝水川】は、本来は原野谷川であったものが、流路の移動によって名残川となり小笠山塊の伏流水を集めて流れるようになったもので、その意味からいえば小笠沢川の一部ともいえる。

この川がいつ頃成立したかは明確ではないが、笠西池成立の原因は、谷の出口を原野谷川の自然堤防が塞ぎ止めたためであり、この自然堤防上に弥生時代後期の遺跡が成立していることからみると、池の成立はそれよりも古く、その排水路としての機能を考えれば、【宝水川】自体も弥生時代には成立していたとしなくてはならない。

したがって、図に示したように、笠西池と近世まで浅羽町南部に残存した潟湖を結ぶ【宝水川】が弥生時代以降には存在したと理解できる。

さて、歴史的観点に立つと、この付近は浅羽町でもっとも早くから人類の足跡が記された地区である。

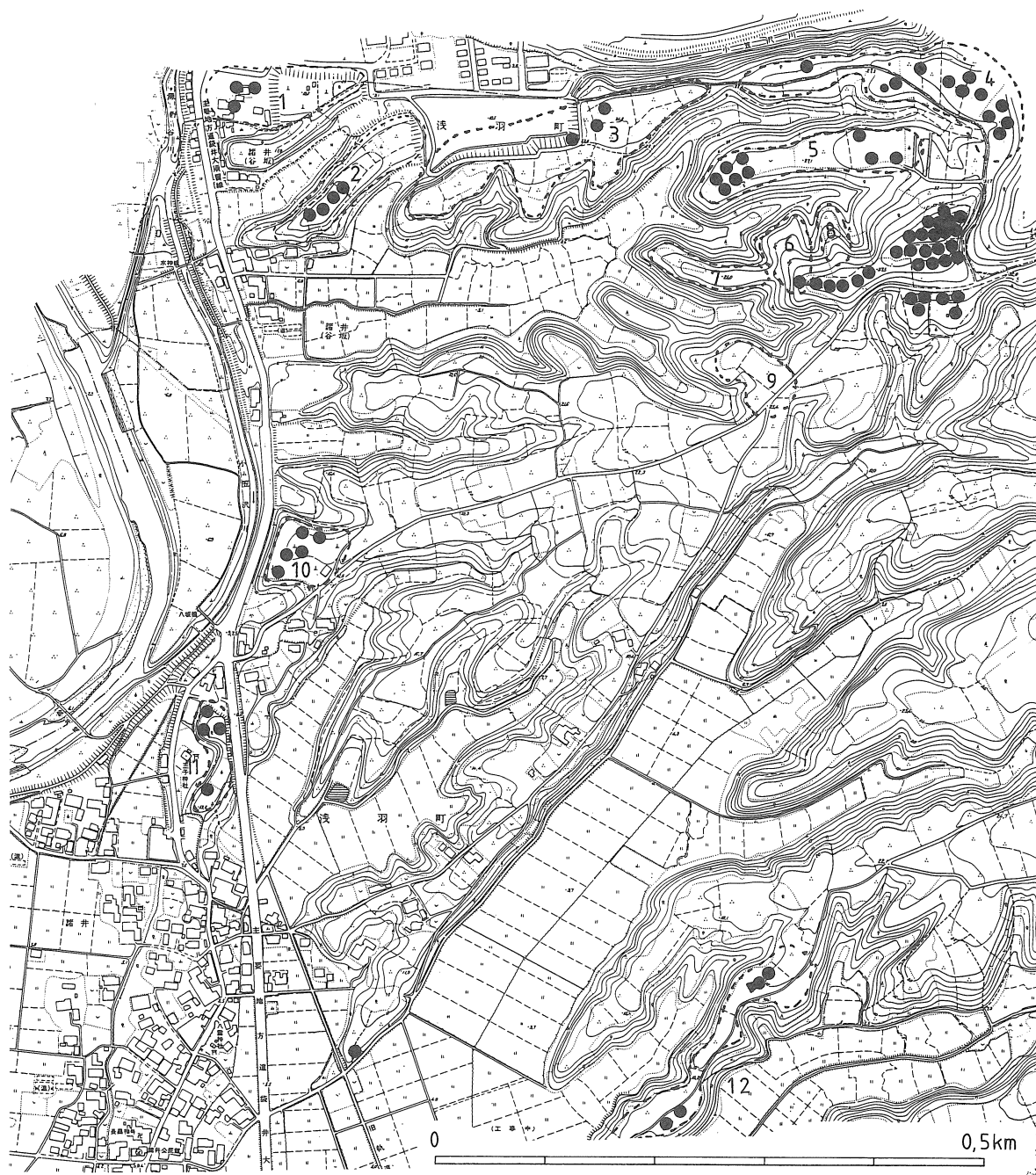
北山遺跡(21)や、団子塚遺跡F地点(1)では先土器時代にさかのぼり得る石器が採集されている。また、遺跡の調査も町内では比較的進んでいる地区でもある。

ここで報告する団子塚遺跡を除いても、谷坂遺跡(20、註6)、北山遺跡(21、註7)、北原遺跡(22、

註8)、王子遺跡(23、註9)、貫名地遺跡(24、註10)、十二所遺跡(3、註11)、古新田遺跡(2、註12)などが調査され、報告書が刊行されている。

これらの遺跡はいずれも弥生時代の遺構ないしは遺物を出土しているが、墳墓跡である北山、王子

釜 井 市



第2図 周辺の遺跡分布図

1, 谷坂遺跡、2, 北山遺跡、3, 団子塚遺跡B地点、4, 団子塚遺跡C地点、5, 団子塚遺跡D地点、6, 団子塚遺跡E地点、7, 団子塚遺跡F地点、8, 団子塚遺跡G地点、9, 北原遺跡、10, 山畑遺跡、11, 王子遺跡、12, 貫名地遺跡 ●は古墳、名称は省略

浅羽町1971年発行地図使用(1968年頃測量)

谷坂遺跡からは明瞭な形では住居跡は発見できなかったが、北原遺跡では弥生時代中期の白岩式から後期の菊川式の竪穴住居跡21軒と菊川式の掘立柱建物跡5棟が調査された。この竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、4期に分けられるが、その第4期には1世帯に1倉庫の組み合わせが予測された。

[illegible]

1、 団子塚(先土器～古墳)、 2、 古新田(縄文～古墳)、 3、 十二所(弥生～鎌倉)、 4、 新堀(弥生～鎌倉)、 5、 松山(縄文～鎌倉)、 6、 権現山(縄文～鎌倉)、 7、 大場稲荷古墳(古墳)、 8、 地藏山古墳(古墳)、 9、 大門(縄文～鎌倉、袋井市)、 10、 関口(弥生～、袋井市)、 11、 長者平(縄文～古墳、袋井市)、 12、 大畑(縄文～鎌倉、袋井市)、 13、 松尾(奈良、大須賀町)、 14、 天王森古楠神社(弥生～鎌倉、大須賀町)、 15、 塩口(古墳～鎌倉、福田町)、 16、 西貝塚(縄文～弥生、磐田市)、 17、 野際(弥生～鎌倉、磐田市)、 18、 長江崎(弥生～鎌倉、磐田市)、 19、 欽影(弥生～鎌倉、磐田市)、 20、 谷坂(縄文～古墳、袋井市)、 21、 北山(先土器～古墳)、 22、 北原(弥生～古墳)、 23、 王子(弥生～古墳)、 24、 貫名地(弥生～古墳)

▲、洪積地の遺跡、△、舌状台地末端の沖積地の遺跡、●、自然堤防上の遺跡、⊗、砂堤上の遺跡、×、沖積地の古墳。台地上の古墳・窯跡、及び、平安時代以降の遺跡は省略。名称は歴史的に使用されていたものを準用。（ ）内は字名・通称を使用。スクリーンは水域。

北山遺跡からは中期末から後期の方形周溝墓 6 基が調査された。この内、1 号墓からは 262 個の管玉が発見されている。

王子遺跡は、周溝墓と後期の土器棺が発見された。周溝墓は時期を明確にすることができなかったが、現代的に考えれば中期の嶺田式の時期と考えてもよいのかもしれない。

以上のように要約される団子塚遺跡周辺の環境のなかに、今回の調査の成果を加えたことで、この調査が浅羽町内の遺跡を調査する時の課題を整理する役割を果たしたように思われる。

註

- 註 1 加藤芳朗 「大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地」『袋井市大畑遺跡』袋井市教育委員会 1984 その他
- 註 2 大庭正八 「袋井市域の自然環境」『袋井市史』通史編 1983
- 註 3 浅羽町指定文化財 「裁許状絵図 4 点」原 平吉家所蔵
1686（貞享 3）年の絵図の概要は註 5 を参照
- 註 4 柴田 稔 『権現山遺跡』浅羽町教育委員会 1987 「周辺の環境参照」
- 註 5 原田 和 『浅羽風土記』浅羽町教育委員会 1978 初版は 1957
柴田 稔 『青木遺跡』浅羽町教育委員会 1984
- 註 6 大谷純一（純仁） 「谷坂 1. 2. 3 号墳」『埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道 1965
- 註 7 柴田 稔 『北山遺跡』浅羽町教育委員会 1987
- 註 8 柴田 稔 『北原遺跡』浅羽町教育委員会 1987
- 註 9 柴田 稔 『王子遺跡』浅羽町教育委員会 1983
- 註 10 1966 年に、古墳 2 基と弥生時代後期の竪穴住居跡が調査された。内 6 号墳は円礫と垂角礫の模様積み状で、側壁の一部は丹塗りである。出土遺物には金銅装の大刀、須恵器などがある。築造時期は、須恵器から 7 世紀中葉と考えられる。出土須恵器の一部は註 6 文献に掲載してある。また、30 年前にもなろうとしている記憶の中に、6 世紀代と思われる土師器が確認調査のトレンチから相当数出土していた。古新田遺跡との関連が注目される。
- 註 11 柴田 稔 『十二所遺跡』浅羽町教育委員会 1989
- 註 12 柴田 稔・柴田 睦 『古新田遺跡』浅羽町教育委員会 1991

III 各地点の概要

(1) 概 況

ワコーゴルフ場建設工事に伴う発掘調査は6地点に分かれており、調査の総面積は、約10,800㎡である。内訳は、トレンチによる確認調査約900㎡、面調査約8,200㎡、現況測量調査約1,700㎡である。また、工事対象地内には、調査の対象としないで保存した古墳15基、現況測量調査だけで現状保存した古墳2基、および、その範囲内に所在すると思われる遺跡がある。

次にこれらについての概況を記すが、保存区域については記述の便宜を計るために、隣接ないしは包括される地点名に「あるいは」を付けて呼ぶこととした。

B地点

遺跡が予測された範囲に総延長約400m（面積約400㎡）のトレンチを設定し、重機を利用して遺構の確認を行った。

確認調査の結果は、総面積の90%以上が茶園改植のための深耕によって完全に破壊されていた。破壊を免れていた部分は、茶園改植が行われていなかった畑3箇所と道路分で、その面積は約2,200㎡である。

調査箇所が点在したために、西・中央・東区とに分けた。

中央区は最も広く、袋井市域とも連続しているが、浅羽町側では溝状遺構33条、土坑17基、古墳3基が発見された。溝状遺構は、その組み合わせから少なくとも8基の方形周溝墓が確認されたが、周溝墓にならない例も少なくない。

また、周溝の一部が残存した古墳3基が発見された。

出土遺物は弥生土器と古墳に伴う須恵器である。弥生土器は1例を除いて全て嶺田式に属するものである。また、須恵器は6世紀後葉に属するものである。

西区は、畑間の私道分だけが幅約2m、長さ約30mにわたって残存していただけである。

調査では、溝状遺構の一部が発見されたが、発見状況は不鮮明であった。しかし、遺構が発見されたことから、B地点の周溝墓群はこの付近にまで及んでいたと理解した。

東区は、2箇所に分かれている。

西側の区からは、調査区の西端に溝状遺構がわずかに残存していた他に、近現代の火葬跡と思われる焼土が発見された。

東側の区からは、溝状遺構6条、土坑8基などが発見された。溝条遺構は、その組み合わせから2基以上の周溝墓が確認できる。また、土坑は、古墳時代に属する可能性のある1例を除いて弥生時代の埋葬施設と考えられる。

出土遺物は、弥生土器1点と須恵器1片であり、弥生土器は白岩式でも後期初頭頃に位置付けられるものである。また、嶺田式に含まれる小破片も出土した。

C地点

B地点とは鞍部によって区別できる。

調査以前は、この地点の中央よりの部分（C'地点）の西側付近の鞍部で地点を分けたが、袋井市側の調査で遺構が連続していることが確認されたために、地点を統一した。

この地点の西半分は、平坦地を縦断するように境界が通過しており、分断された遺構も少なくなかった。このため、凡例に示したように袋井市と浅羽町とに分けて報告する。

浅羽町側として調査した面積は約2,600㎡である。

また、浅羽町側として報告する遺構は、溝状遺構60条、土坑23基、土器棺2基、横穴式石室系に属する土坑（小石室）3基ある。溝状遺構はその組み合わせから19基の周溝墓が確認されたが、さらに増える可能性がある。土坑は大半が周溝墓に伴うが一部は単独である。

出土遺物は弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器である。

弥生土器は、土器棺として使用されていた壺形土器4点（二之宮式）を除くと、嶺田式土器片1点と、白岩式土器片少量である。

須恵器は、7世紀前葉に属する坏とフラスコ形瓶各1点、8世紀に属する蓋坏及び短頸壺であり、土師器は坏ないしは高坏と脚付広口壺各1点である。

C'地点

C地点の中央付近に用地内の緑地として保存される部分が約1,700㎡ある。

この地点には、概観から確認できる古墳2基が所在している。また、周辺の調査の状況から周溝墓群の一部も含まれていると考えられる。

保存されることになったが、周辺はすべてグリーンとなるために、将来立ち入りの規制が行われる可能性があり、現況測量を行った。

古墳の概況を記すと次のようである。

11号墳 径約4.5m、高さ約1.0mの円墳と思われる。中央に南東に開放する盗掘穴があり、石室の石材と思われる長径0.3m前後の円礫数個がみられる。

状況から小型の横穴式石室を主体部とした古墳と考えられる。

12号墳 径約3.0m、高さ約1.0mの極めて小型の円墳であろう。斜面に立地しているために北側からはほとんど高さを感じない。中央に南東に開放する盗掘穴があり、内部に径0.2m前後の礫が数個みられる。

状況から、横穴式石室系の土坑あるいは小石室が主体部となる古墳と考えられる。

いずれの古墳も墳丘が小型であり、興味深い例である。

D地点

C地点とは支谷を挟んだ南側の尾根に古墳6基が確認されている地点があり、この地点をD地点とした。B・F地点に挟まれているばかりか、C地点ともほぼ同じ標高のために沖積地からは良く見えない特徴がある。

コースの一部になる部分だけ確認調査を行った。この調査は、総延長約150m（面積約150㎡）のトレンチ調査である。調査の結果、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が高い密度で発見されたために、協議して工事対象範囲を約30%減らし、約1,500㎡に対して調査を行った。

調査の結果、周溝墓3基、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡18棟、土坑5基、溝状遺構14条が発見された。

周溝墓は、1基が時期不明であり、他の2基は白岩式でも新しい段階頃である。竪穴住居跡は二之宮式から菊川式であり、掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構も同時期である。

出土遺物は、弥生土器多数、磨製石斧2丁、鉄剣2振である。

D'地点

D地点の発掘調査対象地の西側を仮称した。

西端部には6基の古墳が所在している。東側の2基は畑地化のために各々の半分が削平されているが、他の4基は保存良好である。

いずれも径10 m前後の円墳であり、一部の古墳は、古い盗掘で横穴式石室が露頭し天井石まで残存していたが、1984年頃に再度の盗掘を受けたために、現在は埋め戻してある。

また、発掘調査した地点から弥生時代の遺構が続いていることは確実である。

この地点は、茶樹を伐採した後に苗木を植林し、用地内の緑地として保存した。

D”地点

発掘調査した地点の東側を仮称した。

概観では古墳の墳丘が1基確認できるが、須恵器の分布から他に2基が所在すると考えられる。また、弥生時代の遺構も所在する。

この地点は造成協力地として保存した。

E地点

D地点の南側の尾根から北に派生した小尾根である。

確認調査の結果溝状遺構5条、土坑および土坑状遺構4基、土器棺1基を発見したため、協議してゴルフコース内に取り込むが、地下を傷めないで芝貼りして保存することとした。

F地点

D地点南側の尾根西端の稜部が小規模な平坦面となる部分があり、総延長約100 m（面積約130 m²）のトレンチを設定して確認調査を行った結果、弥生時代の遺跡であることが判明し、面調査を行った。調査の面積は約1,800 m²である。

調査の結果、竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡3棟が発見された。

出土遺物は、弥生土器多数、磨製石斧1点の他に、先土器時代のグレーバー1点が採集された。

弥生土器は、二之宮式から菊川式に属するものであるが、欠山式も含まれている。

G地点

D地点の真南側で、F地点と同一尾根から北に伸びる小尾根がある。この尾根には平坦部はまったく見られず、緩傾斜の丘陵状である。浅羽町で団子塚と通称している群集墳に隣接していることから総延長約110 mのトレンチを設定して確認調査を行った。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡1軒を発見したため、この部分の面調査を行った。面調査の面積は約100 m²である。

発見した遺構は竪穴住居跡1軒であり、出土遺物は、弥生時代後期初頭に属する白岩式土器と小型磨製石斧である。

G’地点

団子塚の群集墳の南西端にあたる。現状では山林中に古墳1基が確認できるだけであるが、茶園の中にわずかであるが古墳状の高まりが5箇所認められた。これは、昭和初期に原田 和氏が行った分布調査の基数と類似しており、墳丘を削平された古墳が残存していると考えた。

この地点は、茶樹を伐採した後に苗木を植林して緑地として保存した。

(2) B地点の概要

B地点は、茶樹の改植に伴う攪乱によって大半が破壊されており、結果的には遺跡の極一部を調査したに過ぎない。

調査では、周溝墓、土坑、溝状遺構、古墳などが発見された。

以下にその概要を記す。

周溝墓の概要

一部が袋井市に含まれるが、浅羽町側では11基が確認された。しかし、後に示すC地点とは異なって、整然とした構造のものが極めて少ない。このために、論考の後でないと周溝墓と言えない例も少なくない。SX1～11に関しては、表－1に整理した。

四方に溝が巡ることが確実な例は、SX6が1例存在する。SX7は、西側の溝が不規則であり、別の遺構の可能性がある。一方、SX2・3・5・8は、攪乱が伴っていることから四方に溝が巡るのか「コ」字状になるのかが確認できない。

SX4は、西側に溝が発見できないために、「コ」字状に溝が巡る例である。

SX1は、西側が攪乱されており、北側の溝も発見できないために、「コ」字状あるいは「L」字状になるであろう。

SD10・11は、不規則に溝が巡る周溝墓の一種であろう。

以上のように、やや疑問を持つものも含めて11基を周溝墓としたが、これらとは別に周溝墓とも呼び得る例がある。

SK9・10・11は、長さが3m以下になるが、溝とも土坑ともいえる遺構であり、「コ」字状に配置されている。これらは、他の例に比較して陸橋部が広いことや、他の例がこの地点に限定すると溝に遺物を伴うことが多いのに対して、遺物をまったく含まないなどの違いがある。

一応、企画性のある土坑群と理解したが、周溝墓の可能性もある。

周溝墓とすれば、方台部が約3.5×3.1mとなる。

SK12・13も「L」字状の配置を持つが、陸橋部があまりにも広いことから、土坑と考えた。

SK20とSD49は関連した遺構であろう。他地点を含めて、北斜面には周溝墓が所在しないことから、大型の土坑と考えているが、C地点の例にはこれに類した周溝墓もあり、周溝墓の可能性もある。

当地点で周溝墓とした遺構から出土した遺物は、すべて土器であり嶺田式に属している。SD49やSD21など、周溝墓にならない例には白岩式や二之宮式が出土していることから、遺物を伴わないSX3やSX4までも嶺田式に属する周溝墓とはいえないまでも、基本的には嶺田式の時期に営まれた周溝墓として理解できる。特に、中央区の8基は嶺田式の時期と考えたい。

中央区の周溝墓群では、次のような特徴がある。

SX2・3、SX7・8のように、隣接して方位も近似した例もあるが、全体的には乱雑な配置が目立ち分布にも規則性が感じられない。

また、周溝墓にならない溝や、土坑が多くみられる。特に、土坑は17基が発見されたが、SK1・14を除くとすべてが周溝墓の埋葬施設にならないものであり、土坑群と周溝墓群の共存が考えられる。

土坑群と周溝墓群との新古関係は確認できなかったが、SX4では切り合いが目立ち、SX5と7との間ではどちらかを避けている状況がうかがえる。

表－１ B地点周溝墓観察表

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
SX1	(3.5)×(3.0)	(4.5)×(4.0)	SD1・2	なし
概要	SD1とSD2は、陸橋部を持って「L」字状を構成する。東側の溝が発見できない。西側は土取りによって消滅している。覆土の上層は暗褐色の有機土であるが、下部は有機質が少なく地山の黄褐色粘質土に近い状況になる。			
埋葬施設	SK1は東に偏り、かつ小型であるが埋葬施設の一部と考えられる。 長さ約1.2m、幅約0.4m、深さ約0.2mで舟形の平面形を呈している。			
出土遺物	SD1の床面から嶺田式の壺形土器が出土した。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
SX2	5.2×(2.3)	8.6×(3.4)	SD4・5・6	なし
概要	西側は土取りによって消滅している。確認できる隅には陸橋部がある。			
出土遺物	SD4から嶺田式の壺形土器口頸部破片が出土した。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
SX3	6.0×(3.7)	(8.6)×(4.9)	SD7・8・9	なし
概要	西側は土取りによって消滅している。また、SD9の北半分は近現代の農道によって破壊されている。SD10は、深さ0.1m程の浅い溝であるが、SD7と切り合っている。この両者の新古関係は不明であり、SX3とSD10との関連も不明である。 SX2とSX3は、類似した方位を持っている。また、SK2もこれに類している。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
SX4	9.5×6.6	11.5×9.5	SD11・12・13	なし
概要	西側の溝は発見されないために、「コ」字状に溝が巡る。SD11とSD12は連続するが、SD12とSD13の関係は不明である。 SX6を構成するSD16・17と切り合っている。また、SD11はSD20・21と、SD12はSK3・4・5、SD16・17と切り合っているが前後関係は不明である。			
出土遺物	周溝墓を構成する溝からの出土遺物はないが、SD21からは二之宮式土器が出土した。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
SX5	5.9×(5.2)	8.0×(6.0)	SD22・24・25	なし
概要	北側は切通し状になった近現代の農道の破壊で消滅している。南側の溝と思われるSD25は、SX6の溝であるSD17と重複している。また、SD22も南端が重複する。 SD23は所属が明確ではないが、SD22とほぼ平行している。			
埋葬施設	方台部の中にあるということでSK7は当周溝墓の埋葬施設の可能性がある。 長さ約1.8m、幅約0.75m、深さ約0.1mで平面形は隅丸長方形である。			
出土遺物	SD24から頸部以下が残存する胴部穿孔の壺形土器、SD23から保存状況が極めて悪い			

土器片少量が出土した。いずれも嶺田式である。

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 6	5.3×4.4	8.6×7.6	S D16・17・18・19	なし
概要	S X 4・5 と溝の一部が重複している。S X 6 とは近似した方位であるが、S X 4 とは方位のずれが大きい。S D19は、13号墳（S G13）の墳丘下になることから、他の溝に比較すると発見面が高く、構築時の様子がうかがえる。 S D19は、長さ約5.4m、幅約1.6m、深さ約0.45mで舟形の溝の西側に、幅約0.6m、深さ約0.1mの溝が接続し、弧を描きながらS D16方向に伸びている。この溝は、S D13と切り合っているためにS D16に接続することが確認できないが、接続する前提で考えると、S D16の西壁近くにつながるようになり、この部分に方台部の平面形としては突出部ができる。 当周溝墓とは、他にS D23・33・44、S K 6・18などが重複している。			
出土遺物	S D19の東端から、体部下半以下を欠失した嶺田式に属する壺形土器1点が出土した。			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 7	7.0×4.9	9.0×6.7	S D26・27・28・29	なし
概要	S D29は、他の三つの溝と対比すると方位にずれがあり、別の遺構の可能性もある。その場合には「コ」字状の周溝墓となる。 S D28は深さ約0.15mの溝であるが、東端部で1段浅くなり北に折れる。S D26・28は、深さ0.2～0.25mの浅い溝だが整然としている。S D29の南端はS K15と重複している。 S K16はS D28と重複しているが、嶺田式土器を出土している。			
埋葬施設	S K14は方台部の内にあるが、溝とは方位にずれがある。一応、当周溝墓の埋葬施設として扱う。 長さ約1.8m、幅約0.9m、深さは0.05mにも満たない。			
出土遺物	S D27からほぼ完形の嶺田式の壺形土器が出土し、S D28から嶺田式の壺形土器頸部が出土した。S D29からは時期不明の土器片が出土した。またS K16出土の壺形土器も嶺田式である。			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 8	3.4×(1.2)	4.5×(2.2)	S D30・31・32	なし
概要	小型の周溝墓である。溝の規模も小型であるが、構造的には整然としている。 南側は茶樹の改植によって消失している。			
出土遺物	S D31から嶺田式の壺形土器体部破片が出土している。			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X10	8.0×5.0	10.2×7.4	S D46・47・48	なし
概要	S D46と48は稜線に直行し、両者はほぼ平行している。稜線に平行する側の溝は不明確である。S D47はややずれているが、当周溝墓に伴うと考えた。S D48はS K20に切られている。S D47は部分的には削り出し状である。			
埋葬施設	方台部の中央付近で稜線上にS K21と22があり、いずれも当周溝墓の埋葬施設と考えている。			

S K21は、0.85×0.75mの隅丸方形で、深さは約0.15mである。

S K22は、長さ約1.9m、幅約1.2m、深さ約0.25mの隅丸長方形の土坑である。両小口側に棺の小口施設と思われる溝状の落ち込みがある。この溝は深さが0.1m以上あり、鮮明に発見できた。東側では、溝の上端に接するように径約0.25mの礫が1個見られる。また、北側面には礫3個がある。これらは小口板・側板の固定に用いた施設であろう。これらの施設を参考にとすると、棺の規模は、1.5×0.6m程度になる。

出土遺物 S D48から嶺田式の細片が出土した。

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X11	(8.0)×(4.0)	(9.3)×(4.5)	S D50・51	なし
概要	西側が攪乱で消失している。また、南側は急斜面となる。			
	S D50は、稜線に平行している。幅約0.5m、深さ約0.2mで他の周溝墓の溝と比較すると、幅が狭い。S D51は、S D52と重複している。調査の段階ではS D52として行っていたが、掘り進むに従って、S D51の存在が明確になった。			
埋葬施設	S K23と24を埋葬施設と考えた。			
	S K23は、長さ約1.75m、幅約1.3m、深さ約0.5mの隅丸長方形の土坑である。土坑内の南に偏って棺跡が発見された。小口は明瞭ではない。北側は径0.1m程度の礫を意識的に側板の控え積みにしたように観察できたが、いわゆる礫槨ではない。棺跡から棺を推定すると、1.35×0.7m程度になる。			
	S K24は、長さ約2.2m、幅約0.8m、深さ約0.2mの胴張隅丸長方形の土坑である。			
	S K23・24共に斜面に造られているために、南側の壁の立ち上がりはほとんどみられない。			
出土遺物	溝・土坑を含めて出土遺物はない。			

※()内は推定値、単位cm

溝状遺構の概要

溝と土坑の区別は厳密ではない。例えばS D25は、規模的には土坑といえるものであるが、周溝墓を構成するという前提での溝の扱いをした。

このような作業の後に、周溝墓に属さない溝が抽出された。

これらの概要を次に記す。

S D 3 S X 1の北側に所在し、大半が破壊されている。現存長約1.7m、幅約1.6m、深さ約0.25mで、時期不明の土器片少量が出土した。

S D14 中央区の南方のK50のポイントを中心として、明瞭には発見できないが浅い溝が弧を描くように見られる。内部からは6世紀後葉の須恵器片が多数出土した。また、南側の攪乱土内には少量の須恵器と焼土が見られた。

形態や出土遺物から古墳と考えて14号墳とした。

S D15 調査区の西端部のN53付近に浅い凹地が見られ、6世紀後葉の須恵器が少量出土した。溝の形態などは十分に把握できないが、北に弧を描いている。

1950年代に、開墾で古墳を削平した折りに、管玉が出土したと伝えられているのが、この直北側に当たることから、古墳の一部と考えて15号墳とした。なお、管玉は浅羽町諸井の鈴木康仁氏宅に保管されている。

S D20 S D11から北に直角に伸びているが、北端は旧農道によって攪乱され、南端はS D11内で

消える。現存長約2.2m、幅約0.9m、深さ約0.2mで北に傾斜している。出土遺物はない。

SD21 SD11から直角に南に伸びている。北端は、SD11内で消える。現存長約3.6m、幅約1.1m、深さ約0.2mである。発見面の直下から二之宮式土器が出土した。

SD23 SD17とほぼ直交し、SD22とほぼ平行している。長さ約5.7m、幅約1.0m、深さ約0.2mである。床面からやや浮いた位置から時期不明の土器片が出土した。

SD34 SD29の北端付近から弧を描いて途中で断続はあるが、SD16の東側まで続く。SD13の南方にも類した溝が見られるためこれもSD34とした。溝の軌跡は径8～9mの円を描いている。溝の幅は0.3～0.4mで深さは約0.1mである。

SK26の西側付近の発見面から6世紀後葉の須恵器が出土した。

SX6と重複する部分で、不鮮明な溝SD44が隣接するように見られる。この溝は、SD34と関連している可能性がある。

形態や出土遺物から古墳と考え13号墳とした。

SD49 東区の北側斜面から発見したSK20の壁に添って「L」字状に発見した。

幅約0.7m、深さ約0.1mである。溝内から白岩式の新しい段階の脚付甕1点が出土した。

SK20との関連で考えている。

SD52 東区の南斜面から発見した。斜面に弧を描くように掘られ、SD51と重複している。弧の中央にSK25とSK26がある。

出土遺物が皆無のために時期は不明であるが、SK25と係わるとすれば周溝墓の一種という理解もできる。しかし、SK26は、覆土から須恵器片が出土し、古墳時代の可能性が高い土坑であり、これと係わるとすれば、古墳時代の遺構になる。

土坑の概要

土坑ないしは土坑に類似した遺構は、SK1～16、SK18～27の合計26基が調査された。これらの内SK1・7・14・21・22・23・24は周溝墓の埋葬施設として表-1に示した。また、SK9～13は周溝墓の項でも記した。

土坑は、形態から幾つかに分類される。

A類 舟形の土坑 SK1・3・9・10・11・12・13・18など

B類 溝状の土坑 SK2など

C類 箱形の土坑 SK5・7・8・14・21・22・23・24・25など

C1類 箱形の木棺跡が発見された例 SK22・23・25

C2類 小口施設が優先する例 SK22

C3類 その他の例 SK5・7・8・14・21・25

D類 不定形な土坑 SK4・15・16など

E類 開放型の土坑 SK26・27など

SK2 長さ約2.5m、幅約1.0m、深さ約0.15mの浅い溝状である。

SK3 SD11からSD12に曲がる部分で、溝にほぼ直交して北に伸びているが、溝より南には伸びていない。現存長約1.9m、幅約1.0m、深さ約0.25mであるが、長さ2.4m以上にはならない。

SK4 SD11からSD12に曲がる部分にある。わずかに残存しているだけである。

SK5 SD12にほぼ直交して東に伸びるが、西側には伸びない。現存長約1.8m、幅約1.0m、深さ約0.15mである。

SK6 SD17の東端付近で、ほぼ直交して南に伸びる。現存長約0.9m、幅約0.4m、深さ約0.1m

である。

SK8 SD24の東側にある。長さ約1.8m、幅約1.0m、深さ約0.1mである。調査区の東端から発見したために、他の遺構との関連は十分に把握できないが、形態的には周溝墓の埋葬施設に類似している。

SK9 長さ約1.9m、幅約1.0m、深さ約0.2mで小判形を呈している。壁に中段がありいわゆる二段式の土坑である。

SK10 長さ約1.8m、幅約0.5m、深さ約0.1mで舟形を呈している。

SK11 長さ約2.2m、幅約0.9m、深さ約0.25mで舟形を呈している。

SK12 長さ約2.1m、幅約0.7m、深さ約0.15mで舟形を呈している。

SK13 長さ約1.9m、幅約0.5m、深さ約0.2mで舟形を呈している。

SK15 SD29の南端から発見した。不定形とも小判形ともいえる平面形を呈している。現存長約1.8m、幅約0.9m、深さ約0.25mで舟形を呈している。

SK16 SD28の西端部に、南にはみ出したように発見された不定形な土坑である。現存長約1.1m、幅約1.2m、深さ約0.1mである。内部から嶺田式土器が出土した。

SK18 SD18と一部重複して発見された。長さ約3.3m、幅約1.3m、深さ約0.2mの舟形を呈している。溝として扱うべきかも知れないが、土坑で扱った。

SK25 東区南斜面から発見した。SK23と類似した構造である。長さ約2.5m、幅約1.8m、深さ約0.3mの隅丸長方形の土坑である。土坑内の中央に棺跡が発見された。中礫を棺の控え積みのように用いた礫槨状である。棺跡から棺を復元すると、長さ約1.3m、幅約0.6mの箱形である。

SK26 SK25と一部重複して発見された。現存長約1.3m、幅約1.1m、深さ約0.3mで、斜面に直交して南側に開放する土坑であろう。覆土から須恵器片が出土していることから、古墳時代の遺構と考えた。SD52との関連も考えられる。

SK27 SK26と類似した構造である。長さ約3.2m、幅約1.6m、深さ約0.4mで南に開放している。北壁から約2.4m付近で左右がくびれて幅が0.8m程度になる。このために、平面形は両袖状になる。出土遺物はないが、古墳時代の遺構ではないかと考えている。

(3) C地点の概要

遺構の計測値などは表－2に示したが、当地点を縦断するように袋井市との境界があり、遺構が分断されている例が少なからず存在する。これらについては、主体的に所在する側で報告する。また、遺構の記号・番号は両市町で統一してあるが、小型の遺構では欠番が生じていることもある。

当地点の浅羽町分としては弥生時代の周溝墓19基・土器棺2基・周溝墓を構成しない溝状遺構・周溝墓の方台部や溝内に含まれない土坑、古墳に含み得るかに課題が残る古墳時代の墳墓4基がある。

周溝墓の概要

浅羽町分として19基、袋井市も含めると約100基が連続的に構築されている。ここでは浅羽町分の周溝墓を概観する。

C地点全体を概観すると、浅羽町分のSX1と袋井市分のSX38の間は尾根地形の鞍部になり、不明確な遺構は所在するが周溝墓は確認できない。したがって、この部分を境としてC地点は二つの群に分けることが可能である。

周溝墓の形態 周溝墓の形態には多様性が見られるが、方台部が長方形になる例が多い点や地形に準じた構築が行われるなどの共通点もある。これらを区画の方法を基準に分類すると次のようになる。

A類 溝が方形に巡る例。ただし、溝を共有したものも含めた。

A1類 4隅に陸橋部がある例 SX1・SX5・SX12・SX14

A2類 3隅に陸橋部がある例 SX3・SX7・SX10・SX19

A3類 2隅に陸橋部がある例 なし

A4類 1隅に陸橋部がある例 なし

A5類 陸橋部を持たない例 (SX9)

A2類に属する例の内、SX7は北西隅が連続しているが、この部分では溝の深さは変化しないが、幅が極端に狭くなる。また、SX3、SX10も隅部分で段を有したり、別の溝でつながるなどの変化がみられる。

B類 「コ」字状に溝が巡り一方が開放されている例。ただし、溝を共有したものも含めた。

B1類 2隅に陸橋部がある例 SX18

B2類 1隅に陸橋部がある例 SX6・SX11

B3類 陸橋部を持たない例 SX4・SX15・SX16・(SX9)

SX9はSX8との間で溝の共有関係があるとも考えられるために、A・B両類に含めて考えてみた。

C類 斜面を「コ」字状に掘り込んで、方台部の代わりに竪穴住居跡の床状の平坦部を作り、区画の溝が竪穴の壁溝状になる例 SX8・SX13・SX17

この類は3例共に陸橋部は持たない。

A・B・C類の分布をみると、A類は尾根地形の稜線近くに分布し、B類はやや斜面に分布し、C類は急斜面に分布する傾向が強く、基本的には地形による形態の違いと理解できる。ただし、陸橋部の状況をみるとB・C類の溝は「コ」字状に連続する例が多いのに対して、A類にはそのような例が少ない。

重複関係 隣接する周溝墓同士が重複している例は極めて多い。溝の共有を重複と考える前提では、SX7とSX12を除けば全てが何らかの重複関係を持っている。しかし、極端な重複関係を示す例は少なく、SX14とSX15の関係だけである。この重複関係から各周溝墓の前後関係を知る努力は断面

観察も含めて、かなり丁寧に行ってみたが、結果的には全く確認できなかった。

しかし、わずかな重複関係は、溝の共有に準じた理解も可能かと思われる。

群構成 各周溝墓は、溝の共有や隣接関係から数単位の群に整理できる。ただし、周溝墓の構築が地形の影響を受けていることから、方位による分類は行わない。

I 群 S X 1・S X 2・S X 3・S X 4

この群は対角線状に隣接している。また、S X 3は二つの周溝墓の中間に挿入したようにみえる。

II 群 S X 5・S X 7・S X 36・S X 37

溝が共有しながら「田」字状に群を構成している。

III 群 S X 10・S X 12・S X 14・S X 19・S X 20・S X 21・S X 22・S X 23・S X 25

溝一つを共有しながら稜線に添って横に長く連続している。また、S X 16を媒体としてIV群とも関連している。

IV 群 S X 13・S X 15・S X 16・S X 17・S X 18

S X 15・16を中心としてその南側にS X 13・17がある。この両者をつなぐS D 58は群としての関連を検証する手掛かりになった。S X 18はS X 7と溝を共有しているという前提でこの群に含めた。

S X 23やS X 19はS X 16を基準に考えれば同一の群とも考えられるが、S X 14とS X 15の重複関係をみると、III群とIV群は区別されるものであろう。

V 群 S X 6・S X 8・S X 9・S X 11

溝を接して構築する特徴が最も良く現れている群である。

構築時期 出土遺物が極めて少なく時期を判断することが困難なものが多い。

S X 16を構成するS D 49からは、嶺田式に属する壺形土器の破片が出土している。出土位置は床面であるが破片ということから、ただちに周溝墓の時期とすることはできない。しかし、袋井市側のS X 25などからも嶺田式が出土しており、相対的には西よりの周溝墓は嶺田式頃に構築が開始されたとみることができる。

S X 10を構成するS D 32からは、保存状態は極めて悪いが白岩式のもっとも新しい段階の壺形土器が出土した。出土状況をみると、ほぼ完形の状態のものが破片化したとみることができ、S X 10を後期初頭の周溝墓と考えることができる。

以上の2例を除くと出土遺物はほとんどみられない。このために、他の例については時期決定が困難である。しかし、二之宮式あるいは菊川式といった後期の土器を伴う例はない。

なお、S D 31内の土器棺(S P 2)とS X 2の東南外から発見した土器棺(S P 1)はいずれも二之宮式である。しかし、S D 31でみられたように周溝墓とは明らかに前後関係を示している。

周溝墓の埋葬施設 溝に囲まれた方台部から発見された土坑は、溝で大きく切られているもの以外はすべて周溝墓の埋葬施設とした。しかし、これらが明らかに周溝墓に伴うことが確認できた例はない。

土坑の形態には多様性がみられるが、S K 12・13・15は箱形の木棺痕が発見された。これは、B地点東区から発見したS K 22・23・25と類似した構造を示している。この土坑と関連する周溝墓が嶺田式に属する可能性が高いことを含めると興味深い事例であろう。

表－２　Ｃ地点周溝墓観察表

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 1	不明	不明	S D 1・2	不明
概要	大半が農道によって破壊されており、規模などは不明。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 2	11.8×5.9	15.5×9.1	S D・3・4・5・6	なし
概要	方台部の平面形が極端な長方形になる。北東隅がS X 1の南西隅と重複するために、陸橋部が3箇所に見えるが本来は4箇所にある。S K 1の性格は不明。			
出土遺物	S D 5からの時期判定のできない弥生土器片が少量出土した。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 3	5.3×3.4	6.7×(5.0)	S D 7・8・9・10	不明
概要	平面形は長方形で、小型である。S D 8とS D 11を弧を描いて結ぶように掘られたS D 9は当遺構を構成するものか不明。S D 2・4・5とは接する程度に重複し、各周溝墓の透間に造ったような印象を受ける。S D 8・10は浅いが内部の堆積状態が安定していたために周溝墓と認定した。また、S D 6・7・15で周溝墓になる可能性も考えたが、S D 7の位置が中に入り過ぎることから周溝墓から除外した。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 4	9.0×(6.5)	11.8×(8.2)	S D 11・12・13	不明
概要	南斜面に造られており、南側の溝は発見できない。計測値からは平面形が長方形になるが、外観は方形である。溝は「コ」字状に連続しているが、北東隅では段差で、北西隅では溝が狭くなって区別される。S X 6とは一部で重複する。			
埋葬施設	S K 2は方台部中央から南に偏っているが、当墓の埋葬施設と考えた。			
	平面形は楕円に近く、長さ約2.4m、幅約1.4m、深さ約0.7mである。S F 3には明からに切られている。			
出土遺物	S D 13から時期不明の土器片が出土した。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 5	5.7×5.0	8.5×6.8	S D 14・15・16・17	S X 7
概要	S D 15・17はS D 14・16に比較すると深い。S D 15・16はS D 10によって連続しているが、S D 10はS X 3の溝と考えているので本来は4隅に陸橋部がある形態である。			
埋葬施設	S K 3は当周溝墓の埋葬施設であろう。他の遺構に比較すると内部の堆積土が不明確なために、確認トレンチなどで一部に掘り過ぎがある。			
	長さ約3.5m、幅約1.8m、深さ約0.2mであるが不整形で浅い。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 6	9.0×(6.5)	(11.5)×(7.5)	S D18・19・20	なし
概要	南斜面に立地しているために、南側の溝は確認できない。S D19はS D13と一部重複し、S D20はS D28と一部重複している。またS D20の南端付近はS X 8の溝とも重複している可能性がある。S D18とS D20は北西側隅で若干細くなるが連続している。S D18とS D19とは連続しないで陸橋部を造っている。 S D18の上面からは奈良時代の須恵器が出土している。			
埋葬施設	S K 4 は極端に北西隅に偏っているが埋葬施設と考えた。長さ約1.8m、幅約0.7mの長楕円形を呈し、深さは約0.5mである。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 7	6.1×5.1	9.1×7.1	S D17・21・22・23	S X 5
概要	S D21とS D22は北東隅で極端に狭くなって連続する。S D17・22・23にはそれぞれ1段の階段状遺構がみられる。陸橋部は3箇所である。			
埋葬施設	方台部に所在するS K 5・6・7を埋葬施設と考えた。 S K 5は長さ約2.9mの溝状であり、南よりの部分で細くなると共にわずかに浅くなり、二つの土坑が連続している可能性もある。幅は広い方が約0.9m、狭い方が約0.4mである。深さは前者が約0.25m、後者が約0.2mである。 S K 6は長さ約1.0m、幅約0.7m、深さ約0.25mの小土坑である。 S K 7は長さ約2.4m、幅約0.7m、深さ約0.2mの溝状を呈している。S D21との切り合い関係があることから、当周溝墓に伴わない可能性もある。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 8	6.0×(2.0)	(7.5)×(3.5)	S D24・25・20の一部	S X 9(?)
概要	南斜面に立地し、一見竪穴住居跡状である。S D24・25は溝を掘ったというよりは、斜面を削り出して竪穴状の平坦部を造った周囲に浅い溝を巡らした状況である。したがって、S D24の場合北壁は約0.4mの高さがあるのに対して、南壁は高さが0.1m以下となり、竪穴住居の壁溝と類似している。 東側の溝は確認できなかったが、S D20と重複しているためと理解している。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 9	4.9×4.1	7.3×(5.2)	S D26・27・28	S X 8(?)
概要	南側にS X08が位置しており、その区画であるS D24が当周溝墓と溝を共有しているとも考えられる。S D26はS D35と、S D28はS D20と、S D27はS D32と接するように重複している。S D26とS D27は連続しているが、鍵形に曲がってから小さな段を造っている。陸橋部は南西隅の1箇所だけである。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X10	4.5×4.2	6.7×6.4	S D29・30・31・32	S X12
概要	S D30とS D31は「L」字状に連続しているが、S D31側に小さな段がある。S D29は深さが約0.9mあり当周溝墓群で最も深い。 S K8はS D30と明瞭な切り合い関係を持っているために、S X10との関連は考慮しなかった。 S D88は袋井市側に中心をもつS X34の溝である。			
出土遺物	S D31の南端からは図に示したように二之宮式の土器棺（S P2）が発見された。しかし、この土器棺はS D31が埋積した後に改めて埋められた状況にある。また、S D32からは床面より若干浮いた状況で壺形土器が発見されたが、この土器は白岩式であり土器棺とは明らかな時期差がある。			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X11	4.6×(4.5)	(7.4)×(7.0)	S D33・34・35・(38)	なし
概要	S D25とS D35は大半が重複している。S D34とS D35の関係をみると、S D34が東に伸び過ぎていようにもみえる。また、S D28は北側の区画溝とみても良い位置にある。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X12	5.2×4.4	8.3×6.5	S D29・36・37・38	S X10・14
概要	4隅に陸橋部をもつ形態として整っている。東西両側の周溝墓と溝を共有している。			
埋葬施設	S K9・10は当周溝墓の埋葬施設であろう。 S K9は長さ約1.5m、幅約0.6m、深さ約0.2mで小型だが舟形を呈している。 S K10は長さ約3.8m、幅約1.2m、深さ約0.3mで溝状ともいえるが、発見位置から埋葬施設としての土坑と考えた。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X13	8.6×(2.5)	10.2×(3.0)	S D39・40・41	なし
概要	S X8に類似した構造。S D40の外壁高は約0.4m、内壁高は0.05m以下、幅は0.2m前後で竪穴住居跡と類似した状況である。 S D39の西側に続くS D58はS D51と関連して1基の周溝墓になるとも考えられるが、拡大解釈の可能性もあるので除外した。			
出土遺物	なし			

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X14	0.8×4.5	11.8×7.2	S D3・42・43・44	S X12・S X25
概要	S X12とはS D36が、S X25とはS D42の共有関係を示している。したがって、S X10も含めて、4基の周溝墓が溝の共有関係にある。S X15の溝であるS D46・47とは極端な重複を示している。各溝はすべて不連続で4隅に陸橋部がある。			
埋葬施設	S K11は位置的には埋葬施設の可能性がある。			

長さ約7.3m、幅約3.7m、深さ約0.15mで南側が不規則になる。周溝墓としての組み合わせを持たない溝の可能性もあるために、埋葬施設との断定はしかねる。

出土遺物 なし

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 15	8.8×(7.0)	11.3×(8.5)	S D 45・46・47	S X 16
概要	S D 45から南に伸びる不整形な溝S D 56の埋土は茶褐色土であり、S D 45の埋土は粘着性のある黒褐色土であり両者の切り合い関係は、前者の方が新しい。S D 45とS D 46は連続する。また、S D 46とS D 47は隅で狭くなるが連続する。			
埋葬施設	S K 14は埋葬施設であろう。長さ約2.4m、幅約1.7mで北東側がやや突出するがほぼ長方形の平面形を呈している。深さは約0.4mである。この土坑内の床から0.1～0.2m上で、長さ約2.3m、幅約1.3mの長方形の平面形をした土坑が確認された。土坑内土坑の壁の構成は、やや礫の多い褐色土であるが地山ではない。このため、土坑内に木棺を置いたと跡と理解した。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 16	10.5×(8.5)	17.3×(10.0)	S D 45・48・49	S X 23・S X 19
概要	S D 49は南壁に沿って攪乱があり、残存部分が少ない。S D 48は平面・断面からは1条の溝であるが、S D 49・59との関連をみると、2条の溝が併行して掘られていると考えられる。同様なことはS D 45にも考えられる。			
埋葬施設	方台部内から3基の土坑が発見された。 S K 12は、長さ約2.6m、幅約1.7m、深さ約2.5mの長方形の土坑である。床面から約0.1m上面で長さ約2.1m、幅約7.0mの長方形の土坑内土坑が発見された。これは、木棺の跡と考えている。 S K 13は長さ約2.1m、幅約1.3m、深さ約0.3mの長方形土坑である。床面から約0.2m上面から長さ約1.3m、幅約0.6mの長方形の土坑内土坑が発見された。やや小型だが木棺の跡と考えた。 S K 14は、長さ約1.3m、幅約0.7m、深さ約0.15mの卵形の土坑である。			
出土遺物	S D 49の底面から嶺田式に属する土器片が出土した。			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 17	8.2×(5.0)	11.2×6.0	S D 50・51・52	なし
概要	S X 8・13に類似した形態である。「コ」字状に連続するがS D 51の幅は極端に広い。S D 52の外壁高は約0.4m、内壁溝は0.05m以下であるが明瞭に溝となっている。幅は約0.6mである。 S K 17は、S D 50の一部とも考えられる。			
埋葬施設	S K 16は埋葬施設と考えられる。長さ約2.2m、幅約0.9m、深さ約0.3mである。			
出土遺物	なし			

遺 構 名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X 18	8.8×(6.0)	12.2×(8.0)	S D 50・53・54	S X 17
概要	等高線が北西に向くのに合わせてるようにやや振じれたように見える。溝の形態は他の例に比較すると不規則になる。			

方台部に4基の土坑があり、埋葬施設と考えられる。	
S K18は、長さ約2.0m、幅約1.1m、深さ約0.2mで卵形を呈している。	
S K19は、長さ約1.0m、幅約0.9m、深さ約0.15mで楕円形を呈している。	
S K20は、長さ約1.4m、幅約0.9m、深さ約0.25mで楕円形を呈している。	
S K21は、長さ約2.1m、幅約1.4m、深さ約0.4mで卵形を呈している。	
出土遺物	なし

遺構名	規模(方台部)	規模(外方)	溝の組み合わせ	溝の共有関係
S X19	(7.0)×(6.0)	12.5×9.0	S D48・57・59・60	S X16・S X22
概要	極めて不明確であるが一応周溝墓と考えた。			
埋葬施設	S K22は方台部内にあることから当周溝墓の埋葬施設と考えた。 長さ約1.8m、幅約1.0m、深さ約0.3mで不整形な長方形を呈している。			
出土遺物	なし			

※()内は推定値、単位cm

土器棺の概要

土器棺は浅羽町側2基、袋井市側3基の合計5基が発見された。

浅羽町側の2基に関しては図に示した。

S P1は、S X2の南西側外の斜面にかかる部分から出土した。上半分近くが削平されていたが、大型の壺の頸部以上を打ち欠いた身に、壺の蓋を被せたものである。蓋に使用された壺はほとんどが消失していたが被せ蓋状になっていたようである。

土器の時期は弥生時代後期前半である。

S X2を含めた周溝墓との関連は不明であるが、関連性はないと考えている。

S P2は、S X10を構成するS D31内から発見された。

S P1と同様に上部が削平されていたが、頸部以上を打ち欠いた壺に肩部以上を打ち欠いた壺を被せた状態で出土した。

S D31との関連では、S D31に暗褐色土が埋積した後に、改めて土器棺の埋設が行われており、明らかに土器棺の方が新しい。このことは、土器棺が後期前半の二之宮式に属し、周溝墓がS D32の出土遺物から後期初頭の白岩式に属するという事実とも一致する。

小石室の概要

S F1～4を小石室とした。しかし、S F3以外は石室の構造ではなく、土坑墓と呼ぶべきものに含まれるともいえる。

S F1 S X4の東側でやや傾斜面に当たる部分から発見した。

北よりの部分で幅約0.9m、南よりの部分で幅約0.6m、主軸方向で長さ約2.5mの長楕円の平面形を呈し、南側が開放された土坑である。深さは奥壁付近で約0.3mであり、南側では0mとなる。

主軸の方角はN-20°-Wでやや東向きであるが、等高線にほぼ直交している。

床面の奥から約1.5mには0.05～0.15mの礫が敷かれている。

敷石の直上から刀子1点が出土した。

S F2 S X4の南東側から発見した。S F1よりもさらに傾斜面に立地している。

幅約0.7m、主軸方向で長さ約2.0mの長楕円の平面形を呈し、南側に開放された土坑である。深さ

は奥壁付近で約0.4mであり、南側では0mとなる。

主軸の方位はN-1°30'-Wである。

床面には0.15m前後の敷石がみられる。この敷石とは関係なく奥壁付近を頂点として発見面が南に傾斜した礫群がみられた。A-B断面にその状況を示したが、棺の蓋に並べられた礫と理解している。

出土遺物は皆無である。

S F 3 S X 4 内から発見し、S D 2 の一部を切っている。

幅約1.1m、主軸方向で長さ約3.6mで、東側壁の一部が内側に屈曲し、片袖状の平面形を呈し、南側が開放されている。

深さは奥壁付近で約0.4mである。

土坑内には小石室が構築されている。規模は次のようである。

玄室 最大幅約0.7m、長さ約1.3m、奥壁幅約0.55m、高さ約0.3m

封鎖 幅約0.7m、長さ約0.8m

奥壁は、他の部分に比較すれば大きな礫3個を深く掘り込んだ穴に立ててある。中央の最も大きな礫は長さ約0.35m、幅約0.2mである。この3個の礫の上は、長さ0.15m内外の礫が数段小口積みにされている。

側壁は、基礎石は横積みであり、他は小口積みで、いずれも長さ0.15~0.25m程度の礫を用いている。

玄室の床面は、長さ0.05~0.2mの礫で敷石がなされている。この敷石の側壁・奥壁に接する部分は壁面に礫を立て掛けるように置かれている。このために、床面の断面は凹字状になっている。また、敷石の南端（玄室の南端）もやや大きな礫を用いているために、主軸方向でも両側が高くなっている。

封鎖は、玄室の敷石が終わって約0.1mの空白を置いた後にはじまるが、1~2段積んだ程度である。

以上のように、S F 3 は小型ではあるが横穴式石室の形式を残している。

出土遺物には、須恵器（フラスコ形瓶、蓋坏坏）、土師器（蓋坏蓋ないしは高坏、脚付広口壺）がある。これらは、玄室から出土したものであるが、土師器2点は保存状態が極めて悪い。また、須恵器の坏には土師器の蓋が組み合わせてあった。

石室の時期は出土遺物からT K 217併行と考えられる。

S F 4 S X 6 内から発見された。発見位置は、前三者と同様に斜面にかかる部分である。

幅約0.8m、主軸方向での長さ約2.4mで、長楕円の平面形を呈し、南側に開放している。深さは、北よりで約0.35mであり、南よりでは0mとなる。

発見面の直下から敷石状の礫群が発見されたが、この群はA-B断面でみるように、南に向かって約10°の傾斜を示している。また、C-D断面にみるように、凹字状になっている。この状態は、S F 2 の覆土内の礫群に類似しているといえる。

この礫群の下は、土坑内堆積土が続き、奥壁付近では床面まで約0.2mある。また、この間にも少量の礫が混在していた。

土坑の床面には特に施設は見られなかった。

以上の点から当土坑は、S F 2 と同様だが床石を伴わない形式のものと考えられる。

出土遺物は皆無である。

(4) D地点の概要

D地点は、当初の予測を大きく覆して、掘立柱建物跡19棟、竪穴住居跡12軒、周溝墓3基、土坑5基、竪穴住居跡などの遺構に伴わない溝状遺構7条などが発見された。

掘立柱建物跡の概要

弥生時代に属する掘立柱建物跡は19棟である。これらの計測値を中心にした観察は、表-3に示したが、さらに若干の観察を行う。

分布 調査区の全域に分布しているが、竪穴住居跡と同様に、周溝墓(SX2・3)の方台部からは発見されない。

これらは、2～3棟が重複している例が多いが、重複しない例も含めると四つの類型がある。

I類型 類似した方位のものが完全に重複した例。

SH7・8の2棟、SH9・10・11の3棟は規模は異なるが、類似した構造のものが完全に重複している。また、新古関係の判明しているSH7と8では、大きいものから小さいものへと変化している。

II類型 方位の違うものや、方位や構造が違うものが重複した例。

SH1・2・3の3棟の内、SH1・2は類似した形態であるが、SH3は桁行4間で前二者とは相違がある。また、SH4・5・6の3棟では、SH5・6が梁間の方が桁行よりも長い構造であるのに対して、SH4はその逆になる。SH12・13の2棟は、何れも梁間1間、桁行3間の建物で、規模の違いはあるが類似している。しかし、方位は大きく異なる。

III類型 直接は重複していないが、極めて近接した例。

SH14・15は、類似した方位で隣接しているが、同時に存在し得るか疑問がある。

IV類型 単独で所在する例。

SH16・17・18・19は単独で所在している。しかし、これらに限って完全な状態で発見されない。
構造 便宜的に柱間1間の方を梁間としたが、SB5・6は、梁間の方が桁行よりも長く、棟持柱を持つ構造の可能性がある。

SH3・4・9・10・11・12・13は、桁行が3間以上の建物跡であるが、これらは梁間÷桁行が0.7以下になり、細くて長い傾向を示している。特に、SH3は桁行4間であるが、梁間に対して桁行が2倍近くなる。

柱穴は、SH1・2のように大型の例も目立つが、SH12・13のように小型の例や中間的な例もある。これらについては、表-4にまとめた。

建物の方位は、基本的には南向きで、磁北に対して数度のずれがある程度の例が大半を占めているが、SH3・13・18はずれが大きい。

方位の近似性と分布とを考慮して群別すると次のようになる。

A群	南に対して2～5°東を向く例	SH1・6・7・8・10・12
B群	南に対して2～3°西を向く例	SH14・15
C群	南に対して5～8°西を向く例	SH2・5・17・19
D群	南に対して14～15°東を向く例	SH3・13
E群	ほぼ南向きの例	SH4・9・11
F群	その他	SH16・18

これらが何らかの関連を示し得るかは検討しなくてはならないが、B群は、SB4・5と類似した

方位を持つと共に隣接した配置にある。同様にC群のSH 2・17はSB12と、D群はSB 6と同様の方位を示している。

表－３ D地点掘立柱建物跡観察表

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 1	1 (3.0)	2 (3.4)	10.2	N-56°-E	0.88	SH 2, SH 3	P 1 と P 2

の切り合いからSH 1の方が新しい。P 8から菊川式の破片が出土。P 1, P 2は段掘り。柱後込めに礫混じりの黄褐色土を使用し、硬い。SH 3との新古は不明。

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 2	1 (2.7)	2 (3.5)	9.5	N-5°-E	0.77	SH 1, SH 3, SF 4	SH 1 参照

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 3	1 (2.4)	4 (4.4)	10.6	N-346°-E	0.55	SH 1, SH 2	桁行 4 間で、

柱穴が小さく、柱間も狭い。

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 4	1 (2.8)	3 (4.1)	11.4	N-90°-E	0.69	SH 5, SH 6, SB 1	P 33・34・

35は、B 1の覆土に発見面があるから、B 1より新しい。SH 4とSH 5では、漠然であるが、SH 4の方が新しい。

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 5	1 (2.8)	2 (2.4)	6.7	N-98°-E	1.17	SH 4, SH 6, SB 1	SH 4 参照

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 6	1 (3.0)	2 (2.6)	7.8	N-356°-E	1.15	SH 4, SH 5, SB 1	SH 4 参照

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 7	1 (3.1)	2 (3.7)	11.5	N-85°-E	0.84	SH 8, SD 1, SB 1	SH 7 と S

H 8とは建て替えなどの関連性が考えられる。SH 8は柱痕が全て発見できる。SH 7の柱穴はSH 8との重複が顕著であると同時に柱痕も発見できない。これは、SH 7を解体してSH 8を造ったと考える資料になり得る。P58はP64に切られている。

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 8	1 (2.6)	2 (3.1)	8.1	N-88°-E	0.84	SH 7, SD 1	SH 7 参照

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
SH 9	1 (3.9)	3 (4.7)	18.3	N-0°-E	0.83	SH10, SH11, SB 9	SB 9 の覆

土に柱穴の発見面がある。重複した他の掘立柱建物との新古関係は不明。

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H10	1 (3.5)	4 (6.0)	21.0	N-357°-E	0.58	SH 9, SH11, SB 9	S H 9 参照

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H11	1 (2.9)	3 (4.5)	13.1	N-1°-E	0.64	SH 9, SH10, SB 9	S H 9 参照
桁行の柱間が不揃い。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H12	1 (2.0)	3 (3.3)	6.6	N-357°-E	0.61	SD 3・4・9, SB 4, SH13	S D 4 より
は新しいが他の遺構との関連は不明。柱穴が小さい。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H13	1 (2.9)	3 (4.5)	13.1	N-345°-E	0.64	SD 3・4, SB 4, SH12	S H12参照
柱穴が比較的小さい。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H14	1 (2.1)	2 (2.8)	5.9	N-93°-E	0.75	SD 5	S D 4 より
は新しい。S H15と隣接しているが、棟方向が直交する。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H15	1 (2.9)	2 (3.5)	10.2	N-2°-E	0.83	SD 5	北側梁通か
ら約0.5m南側で棟通よりやや東側に小穴がある。穴の深さは約0.4mあり、決して浅くはない。形態も柱穴とみてよい。当遺構と関連する可能性もある。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H16	1 (1.3)	1 (1.6)	2.1	計測不能	0.81		1×1間の
建物の可能性がある。ただし、北側は攪乱のために確認できない。柱の配置は不規則だが、竪穴住居の残存だとすると、柱穴の太さと柱間に問題がある。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H17	1 (3.0)	1 (4.2)	12.6	N-95°-E	0.71	SB 6・11	竪穴住居跡
との新古関係は不明。S B 6 内の柱穴は発見できない。							

遺構名	梁 間	桁 行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重 複 関 係	観 察
S H18	1 (2.9)	2 (3.7)	10.7	N-350°-E	0.78	SB 6・11	S B 6 内の
柱穴は発見できない。P136はやや北にずれる。							

※梁間・桁行の()内数字は計測値(単位・m)、面積(単位・㎡)

表-4 D地点小穴観察表

小穴名	規 模			所属遺構	備 考
	長径	短径	深さ		
P 1	88	72	59	SH 1	二段掘り
P 2	104	100	54	"	"
P 3	88	74	47	"	"
P 4	68	66	47	"	隅丸方形
P 5	70	62	52	"	
P 6	70	60	35	"	
P 7	96	86	57	SH 2	隅丸五角形
P 8	62	58	54	"	
P 9	84	60	51	"	根石
P 10	90	66	56	"	隅丸五角形
P 11	76	70	46	"	
P 12	70	64	53	"	隅丸長方形
P 13	74	52	38	SH 3	楕円形
P 14	52	42	41	"	円形
P 15	48	42	33	"	隅丸方形
P 16	38	30	35	"	
P 17	40	34	34	"	
P 18	54	44	32	"	
P 19	68	48	32	"	
P 20	76	50	39	"	
P 21	60	50	32	"	
P 22	76	54	38	"	隅丸長方形
P 23	52	48	32	不明	柱痕
P 24	38	28	24	"	
P 25	20	20	18	"	
P 26	28	26	12	"	
P 27	24	20	17	"	
P 28	40	28	35	"	SH 3 と関連?
P 29	38	35	29	"	
P 30	28	26	20	"	
P 31	50	38	24	"	
P 32	100	64	34	SH 4	隅丸長方形
P 33	70	60	19	"	
P 34	66	68	26	"	
P 35	70	60	26	"	
P 36	74	68	36	"	
P 37					欠番
P 38	80	70	36	"	
P 39	78	58	(35)	"	P 46 と同じ
P 40	84	54	48	"	P 41 と同じ
P 41	84	54	48	SH 5	P 40 と同じ
P 42	70	60	21	"	
P 43	80	74	19	"	
P 44	80	50	38	"	
P 45	62	60	47	"	

小穴名	規 模			所属遺構	備 考
	長径	短径	深さ		
P 46	78	58	35	SH 5	P 39 と同じ
P 47	100	72	45	SH 6	隅丸長方形
P 48	96	64	31	"	"
P 49	100	76	35	"	
P 50	68	56	50	"	
P 51	84	66	52	"	
P 52	80	70	59	"	
P 53	56	50	20	不明	
P 54	44	36	17	"	柱痕
P 55	88	60	47	SH 7	隅丸長方形 P 61 と同じ
P 56	74	60	51	"	"
P 57	84	56	53	"	" P 63 と同じ
P 58	60	60	48	"	隅丸方形
P 59	82	56	37	"	隅丸長方形
P 60	66	60	38	"	
P 61	88	60	47	SH 8	P 55 と同じ
P 62	60	56	51	"	
P 63	84	56	51	"	P 63 と同じ
P 64	70	55	49	"	
P 65	60	52	32	"	隅丸方形
P 66	64	50	47	"	
P 67	?	58	34	SH 9	
P 68	?	58	38	"	
P 69	94	65	44	"	P 78、P 88 と同じ
P 70	80	60	49	"	
P 71	?	75	47	"	
P 72	70	68	63	"	
P 73	100	60	46	"	P 82 と同じ
P 74	88	66	68	"	P 83 と同じ
P 75	60	60	51	SH 10	
P 76	?	55	41	"	
P 77	?	?	30	"	P 68、P 87 と重複
P 78	94	65	44	"	P 69、P 88 と同じ
P 79	74	52	44	"	
P 80	?	65	45	"	
P 81	92	56	45	"	
P 82	100	60	46	"	P 73 と同じ
P 83	88	66	68	"	P 74 と同じ
P 84	90	70	62	"	
P 85	84	65	54	SH 11	
P 86	?	60	23	"	
P 87	?	?	30	"	P 68、P 77 と同じ
P 88	94	65	44	"	P 69、P 78 と同じ
P 89	76	55	35	"	
P 90	74	52	33	"	

小穴名	規 模			所属遺構	備 考
	長径	短径	深さ		
P 91	70	55	10	S H11	不整形 S H11の一部？
P 92	92	68	38	"	
P 93	60	46	31	不明	
P 94	48	38	27	S H12	
P 95	50	42	12	"	
P 96	48	32	20	"	
P 97	34	28	15	"	
P 98	42	28	33	"	
P 99	36	28	32	"	
P100	30	30	25	"	
P101	35	32	29	"	欠番
P102	50	50	29	S H13	
P103	65	56	14	"	
P104	65	48	15	"	
P105	48	45	15	"	
P106	48	48	21	"	
P107	55	55	22	"	
P108	50	42	33	"	
P109	50	40	41	"	
P110	42	32	13	不明	
P111	25	22	21	S H14	柱穴と見られる
P112	40	35	36	"	
P113	45	40	31	"	
P114	34	32	24	"	
P115	28	26	18	"	
P116	42	36	25	S H14	
P117	60	56	37	S H15	
P118	55	50	39	"	
P119	65	45	37	"	
P120	48	42	38	"	
P121	46	42	36	S H15	欠番
P122	52	40	20	"	
P123	52	40	36	不明	
P124	70	65	38	S H15	
P125	38	32	29	"	
P126	52	40	30	"	
P127	56	44	31	"	
P128					
P129	40	30	22	S H17	
P130	40	34	21	"	
P131	50	40	21	"	欠番
P132	45	42	30	"	
P133	43	35	35	S H18	
P134	45	44	25	"	
P135	44	42	27	"	
P136	52	42	26	"	
P137	55	55	10	S H19	
P138	70	60	7	"	
P139	55	50	8	"	

長径・短径・深さの単位はcm

竪穴住居跡の概要

竪穴の基本的な形態は隅丸方形であるが、短径が長径の80%よりも短いものは隅丸長方形とし、胴の張りが大きくてコーナーが明確でない例は小判形とした。出土遺物や相互の切り合いを見ると、小判形やそれに近い例は古く、方形に近い例や辺が直線的な例は新しい傾向にある。

各竪穴の時期は、出土遺物の明確なS B 3・6・7・9では遺物から判断できる。

これに従うと、S B 3は弥生後期前半に属し、他は後期後半に属している。またこれらの見解と形態からみると、S B 1・2・10・11・12は後期前半、他は後期後半の時期であり、後期末というべきか、菊川式の最も新しい時期に属する例は明確ではない。

分布は一見すると中央部を避けているようであるが、S B 7のように中央部にある例もあり、周溝墓との関連で、方台部を避けているともみられる。

重複関係はS B 6・10・11・12が顕著である。しかし、後期前半と後半に分けると、多くても3軒であり、後期後半に限定すれば、S B 4・5が重複するだけである。また、掘立柱建物跡と極端な重複を見せているのは、いずれも後期前半の竪穴である。

遺構は調査区の東と西に広がっており、調査した面積は全体の10%程度である。したがって、明確な判断はできないが、竪穴住居跡よりも掘立柱建物跡の方が多く発見されている。このことは、遠江地方の弥生時代集落の研究の上で重要な発見と思われる。

表-5 D地点竪穴住居跡観察表

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 1	6.4	(4.4)	0.2	小判形	(24.5)	N-73°-E	不明
壁溝	幅0.2~0.3、深さ0.5~0.1、東側、西側の一部が壁から少し離れて平坦面を作る。						
柱穴の状況	P 1~P 3、径0.2~0.3、深さ約0.3						
観察	柱穴の位置から平面形を復元した。S X 1、S H 4・5・6・7より古い。 S B 2とは隣接しているが共存した可能性は薄い。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 2	5.4	4.8	0.2	胴張隅丸長方形	24.5	N-77°-E	幅約0.3、深さ0.25~0.35、長さ約3.0、南東側から南に伸びる。
壁溝	幅約0.25、深さ約0.05、断面L字状						
柱穴の状況	P 1~P 4、径0.3前後、深さ0.25~0.35、比較的整然と配置されている。						
観察	小判形に近い平面形。炉跡の位置が主軸方向西よりにあり、通常と逆になる。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 3	7.2	5.7	0.3	胴張隅丸長方形	32.1	N-73°-E	幅約0.4、深さ約0.3、長さ約9.7、南西側から南に伸びる。
壁溝	北・東・南側では2条が接して発見された。西側では内側の溝が壁から約1.3離れる。						
柱穴の状況	P 1~5、P 5は深さ約0.1で位置も考慮すると支柱ではない。 P 1~5は、径0.25~0.45、深さ約0.2						
観察	西壁から約1.3離れた壁溝は、貼床で覆われていた。覆土は、有機質の少ない粘質土 S H 9~11の柱穴は、覆土中に発見面がある。炉跡はP 87に切られている。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 4	5.5	4.5	0.2	胴張隅丸方形	21.5	N-90°-E	S B 5の東側にある溝が当住居跡のものであろう。幅約0.4、深さ約0.1、長さ推定6.3、北東コーナーから北北東に伸びる。
壁溝	幅0.2~0.25、深さ約0.1						
柱穴の状況	P 1~4、径0.3~0.25、深さ0.35~0.45、P 1・4はやや外向き。						
観察	S B 5と重複しているが、貼床がS B 5内に及んでおり、当住居跡の方が新しい。 床面はS B 5より約0.1高い。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 5	6.0	4.7	0.2	胴張隅丸長方形	25.0	N-91°-E	幅約0.4、深さ約0.05、長さ約1.4、痕跡程度に残存している。
壁溝	2条巡る。新古関係は不明だが、内側の方が発見しにくかった。幅約0.25、深さ約0.05						
柱穴の状況	P 5~8、径0.25~0.35、深さ0.15~0.4、P 8が際立って深い。						
観察	東北コーナー付近が攪乱によって発見できない。						

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B 6	6.3	5.2	0.4	胴張隅丸方形	32.1	N-75°-E	幅約0.4、深さ約0.3、長さ約1.9北西コーナーから北北西に伸びる。末端は調査用地外となる。
壁溝	幅0.2～0.3、深さ0.1～0.15						
柱穴の状況	P 1 ～ 4、径0.2～0.3、深さ01.～0.35						
観察	胴の張りが少なく、隅丸方形に近い。多量の一括土器が出土。炉跡はS B 12の壁溝上から発見した。S B 11・12、S H 17・18、S B 10と重複しているが、その新古関係は下のようである。						
古 —————> 新 S B 10 —> S B 12 —> S B 6 S B 11 —> S H 18 S H 17							

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 7	(4.0)	3.7	0.2	胴張隅丸方形	(13.3)	(N-0°-E)	幅約0.6、深さ約0.3、長さ約12.5北西コーナー付近から北に伸びる。
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05、北側溝内に円礫3個が埋め込まれたように発見された。						
柱穴の状況	P 1・2、径0.35～0.4、深さ0.25～0.3						
観察	S D 3を切っている。覆土に焼土が目立つ。東側が攪乱されているため、規模は柱穴と炉跡から推定した。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 8	5.1	(3.3)	0.2	隅丸方形		N-80°-E	無
壁溝	幅0.25～0.5、深さ約0.05、幅が不安定						
柱穴の状況	不明						
観察	平面形は方形に近いように思われるが、南側は斜面にかかり発見できなかった。炉跡は北東隅近くにある。S X 1、S K 5とは明らかな新古関係があり、S X 1よりは古く、S K 5よりは新しい。不鮮明な部分が多い。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 9	(6.2)	(4.5)	0.2	胴張隅丸長方形			不明
壁溝	幅約0.25、深さ約0.05、溝内に多量の炭化物を含む。						
柱穴の状況	径0.2～0.35、深さ約0.4、細くて深い。						
観察	大半が保存用地に含まれるが、試堀トレンチで西壁を確認した。覆土に多量の炭化物を含んでいるが、焼土は含まない。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 10							
壁溝							
柱穴の状況							
観察	大半が用地外のために不明瞭。S B 6・12などと重複しているが、これらよりも古い。						

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B 11	(7.4)	5.8	0.25	胴張隅丸長方形	(34.4)	N-58°-E	不 明
壁溝	幅約0.2、深さ約0.3、東から南側にかけては壁から0.3前後離れる。						
南側に一部不明確な部分がある。							
柱穴の状況	不明						
観察	胴の張りが少ない。床面はS B 6 より約0.1高い。覆土に有機物の混入が少なく、地山の粘土層と類似している。S H 8 の柱穴は、覆土内に発見面があるが、この柱穴の調査に伴って当竪穴が確認された。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B12	(4.9)	3.6	0.3	胴張隅丸長方形	(15.7)	N-84°-E	幅約0.5、深さ約0.3、長さ約2.0で、北東隅から北に伸びている。
壁溝	幅約0.2、深さ約0.3で、一周する。						
柱穴の状況	P 5～7、径0.45～0.3、深さ約0.3、楕円形の例(P 5・6)が目立つ。						
観察	胴の張りが大きく、小判形に近い。北西隅は用地外のため未調査						

※表内計測値の単位はm、()内の数値は現存値ないしは推定値

周溝墓の概要

S X 1～3の3基が発見されたが、S X 1については時期の問題も含めて幾つかの疑問がある。

S X 1 幅2～3m、深さ0.3m以下で断面逆かまぼこ形の溝が「コ」字状に巡っている。南側は斜面のために発見できない。溝内からは多量の礫が葺石状に発見された。方台部の径は約7mである。

出土遺物は皆無である。

方台部のほぼ中央にS K 5があり、主軸の方位も方台部とほぼ一致している。また、方台部の南東よりの部分に不鮮明ではあるがS B 8が発見された。これらの新古関係は次のようである。

S X 1の葺石状の礫は、S B 8の覆土上面にまで達しており、S B 8が埋積した後に造られたことがわかる。

S K 5とS B 8の新古関係は、土層の観察からは確認できなかった。しかし、S K 5の床には鉄剣が出土し、これは2振を「L」字状に組み合わせて置いたことが予測できる出土状態であったが、S B 8の壁面で剣が折れて消失していた。このため、S K 5はS B 8に切られていると理解した。また、S B 8は、時期を断定できる資料はないが弥生時代後期であろう。

以上のことから、S K 5が最も古く、次いでS B 8、S X 1の順になる。また、S D15は、弥生後期後半の土器を出土しているが、S X 1はこれも切っている。

S X 2 S D 1・2・3とS D 4の一部で方形の区画ができる。これをS X 2とした。

S D 1と2は浅い溝で続いているが、この浅い溝はS D 9の一部の可能性が高い。S D 2と3は接しているが、S D 8から北に伸びるS D15との重複が考えられる。したがって、S X 1は四隅に陸橋部を持つ形態と考えられる。

溝の幅は2m前後であるが、S D 4は最大幅が5m近い。方台部は東西9.9m、南北9mでほぼ方形である。深さは0.3m以下である。

S D 1・2からは保存の極めて悪い土器が多量に出土しているが、中期末から後期初頭の遺物が多い。また、重複している各遺構は、確認できたものはすべてS X 2より新しい。

SX3 SD4の一部、SD5・6・7で方形の区画ができる。これをSX3とした。

SD4と7の関係が不明確ではあるが、四隅に陸橋部を持つ形態とみて良いであろう。

SD5は、北側が斜面になり削り出し状になる。また、SD6は東側が攪乱されている。

方台部のほぼ中央にSK3があるが、埋葬施設であろう。

溝の幅は2～3m、深さは0.3m以下である。方台部は東西・南北共に約7.5mである。

土坑の概要

不明瞭な例を除くと5基がある。

SK1 SB3の東側に所在する。長さ約1.6m、幅約0.85m、深さ約0.2mで、平面形は楕円形である。出土遺物は土器片少量であるが、覆土は暗褐色の有機質土で発見は容易であった。

SK2 SB2の北側に所在する。長さ約1.85m、幅約1.1m、深さ約0.2mで、平面形は不整形である。床面の凹凸が激しく、複数の土坑が重複しているようにも観察できる。多数の土器片を出土したが、これらの時期は弥生中期末から後期初頭である。

SK3 SX3の方台部のほぼ中央に所在し、SX3の埋葬遺構と考えられる。長さ約1.9m、幅約1.25m、深さ約0.08mである。平面形は隅丸長方形である。覆土は地山の黄褐色粘土に類似しており、人為的に埋められたことがうかがえる。出土遺物は皆無である。

SK4 SH2に重複して発見された。長さ約1.5m、幅約1.1m、深さ約0.3mである。平面形は隅丸長方形である。覆土は褐色粘質土で有機質が少ない。北壁の床面近くに弥生後期後半の土器が出土した。

SK5 SX1の項で一部を記した。長さ約2.9m、幅現存約1.1m、深さ約0.2mで、平面形は隅丸長方形である。覆土は淡暗褐色土である。

床面から鉄剣2振が出土した。1振は、壁に平行し剣先を西にして置かれ、他の1振は、先の1振の剣先と剣先を重ねるようにほぼ直角に置かれていたようであるが、SB8によって切られていた。

溝状遺構の概要

溝状遺構は、周溝墓を構成するSD1～7、明らかな竪穴住居跡の排水溝を除くと、8条発見された。これらは基本的には性格不明の遺構である。

SD8 SD9にほぼ併行し、SD2とSD3の間に発見された。発見された長さ約2.4m、幅0.2m弱、深さ約0.5mである。細くて浅い溝であるが、覆土が有機質で発見は容易であった。内部からは少量の弥生時代後期の土器が出土した。

SD9 SH14の西側を南に伸び、SD4の北端付近で約90°西に折れSH13を横断し、SD3の南壁と重複して西に伸びる。さらに、南に湾曲してSD2の東壁に接して南に伸びる。SD2の南側付近で確認できなくなるが、この間の長さは約14.5mである。幅は広いところで約0.4m、深さは0.2m以下である。SD2とSD3を繋ぐ溝は、方向からみると当SD9の延長とも考えられる。また、SD13もその延長と考えることも可能である。

SD8付近では、多量ではないが弥生時代後期の土器片を出土した。

SD10・11・12 SD3から北に派生するように伸びた溝で、暗褐色土が堆積していたが、極めて不鮮明である。出土遺物もほとんどない。

SD10は長さ約2.0m、幅約0.4m、深さ約0.1mであり、SD11は長さ約3.7m、幅約0.5m、深さ約0.15mであり、SD12は長さ約8.5m、幅約1.5m、深さ約1.5mである。

SD13 SD1とSB2を繋ぐように発見された。長さ約3.1m、幅約0.3m、深さ約0.1mで、覆土は暗褐色土である。

SD14 SH16の東側で調査用地東端付近で発見された。緩やかに「S」字を描くように屈曲している。長さ約14.5m、幅約0.4m、深さ約0.2mであるが、北側は攪乱されており、末端は不明である。形態が竪穴住居跡の排水溝に類似している。覆土は暗褐色土で、内部から磨製石斧1点が出土した。

SD15 SB8の西側でSX1の方台部西端付近から発見した。SX1の溝に切られ、外側にも続かない。長さ約3.5m、幅約0.4m、深さ約0.2mで弧を描いている。竪穴住居跡の排水溝に類似しているが該当する住居跡が発見されていない。内部からは弥生後期の土器片少量が発見された。

(5) E地点の概要

E地点と同一尾根上の山林内に保存状態の良い古墳が1基所在するが、この古墳を頂点として北に伸びる支尾根がある。この尾根は北に向かって急傾斜しているが、途中で中段のような緩傾斜地がある。急傾斜地自体にも微視的には自然傾斜とするには不自然な階段状の部分がある。このために工事の対象となった部分に対して確認調査を行った。

確認調査は、幅約1.2m、長さ約60mのトレンチを「V」字状に設定して行った。

この調査によって、次の遺構・遺物を発見した。

遺構

溝状遺構 SD1・SD2・SD3・SD4・SD5

土坑状遺構 SK1・SK2・SK3・SK4

土器棺 SP1

遺物

弥生土器（後期前半） SD2出土

同（後期？） SK3

同（中期末） 土器棺

概要 SD2とSD3は等高線に併行して「コ」字状に発見された。特に、SD3は地形の変化線とも一致している。この両者は同一周溝墓の溝であろう。また、SK1はこの周溝墓の埋葬施設であろう。SD1・2共に溝外壁の立ち上がりは0.05m以下であるのに対して、内壁は0.5～1mあり、削り出し的傾向が強い。

SD4とSD5も周溝墓を構成するものであろう。また、SK2はその埋葬施設であろう。

SD1については性格が不明である。

SK3とSK4は、竪穴住居跡の可能性もあるが大型の土坑と考えた。

(6) F地点の概要

遺構の計測値などは、表－6・7に示したが、観察の概要を記す。

竪穴住居跡の概要

F地点からは27軒の竪穴住居跡が発見された。これらには重複している例と単独の例とがある。重複している例では、SB16が4軒で最高である。また、連鎖状に重複する例ではSB7～9までの5軒が最高である。

分布は、細い尾根地形の頂部を中心に長く分布しているが、SB9とSB4との間が空白となっている。この空白は集落内でなんらかの意味を持つものである。

重複しているものの新古関係は、比較的容易に認識される例が多かった。新古関係は表－6に整理したが、2段階で竪穴の新古関係が確認されるのが典型的状況であるが、重複が多い場合には3段階になる。また、重複した個々の例をみると、大きい竪穴から小さい竪穴に変化する例が多い。逆の例にはSB10とSB10－2の関係がある。

焼失ないしは焼却したと考えられる竪穴は、SB6、SB7－2、SB8、SB9などであるが時期の前後に係わらずにはほぼ同じ場所であることを注目したい。

竪穴の平面形は、胴張隅丸方形、胴張隅丸長方形、小判形などがある。小判形の竪穴は相対的には大型であり、新古関係をみるとより古いものにのみ存在する。SB9はきわめて不整形であり支柱穴も6本である。また、SB6は、長方形の度合いが強くて小型である。

柱穴はSB9を除くと4本支柱と考えられ、その位置は、古い要素を持つものは壁から離れ、新しい要素を持つものは壁に近い傾向がある。SB14は極端に壁に接しているが、特例的である。

炉跡は、原則的には中央から北より東よりにみられる。これらを大別すると、床面直上にある地床炉(A類)、床面を若干掘り窪めた地床炉(B類)、粘土で炉を作ったいわゆる火皿炉(C類)がある。C類に属するSB16－4では枕石状の礫がみられる。

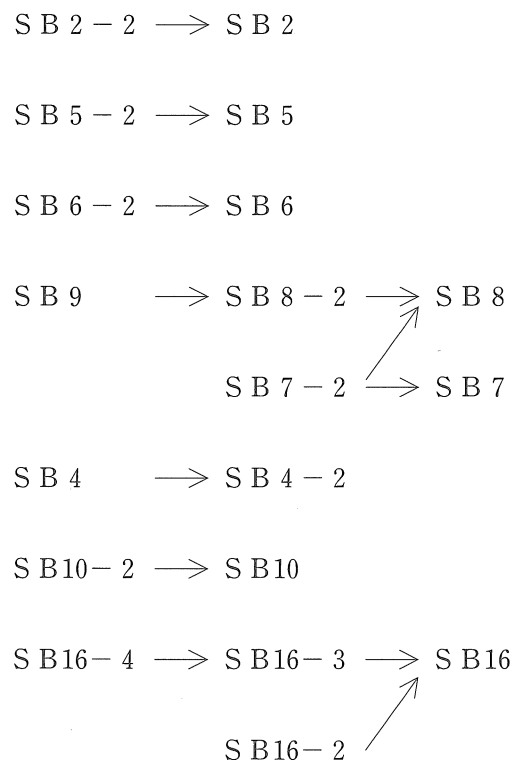
炉跡の発見できなかった竪穴もあるが、これらの内SB5、SB10、SB12は、発見されなかったのではなく、なかった可能性が高い。

掘立柱建物跡の概要

遺跡の西よりに3棟発見された。SH3は南側が攪乱を受けているために規模不明である。

D地点と比較すると竪穴の数の割に少ない特徴がある。これらは竪穴の項で指摘した炉跡のない例と関連して考えたい。

表－6 F地点遺構切り合い関係



※縦列は時期的同時性を表さない

表-7 F地点竪穴住居跡観察表

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 1	5.9	5.0	0.6	胴張隅丸方形	21.2	N-114°-E	無
壁溝	幅0.1~0.2、深さ約0.05以下。西側に不明瞭な部分がある。						
柱穴の状況	P 1・2・4は主体穴、P 3は位置がずれる傾向にあるが主柱穴であろう。P 5は補助的であろう。径約0.25~0.35、深さ約0.2~0.3						
観察	西側床面の一部が攪乱を受けている。						
炉跡観察	発見できない。(床面が不安定だったため?)						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 2	4.3	3.4	0.5	胴張隅丸長方形	12.2	N-40°-E	幅約0.2、深さ約0.2、長さ約3.0で、北西隅から北西に伸び、北側斜面に消える。
壁溝	幅0.15~0.2、深さ0.55~0.1で全周する。						
柱穴の状況	P 1~3、北側コーナーの柱穴は発見できない。3本柱の建物か。						
観察	S B 2-2と重複し、これよりも新しい。排水溝と竪穴壁との接する部分が暗渠状になる。						
炉跡観察	床面を若干掘り窪めて粘土を貼っている。表面は中央がやや窪む。						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	0.4	0.4	0.04	円	C	長軸線上の右側(中央に対して北東より)	

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 2-2	6.2	4.9	0.3	小判形	30.2	N-60°-E	無
壁溝	不明瞭な部分が多い。壁際と、壁から約0.4m内外の位置との2本がある。						
	両者共に幅0.1~0.2、深さ約0.05						
柱穴の状況	P 4は位置的に良いが、P 5は柱穴ではない。他は不明。径約0.35、深さ約0.35						
観察	覆土の状況から埋められた住居跡と考えられる。						
炉跡観察	発見できない。(S B 2に切られて消滅?)						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 3	4.3	3.7	0.3	胴張隅丸方形	12.6	N-1°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05で全周すると思われる。						
柱穴の状況	発見できない。						
観察	南半分は攪乱のために不明。他に比較して南斜面に寄っている。出土土器に欠山式がある。						
炉跡観察	痕跡程度に床面が赤変している。						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	0.2	0.2	0.02	卵形	A	中央に対して北東より	

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 4	8.5	7.0	0.3	小判形	42.1	N-8°-E	無
壁溝	幅0.3~0.5、深さ約0.05で南側の一部がとくに広い。						

柱穴の状況	P 1～P 4が主柱穴。長径0.4～0.6、短径0.2～0.4、深0.2～0.4でやや楕円形、P 9は所属不明。					
観察	S B 4－2 は当遺構に伴う炉跡を切っているので、当遺構よりも新しい。					
炉跡観察	床面を若干掘り窪めている。S B 4－2 の柱穴に切られている。					
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置
	(0.3)	0.25	0.05	楕円	B	中央に対して北より

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 4－2	5.5	5.2	0.2	胴張隅丸方形	24.7	N-3°-E	無
壁溝	幅0.2～0.3、深さ約0.05、東側に約1 m発見できない部分がある。 南東コーナー付近は二重になる。						
柱穴の状況	P 5～8 径0.4～0.6、深さ0.2～0.5。やや大型だが不整形						
観察	S B 4 より新しい。						
炉跡観察	炉跡の直ぐ北東側に主柱とはならない小穴P 9がある。						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	0.2	0.15	0.02	不整形	A	中央に対して北より	

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 5	6.1	5.6	0.35	胴張隅丸方形	28.7	N-10°-E	無
壁溝	幅0.3～0.4、深さ0.15～0.2で全周する。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.3～0.4、深さ0.15～0.2で全体に浅い。P 5～8は径0.2～0.3、深さ0.1以下で小さく浅い。配列から見ると他の遺構の残存とも考えられる。						
観察	S B 5－2 よりも床面が約0.05低い。S B 5－2 を切っている。						
炉跡観察	発見できない。覆土には焼土もみられたが、床面には炉跡らしい部分は発見できない。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 5－2	7.2	(5.0)	0.3	小判形	?	N-100°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05、東側だけ発見。壁から約0.2離れている。						
柱穴の状況	S B 5で示したP 5～8の可能性もある。						
観察	S B 5の西側にわずかに残存している部分は、当竪穴の一部と考えた。 覆土に有機物の混入が少なく、埋められているようにみえる。						
炉跡観察	発見されない。(S B 5に切られて消滅?)						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 6	5.2	3.1	0.2	胴張隅丸長方形	23.8	N-112°-E	無
壁溝	幅約0.15、深さ約0.05以下。全体に浅く内部には多量の炭・焼土を含む。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.2～0.35、深さ0.2～0.3。P 7の所属は不明						
観察	覆土には多量の炭・焼土を含み、床・壁も焼けている。多量の土器が出土 南側コーナー付近に長径約0.45の礫がある。いわゆる焼失家屋						
炉跡観察	床面の各所が焼けており、厳密には炉跡の位置は不明						

	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置
	0.6	0.35	0.05	楕円	A	中央に対して南西より

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 6 - 2	6.2	(4.7)	0.15	胴張隅丸長方形	?	N-102°-E	無
壁溝	発見できない。						
柱穴の状況	P 5・6、径約0.3、深さ0.2~0.3。P 7が当遺構に伴うとすると、深さ約0.5に復元でき、やや深過ぎる。						
観察	覆土は有機質の少ない黄褐色土で、埋められた可能性が高い。S B 6よりも古い。						
炉跡観察	発見できない。(S B 6に切られて消滅?)						

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B 7	5.3	4.2	0.35	胴張隅丸方形	19.8	N-107°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05で全周する。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.25～0.4、深さ0.1～0.25。北西隅の柱穴は特に浅く約0.2しかない。						
観察	南西コーナー付近に礫（0.25×0.3）がある。北側壁溝とその周辺から土器が出土したが、上面には焼土の堆積がみられる。S B 7・7-2・8・8-2・9の新古関係は下のようである。						
古 —————> 新 S B 9 —> S B 8-2 —> S B 8 S B 7-2 —> S B 7							
炉跡観察	長軸線がほぼ東西のため、炉跡は短軸線上の北よりにある。						
	長径	短径	厚さ	平 面 形	形態	位 置	
	0.45	0.4	0.02	円	A	中央に対して北より	

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 7-2	8.5	6.0	0.25	小判形	44.8	N-102°-E	無
壁溝	幅約0.25、深さ約0.05で南側の一部が発見できない。						
柱穴の状況	主柱穴は発見できない。P 1は浅くて小さい。						
観察	覆土は地山と区別の付け難い黄褐色粘質土で、壁溝部分だけがわずかに有機質になっている。床面の各所に硬い焼土がある。焼失後埋められたと考えられる。						
炉跡観察	床面の各所が焼けているために、厳密な位置は不明						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	(0.6)	0.5	0.1	楕円	B	中央に対して東より	

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B 8	5.8	4.3	0.2	胴張隅丸長方形	23.6	N-118°-E	幅約0.4、深さ約0.2で
北東コーナーから北に伸びて、北側斜面に消える。							
壁溝	幅約0.2、深さ0.05～0.1で全周すると思われるが、北西側が不明瞭						
多量の炭・焼土を含み南側では完形土器が入り込んでいる。							
柱穴の状況	主柱穴はP 1～4、径0.2～0.4、深さ0.1～0.3。P 5・6は深さ0.1以下と浅い。						

観察	覆土に多量の炭・焼土が混じり、出土土器も二次的に焼けている。北西側の壁・壁溝の発見が困難だったのは、S B 7-2 と重複していたためであるが、切り合い関係は明らかに当竪穴の方が新しい。壁溝内に倒れ込んだ状態で発見された土器の出土状況は、注目に値する。					
炉跡観察	3 箇所に炉跡と判断できる部分がある。位置的には、最も小さいものがふさわしい。					
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置
	0.3	0.25	0.02	円	B	ほぼ中央

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 8-2	7.4	6.3	0.2	胴張隅丸方形	31.5	N-57°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05で全周する。						
柱穴の状況	主柱穴はP 1～4、径0.4前後、深さ0.2～0.3						
観察	覆土に有機物の混入が少ない。床面はS B 8 より高い。焼土がS B 8 に切られている。S B 9 を切っている。埋められた可能性が高い。						
炉跡観察	発見できない。(P 1 に接して焼土があるが、炉跡とは思えない。)						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 9	7.4	5.5	0.2	不整楕円	35.2	N-105°-E	無
壁溝	発見できないが、壁際の床面がやや低くなる傾向がある。						
柱穴の状況	7 本発見されている。径0.3～0.5 (各小穴の深さ、P 1-0.42, P 2-0.26, P 3-0.48, P 4-0.3, P 5-0.39, P 6-0.3, P 7-0.27)。						
	主柱7本ないしは、P 3を除く6本の建物跡か。						
観察	床面の凹凸が激しく、広い面積が焼けている。						
	覆土に有機物が少なく、埋められた可能性がある。						
炉跡観察	発見できない。床面の広い範囲が赤変しており、位置が限定できない。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 10	5.9	5.2	0.2	胴張隅丸方形	28.4	N-92°-E	無
壁溝	幅約0.3、深さ約0.05。北側の一部が発見できない。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.3～0.5、深さ0.2～0.3。						
観察	S B 10-2 を切っている。床面は安定している。						
炉跡観察	発見できない。条件的には発見可能であり、当初から地床炉系のものはなかった。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B 10-2	?	?	0.2	隅丸長方形?	?	?	無
壁溝	幅0.2～0.3、深さ約0.05						
柱穴の状況	P 1・2、径0.25～0.3、深さ0.2～0.4。						
観察	炉跡がS B 10に切られている。床面はS B 10より約0.1高い。						
炉跡観察	S B 10に半分程度切られている。上面が床面よりわずかに低い。						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	0.45	(0.2)	0.05	楕円?	B	中央に対して北よりと思われる。	

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B11	4.0	3.6	0.3	胴張隅丸方形	12.4	N-88°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.3、北西部の一部が発見できないが、全周するであろう。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.25～0.35、深さ0.2～0.3。						
観察	小型の竪穴である。北西側の一部が不安定である。						
炉跡観察	保存が良い。上面が凸レンズ状に盛り上がり、硬い。						
	長径	短径	厚さ	平 面 形	形態	位 置	
	0.65	0.5	0.7	不整形	A	中央に対して北東より	

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B12	5.7	4.2	0.25	胴張隅丸長方形	21.0	N-67°-E	無
壁溝	幅約0.25、深さ約0.05で北側の一部が発見できない。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.2～0.3、深さ0.2～0.4。						
観察	北側斜面にかかる部分が消失している。						
炉跡観察	発見できない。条件的には発見可能である。						

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B13	4.3	3.4	0.15	胴張隅丸長方形	12.1	N-87°-E	無
壁溝	幅約0.25、深さ約0.05、北側と南西側の一部が発見できない。						
柱穴の状況	P 1～4、径約0.25、深さ0.15～0.25。						
観察	稜線上に立地している。西側に一部不鮮明な部分がある。						
炉跡観察	長軸方向の北側約0.2には焼土がみられず、床面から0.06低くなっている。南側はさらに一段低くなり、青灰色粘土が貼られている。南端部はとくに厚く、床面より約0.04高くなっている。この高い部分は、焼け方が少なく、一部は青灰色である。炉跡の北より上面は平坦であり、南側は盛り上がっている。						
	長径	短径	厚さ	平 面 形	形態	位 置	
	0.6	0.45	0.06	楕円	C	中央に対して北東より	

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B14	?	?	0.25	?	?	?	無
壁溝	発見できない。						
柱穴の状況	P 1・2、径約0.25、深さ0.3～0.4、極端に壁に接して発見された。						
観察	北側は、斜面のために発見不能。柱穴の位置が特徴的						
炉跡観察	北半分が消失しているために発見できなかったものと考えている。						

遺 構 名	長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B15	6.0	5.3	0.15	隅丸方形	30.3	N-0°-E	無
壁溝	幅約0.15、深さ0.05以下、南西側の一部が発見できなかったが全周すると考えられる。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.2～0.4、深さ0.3～0.4						
観察	南西側コーナー付近に礫が2個みられる。床面の一部に掘り過ぎがあるが、保存は良い。						

炉跡観察	床面を一部掘り窪めている。硬い焼土が詰まっている。					
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置
	0.45	0.45	0.6	不整形	B	中央に対して北より

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B16	4.4	4.3	0.4	隅丸方形	15.0	N-4°-E	幅約0.3、深さ約0.2、長さ約1.0で北東コーナーから北に伸びて斜面に消える。
壁溝	幅約0.2、深さ約0.8、V字状でやや深い。						
柱穴の状況	P 1～4、径0.2～0.3、深さ0.2～0.4、P 4内にはさらに小穴（径0.08、深さ0.01）がある。						
観察	排水溝と竪穴とが接する部分に拳大の礫がみられ、暗渠が予測される。						
炉跡観察	床面に焼土が分布、焼土は硬くない。						
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置	
	0.5	0.4	0.3	楕円	A	中央に対して北東より	

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B16-2	?	4.3	0.15	?	?	?	無
壁溝	幅0.15～0.3、深さ約0.5。						
柱穴の状況	不明						
観察	床面はS B16よりやや高い。S B16に切られている。						
炉跡観察	発見されない。S B16に切られているためであろう。						

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B16-3	5.3	4.3	0.35	胴張隅丸方形	20.8	N-84°-E	S B16と共有？
壁溝	幅約0.25、深さ約0.1、溝内に焼土・炭化物を含む。						
柱穴の状況	不明、S B16と共有か。						
観察	S B16の壁溝内には焼土・炭化物は混じっていないため、溝の覆土の違いがはっきりしている。この違いから切り合い関係を確認し、S B16の方が新しいとした。しかし、S B16-3は、S B16の拡張の可能性がある。						
炉跡観察	発見されない。S B16と共有か。						

遺 構 名		長径	短径	深さ	平 面 形	面積	主軸方位	排 水 溝 の 有 無
S B16－4		(6.0)	4.5	0.1	胴張隅丸長方形	23.8	N-79°-E	無
壁溝	幅約0.2、深さ約0.05、全体に不鮮明。							
柱穴の状況	P 5・6は浅くて小さい。柱穴の可能性は薄い。							
観察	床面が表土直下だったために、保存状態の悪い遺構である。炉跡の発見でかろうじて確認できた。S B16・16－2・16－3・16－4の新古関係は次のようになる。							
古 —————> 新 S B16－4 —> S B16－3 —————> S B16 S B16－2 ↗								

炉跡観察	S B16に切られている。床面に長径約0.9以上、短径約0.4、深さ約0.08の浅い土坑を掘り、南端から約0.4の所に棒状の礫を置き、その礫から北側に青灰色粘土を貼って炉としている。粘土の下方は焼けないで青灰色をしている。炉の表面は浅い皿状になっている。					
	長径	短径	厚さ	平面形	形態	位置
	(0.9)	0.45	0.5	楕円	C	中央に対して北西より？

遺構名	長径	短径	深さ	平面形	面積	主軸方位	排水溝の有無
S B17	?	?	0.15	?	?	?	?
壁溝	壁から0.1～0.15離れて、幅約0.15の溝が痕跡程度にみられる。						
柱穴の状況	不明						
観察	S H 3と切り合っているが、新古関係は不明。大半が攪乱を受けている。						
炉跡観察	発見されない。大半が攪乱を受けているためであろう。						

※表内の計測値は単位m、面積は単位㎡、()内は推定

炉跡の形態分類は、A－床面をそのまま炉とした地床炉、B－床面を若干掘り下げて炉とした地床炉、C－粘土で炉を作った火皿炉。

表－8 F地点掘立柱建物跡観察表

遺構名	梁間	桁行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重複関係	観察
S H 1	1 (2.0)	3 (3.0)	6.0	N-101°-E	0.67	なし	北西傾斜の緩斜面にある。柱穴は、径0.3～0.7、深さ0.25～0.45で、不整円形であるが、斜面側の柱穴の方が浅いということはない。建物跡の東側（斜面上側）には段があり、斜面を平坦にしている。当初は竪穴住居跡と考えたが、当建物跡の外部施設とした。

遺構名	梁間	桁行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重複関係	観察
S H 2	1 (3.0)	2 (2.9)	8.6	N-26°-E	1.03	なし	南側が攪乱を受けているため桁行は厳密には不明。柱穴は径0.25～0.5、深さ0.4～0.6。

遺構名	梁間	桁行	面積	主軸方位	梁間÷桁行	重複関係	観察
S H 3	?	2 (3.0)	?	?	?	SB17	大半が攪乱を受けており、細部は不明。

※表内の計測値は単位m、面積単位㎡、()内は実測長

(7) G地点の概要

E地点と谷地形を挟んで併行するように、北に伸びる細い支尾根がある。この地点に幅約1.2m、総延長約115mのトレンチを設定して確認調査を行った。

この結果、標高約30mの地点で竪穴住居跡1軒を発見した。

SB1 長径約5.3m、短径約4.0m、深さ約0.3mで小判形の平面形である。壁溝は全周し、幅約0.2m、深さ約0.1mである。炉跡は長軸線中央から短軸線北よりの部分にある。床面を約0.2m掘り下げて炉穴としてあるが、周辺に1段浅い部分が帯状に巡っている。帯状の1段浅い部分には細く長い良く焼けた砂岩が枕石状に置かれている。主柱穴は径0.15~0.2m、深さ0.3m前後で4本ある。

出土遺物は土器と小型の磨製石斧である。

出土土器は白岩式の新しい段階に属するものである。

おわりに

今回の調査を整理すると、B・C・D・E地点から多数発見された周溝墓、D・F・G地点から発見された竪穴住居跡・掘立柱建物跡からなる集落とに大別できる。

周溝墓は、B地点を主体として、弥生時代中期の嶺田式にさかのぼる例が多数発見された点が注目できる。

従来、嶺田式の周溝墓は、磐田市馬坂遺跡（註1）、袋井市・掛川市山下遺跡（註2）などで発見されていたが、遠江地方に普遍化していたか否かは疑問の状態であった。もちろん、今回の発見でただちに結論の得るものでもないが、当遺跡では、これに続いて白岩式の周溝墓も多数発見され、嶺田式から段階的に白岩式に発展して行くことが把握できた。

このことは、山下遺跡でも考えられたことではあるが、少なくとも白岩式成立以前に周溝墓を主体とした墓制が成立していたという結論を出すことが可能になったといえる。

集落跡では、ほぼ同時期に営まれたD地点とF地点との比較で興味深いものがある。もっとも、F地点が地形的にみてほぼ1集落を完掘したといえるのに対して、D地点は一部しか調査していないという違いから、D地点の未調査区も同様であるという、ある種の仮説の上にたたなくてはならない。

D地点の場合は、調査区から竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡18棟が発見された。これらは24頁で示したように、掘立柱建物跡の方位を基準にした群別が可能のように思われる。この方位が東京都赤羽台遺跡（註3）などで指摘されているように、竪穴住居跡の方位と関連するとすれば、A・B群とし

たSH1・6・7・8・10・12・14・15などは、SB1・2・3・7などと、C群としたSH2・5・17・19は、SB4・5・12などと、D群の3・13などは、SB6などとそれぞれ群を構成することも考えることができる。この点については後日に検討したいが、きわめて大略的にみた場合でも、竪穴住居跡と掘立柱建物跡との組み合わせが指摘できるようである。

F地点では、竪穴住居跡27軒に対して掘立柱建物跡は3棟発見されただけである。これは、D地点と比較した場合には極端な違いである。

分布をみると、D地点では全域に分布しているのに対して、F地点では西端に集中している。

また、炉跡が発見できなかった竪穴住居跡について、倉庫的な用途を想定して検討してみた。この結果では、SB5・10・12は当初から炉のない竪穴ではないかと理解した。これを掘立柱建物跡に加えると、東よりも倉庫が推定できるが、D地点の比でないことは明らかである。

掘立柱建物跡をすべて倉庫跡と限定することにも問題があるかも知れない。たとえば、D地点では、桁行が3間以上の例がある。SH3・13・4・10などである。これらについては住居跡として理解することも可能かもしれない(註4)。そして、これらの4棟が各々2棟ずつ類似した方位を持っていることも見逃せない。また、SH5・6は、便宜的に柱間の少ない方を梁間とした結果、梁間÷桁行が1.0以上になった。このような例は、棟持柱を伴う構造として理解した方が良いのかも知れない。

周溝墓群と集落との関連であるが、今回調査した集落跡を含め周辺の状況を見ると、集落の開始は白岩式の時期でも新しい段階から始まることが多く、白岩式の古い段階の例はまれであり、嶺田式の例は発見されていない。したがって、周溝墓とは时期的なずれが間違いなく存在する。

今回発掘調査を行った浅羽町北山地区は、過去の実績からみても相当数の遺構・遺物が発見されるであろうという予測があり、当初から覚悟して調査に臨んだつもりではあったが、結局は整理の段階でつまづいてしまった。これは、今後の研究・文化財保護にとっての幾つかの反省として残ることになった。

註

註1 柴田・稔他 『新豊院山墳墓群 A-2・3地点』 磐田市教育委員会 1980年

註2 松井一明・松本一男 『山下遺跡』 掛川市・袋井市教育委員会 1984年

註3 鈴木敏弘他 『赤羽台遺跡 八幡神社地区』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会調査団 1990年

註4 宮本長二郎 「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」 『弥生時代の掘立柱建物』 第29回埋蔵文化財研究会
1991年

写真図版



北原遺跡

G地点

E地点

D地点

C地点

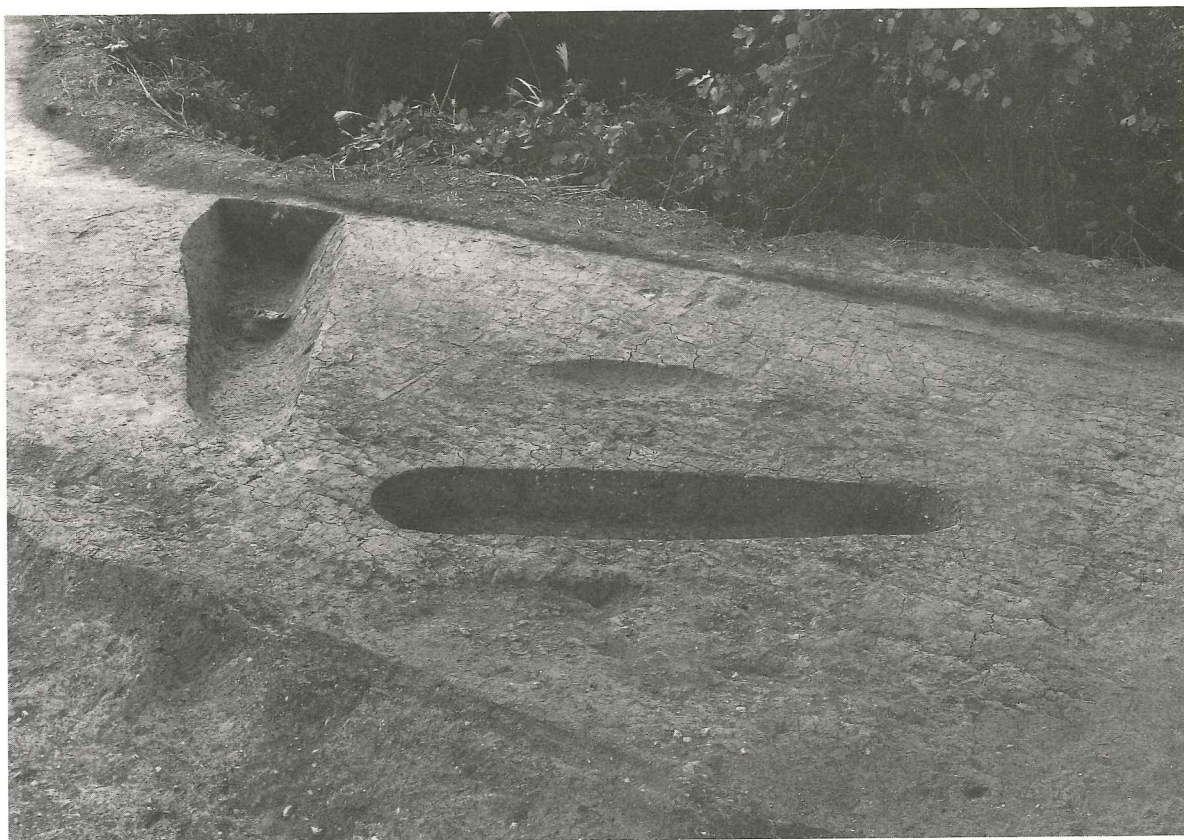
B地点

F地点

B 地点写真図版



中央区完掘状況(空撮)



SX1 (東から)



SX 2、SX 3 (南東から)



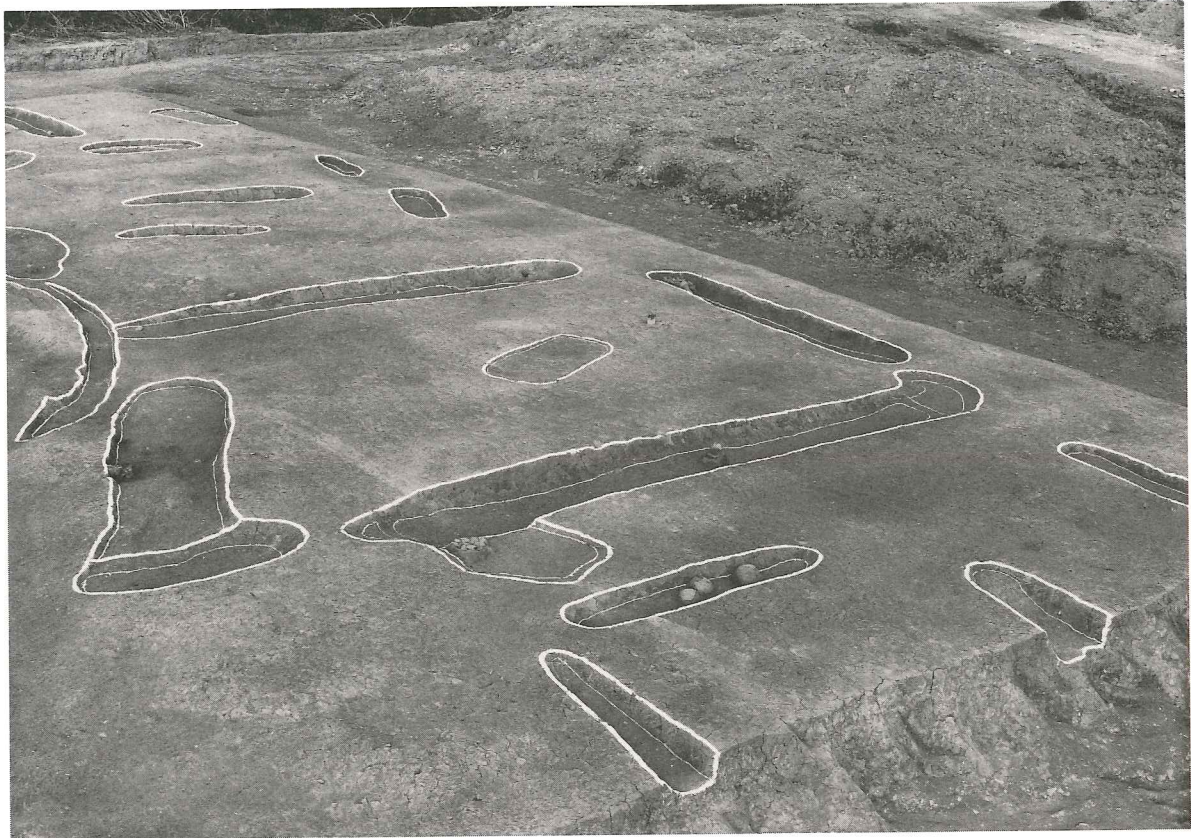
SX 4 (東から)



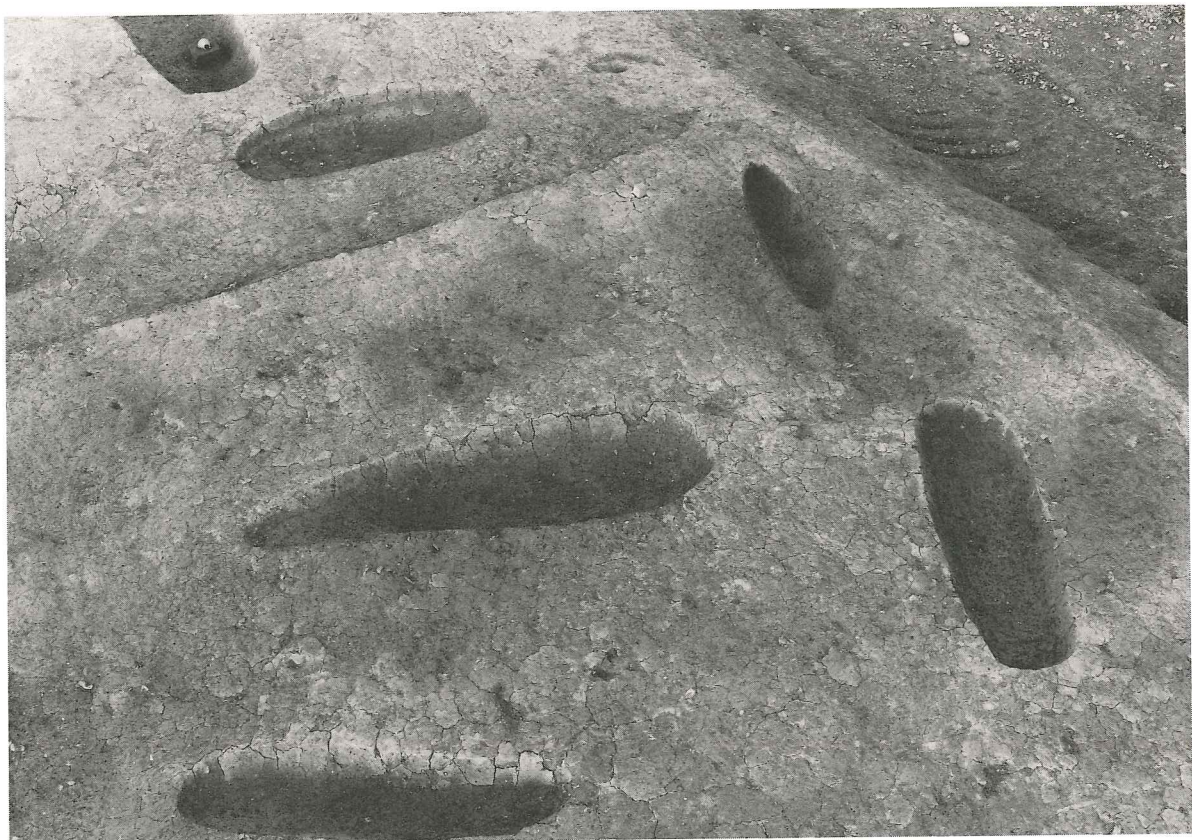
SX 5 (南から)



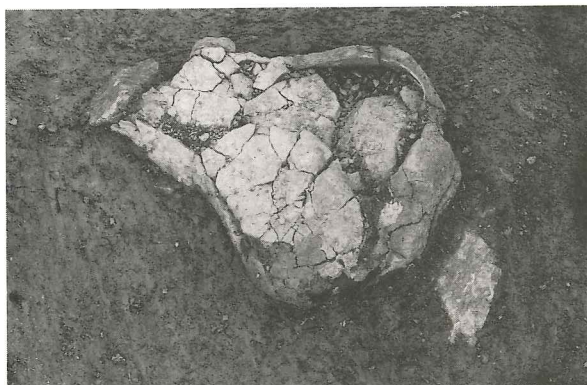
SX 6、13号墳(南から)



SX 7、SX 8 (南から)



SK 9、SK10~13付近 (南から)



SD 1 (SX 1) 遺物出土状況



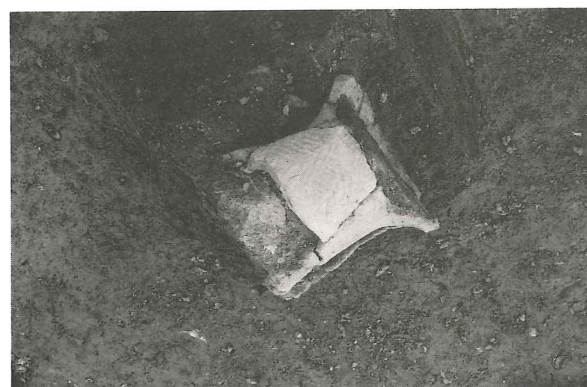
SD19(SX 6) 遺物出土状況



SD21遺物出土状況



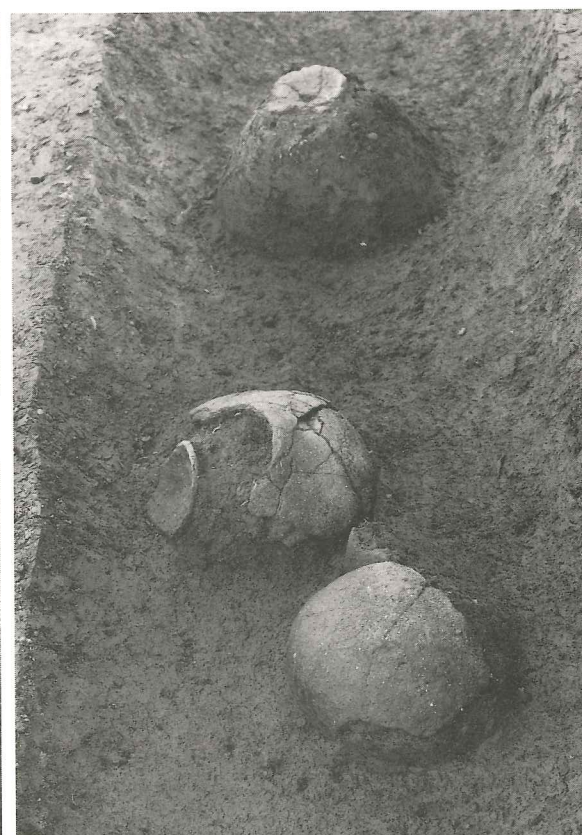
SD24(SX 5) 遺物出土状況



SD28(SX 7) 遺物出土状況



SD27(SX 7) 遺物出土状況



SD31(SX 8) 遺物出土状況



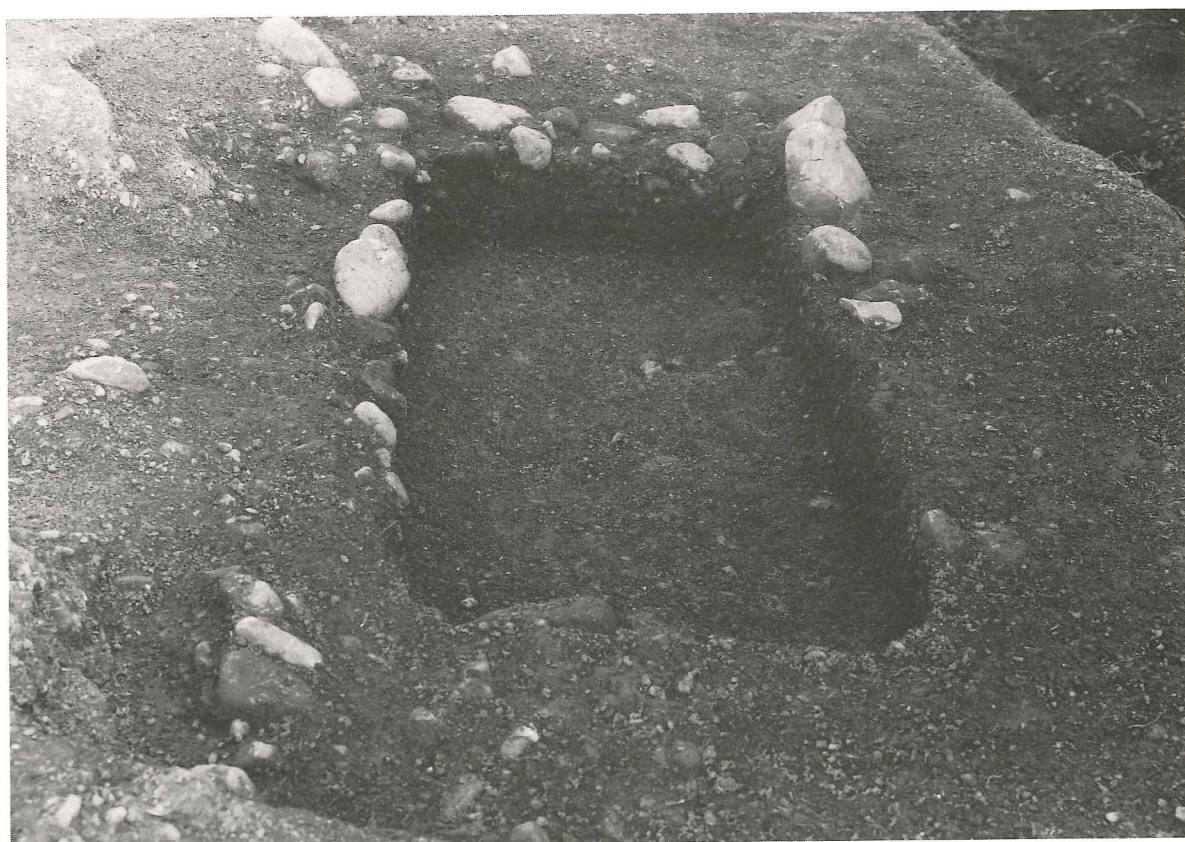
東区完掘状況(空撮)



SX10・11(西から)



SK23(東から)

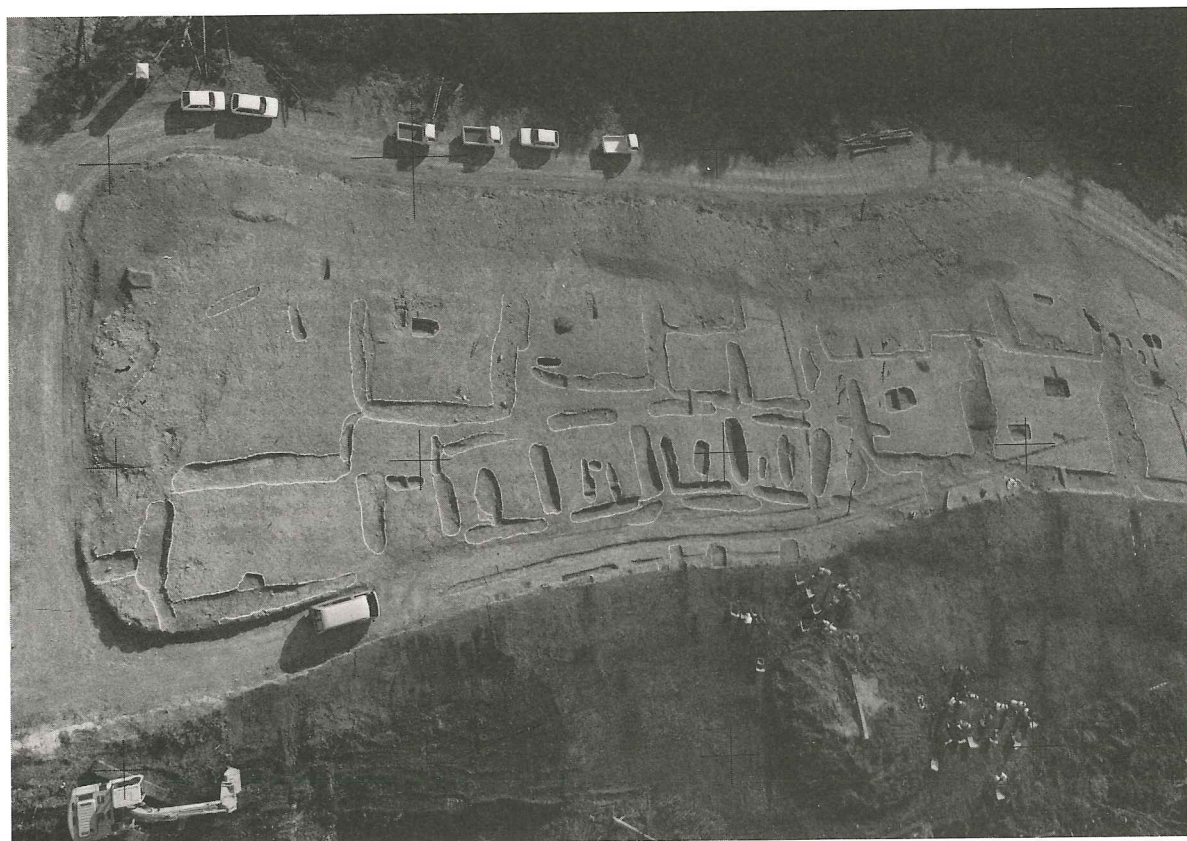


SK25(西から)

C 地点写真図版



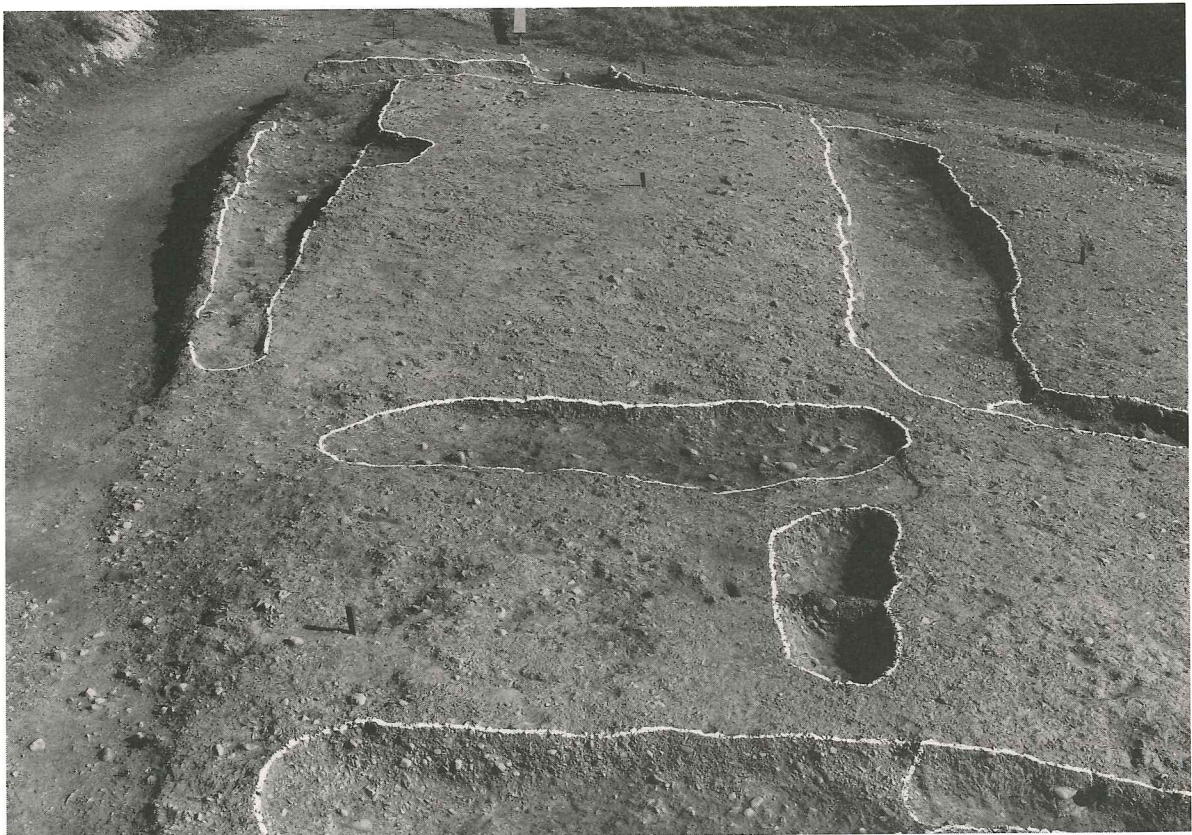
C地点調査前全景(東から)



C地点空撮



D地点からC地点を望む



SX 2 (西から)



SX 2、SX 3、SX 5、SX 7 (西から)



SX 3、SX 5 (西から)



SX 4 (西から)



SX 4、SX 5、SX 6、SX 7、SX 9、SX10、SX12(西から)



SX 6、SX 7、SX 8、SX 9、SX10、SX11(西から)



SX 9、SX10、SX11(西から)



SD32 (SX10) 遺物出土状況



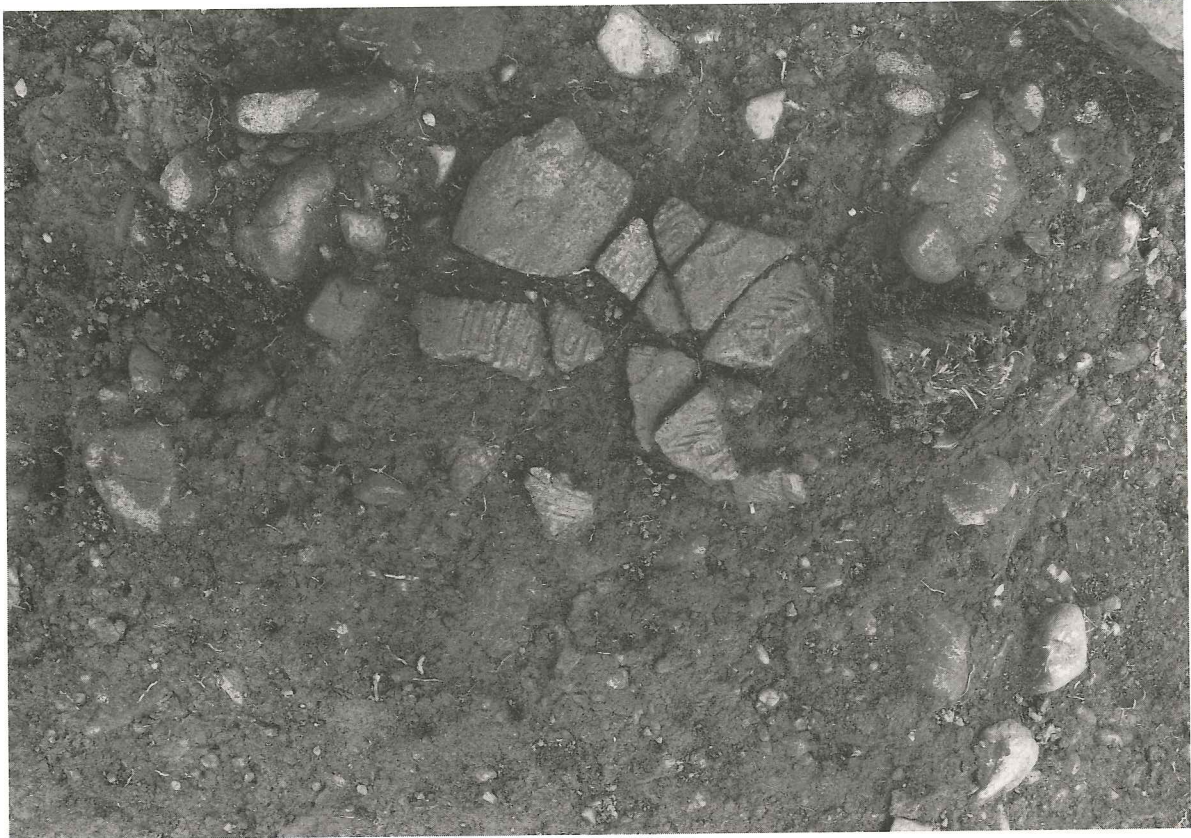
SX10、SX12 (西から)



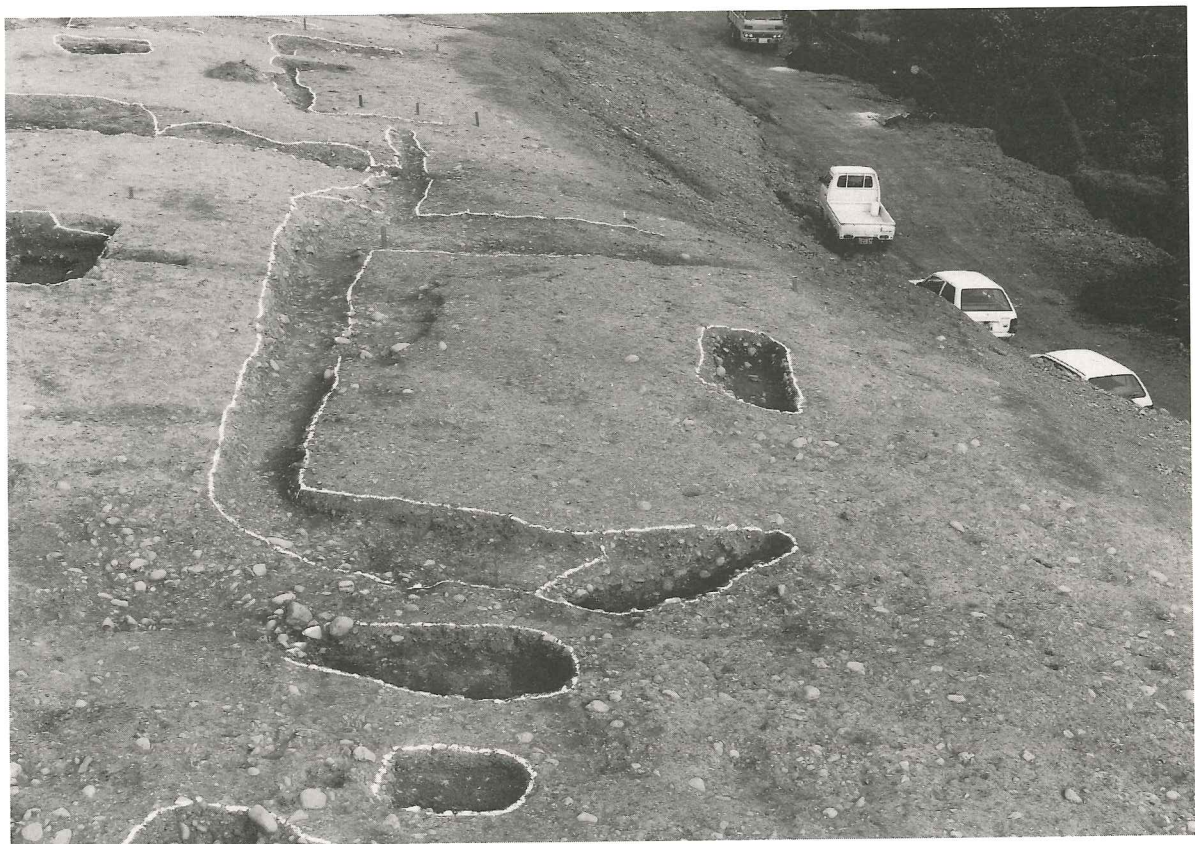
SX13、SX14、SX15(西から)



SX16(西から)



SD49 (SX16) 遺物出土状況



SX17 (西から)



SX18(西から)



SX19(西から)



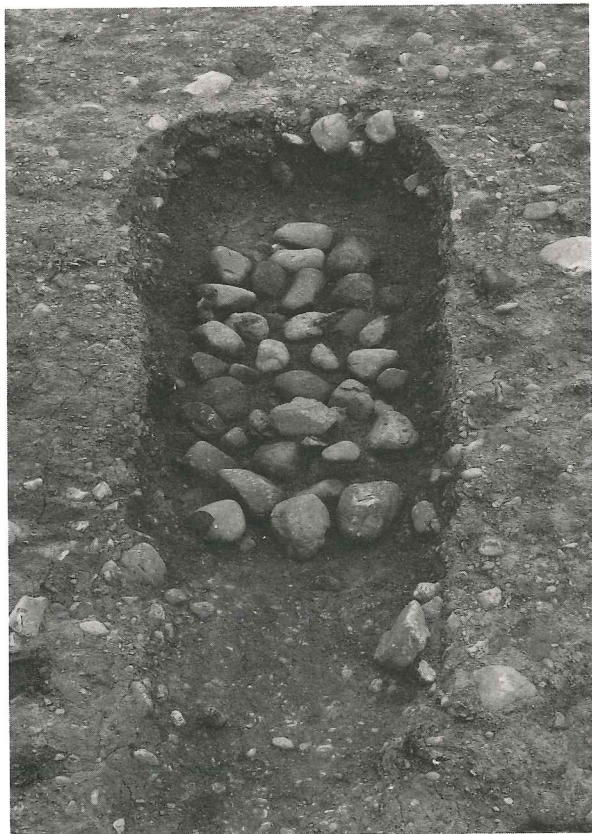
SX 2 南東側土器棺(SP 1)出土状況



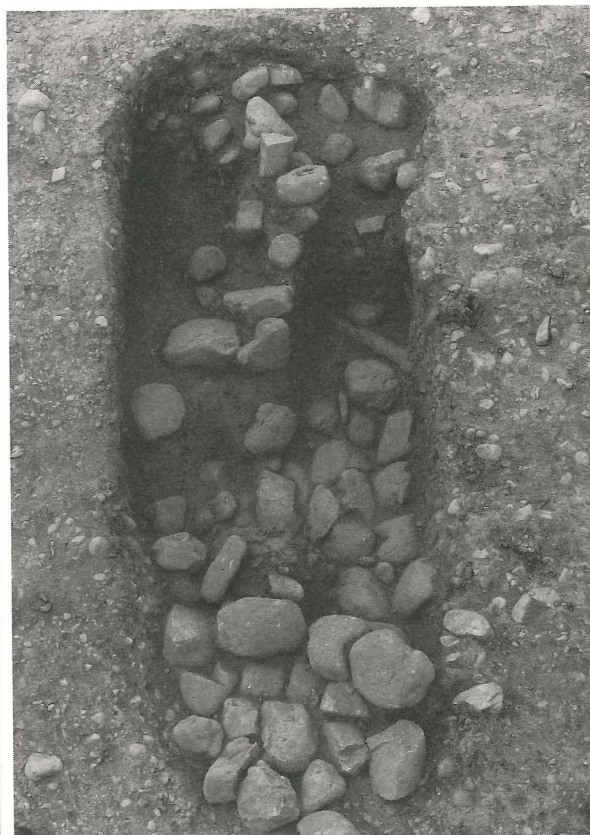
SD31内土器棺(SP 2)出土状況



SF 1 ~ 3 全景(西から)



SF 1



SF 2



SF 3

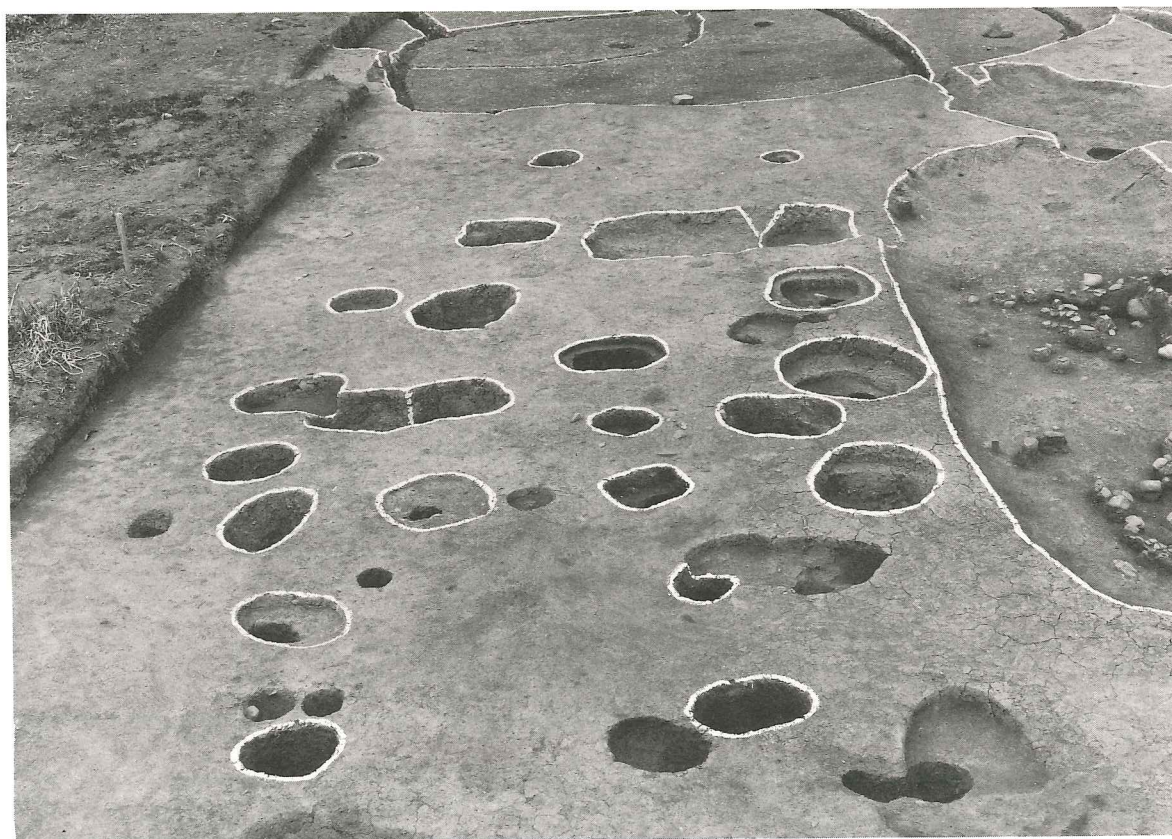


SF 3 遺物出土状況

D 地点写真図版



D地点全景



SH 1 ~ 3 (上はSB 6 その他、右はSD 2、南から)



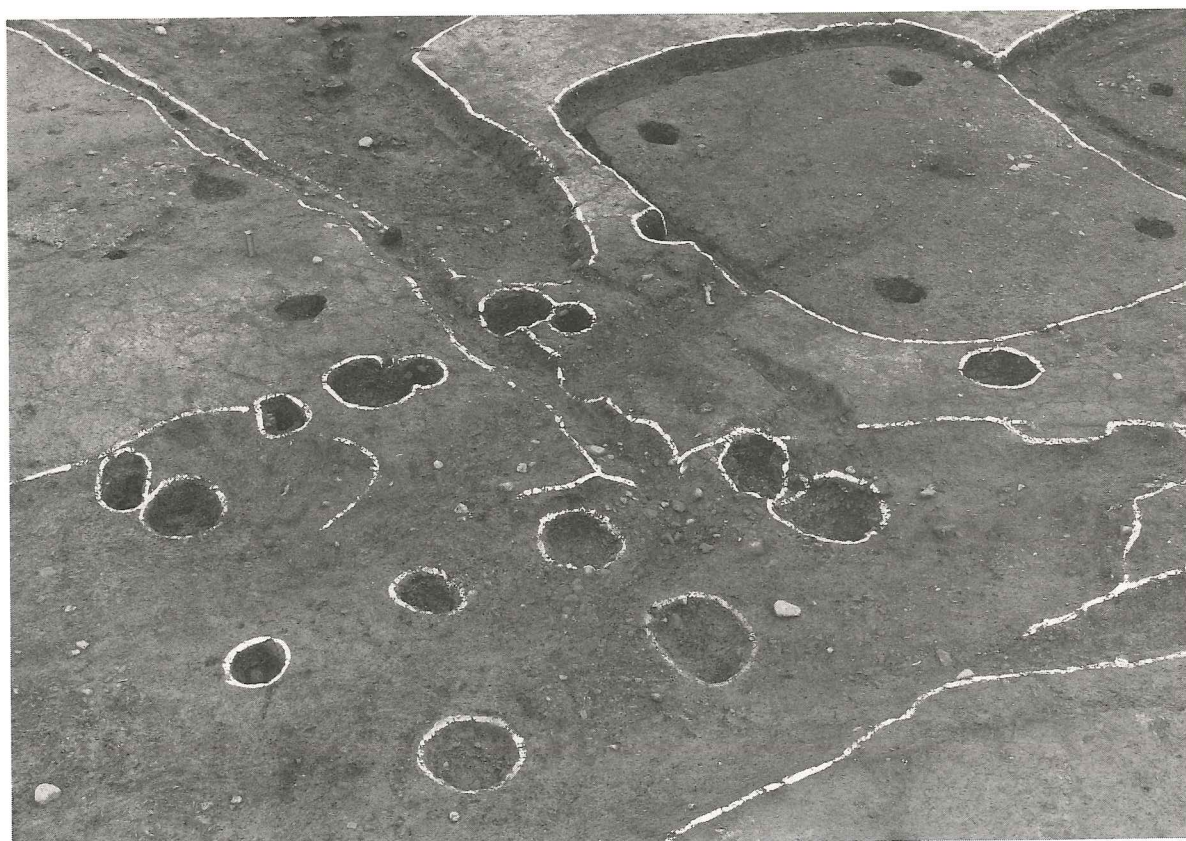
SH 4・5、SB 1・8、SX 1、SK 5 (北から)



SH 4 ~ 8、SB 1 (東から)



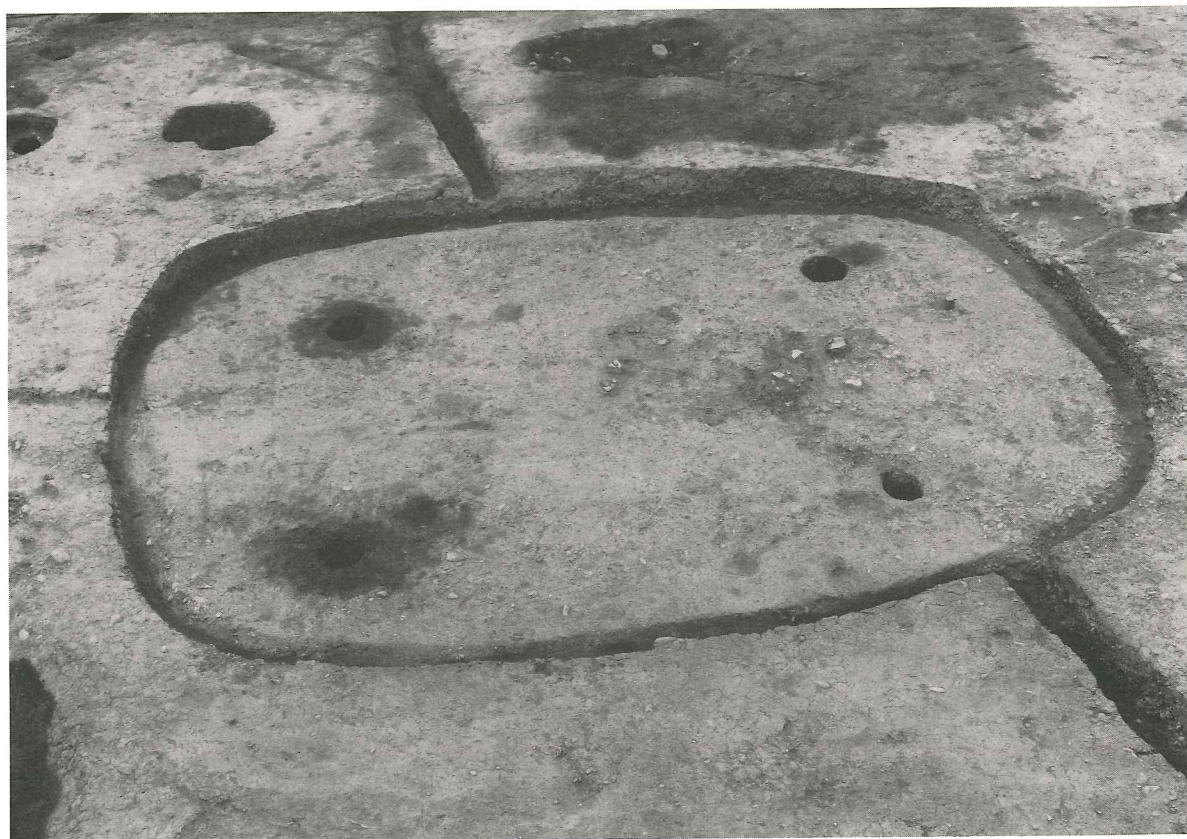
SH 9 ~ 11、SB 3 (南から)



SH12・13(右上はSB 4・5、南東から)



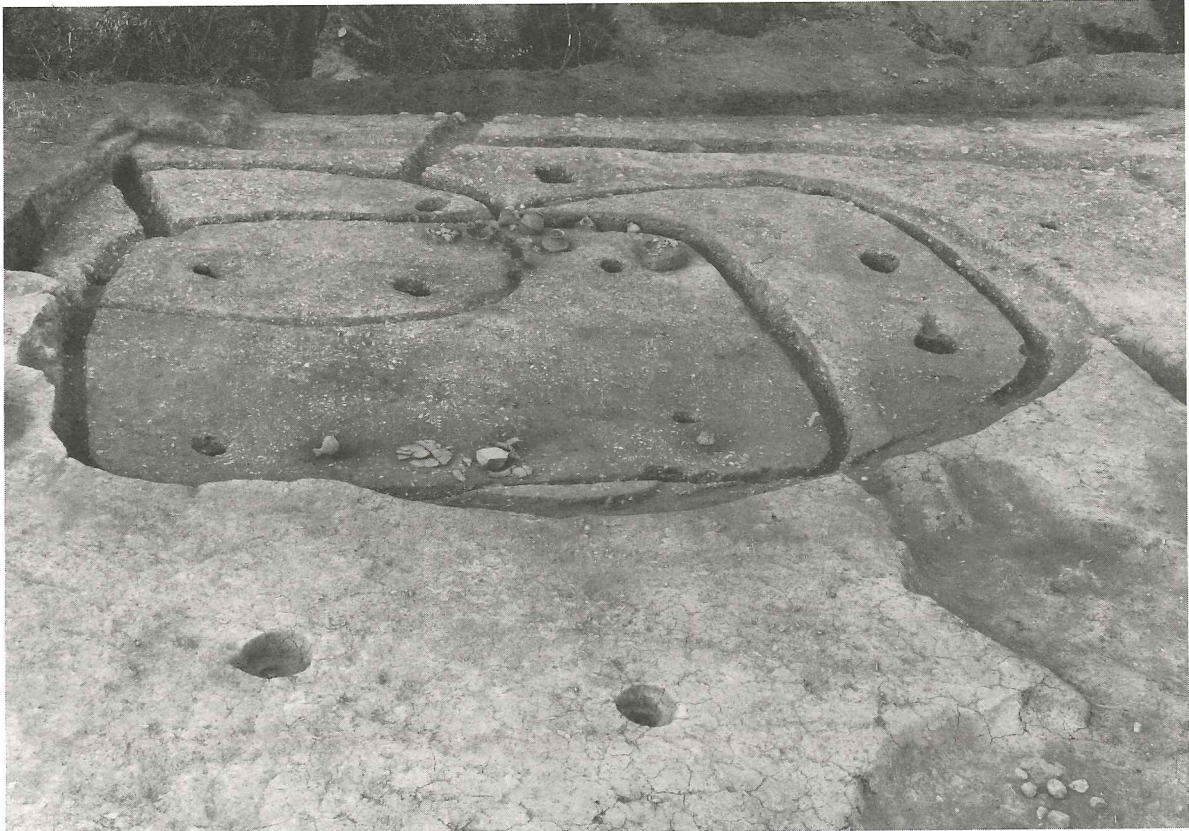
SH14・15、SB 7 排水溝(南から)



SB 2 (上はSK 2、南から)



SB 4・5 (南から)



SH18、SB 6・11・12(南から)



SH 6 遺物出土状況(東から)



SB 8、SD 6 (西から)



SB 7 遺物出土状況



SB 9 (東から)



SB 9 遺物出土状況(試掘トレンチ)



SD 1 遺物出土状況(試掘トレンチ)



SD 2 遺物出土状況(南から)



SD 2 遺物出土状況(溝北半、西から)



SK 5 遺物出土状況(南から)

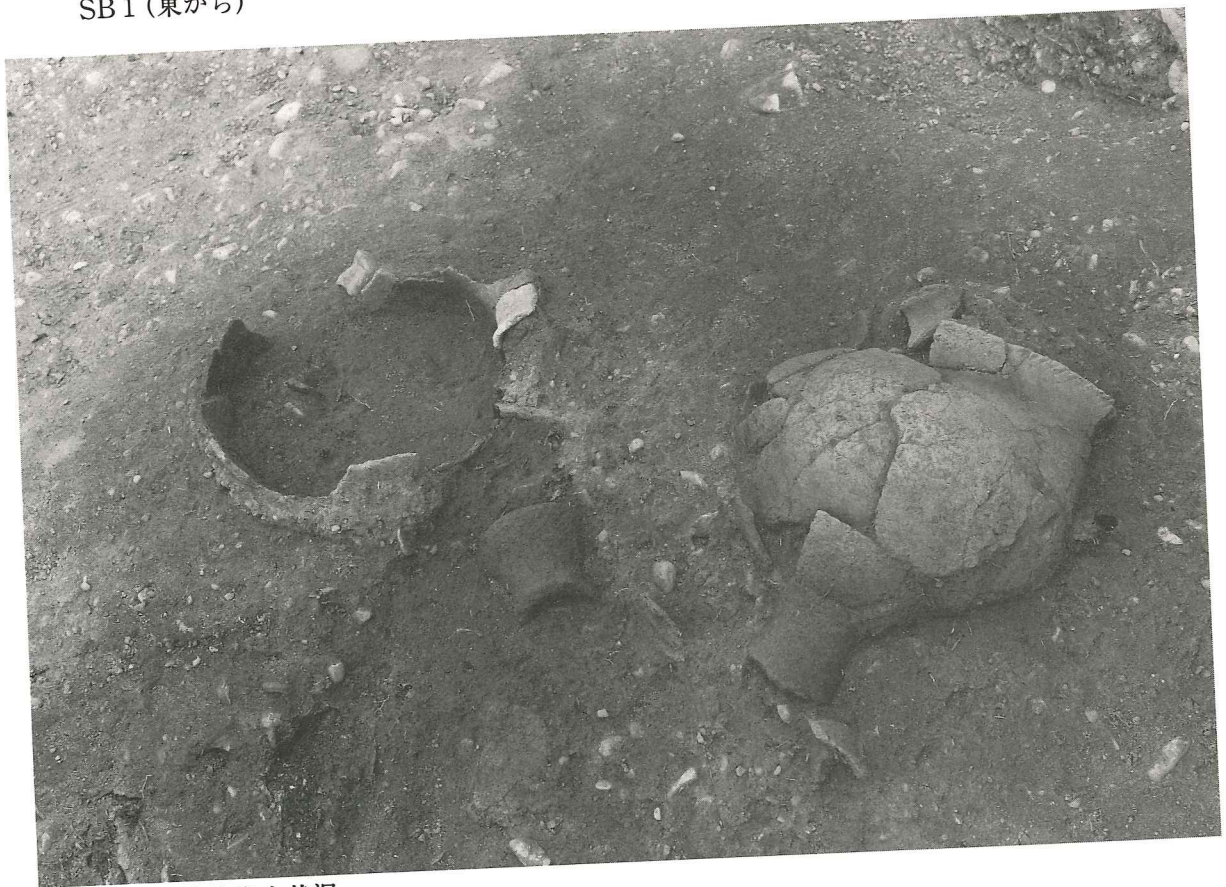


SK 2 遺物出土状況(南から)

F 地点写真図版



SB 1 (東から)



SB 1 遺物出土状況



SB 2・SB 2-1 (南東から)



SB 3 (東から)



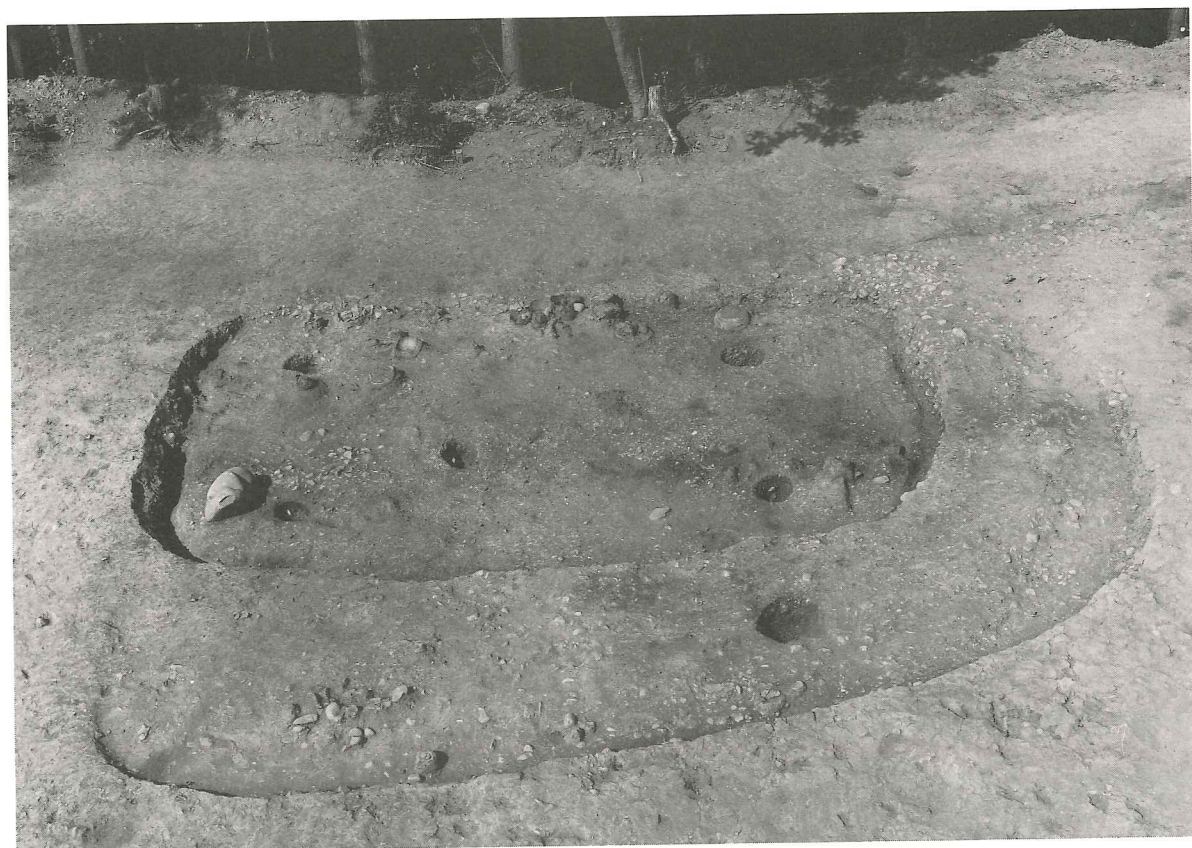
SB 3 遺物出土状況(欠山式)



SB 4・SB 4-2 (南から)



SB 5・SB 5-2 (南から)



SB 6・SB 6-2 (南から)



SB 6 遺物出土状況No. 1



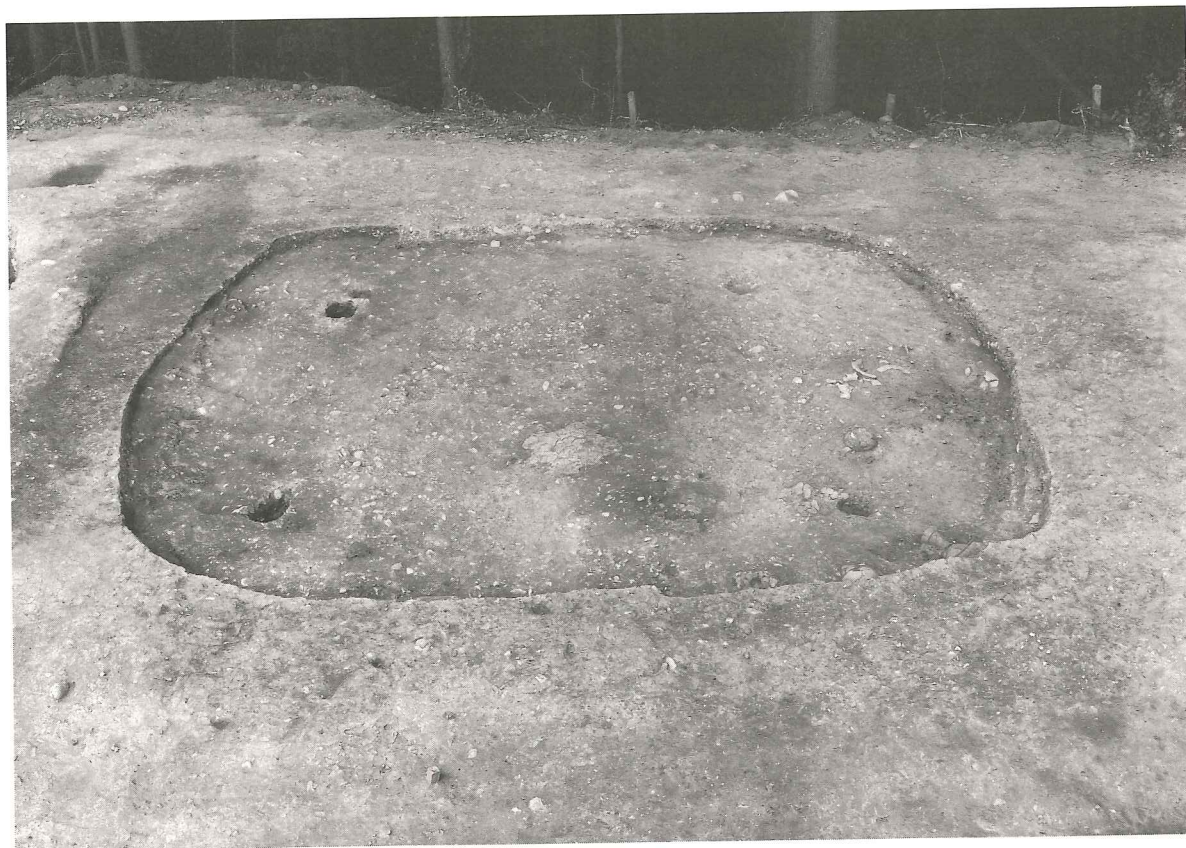
SB 6 遺物出土状況No. 2



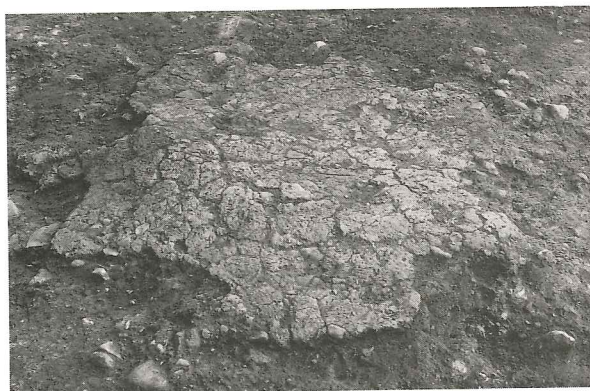
SB 6 遺物出土状況No. 3



SB 7・SB 7-2 (右側はSB 8・SB 8-2、南側から)



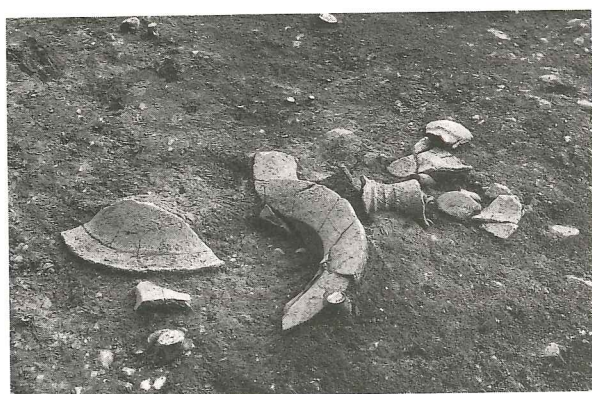
SB 8 (南側から)



SB 8 炉跡



SB 8 遺物出土状況No. 1



SB 8 遺物出土状況No. 2



SB 8 遺物出土状況No. 3



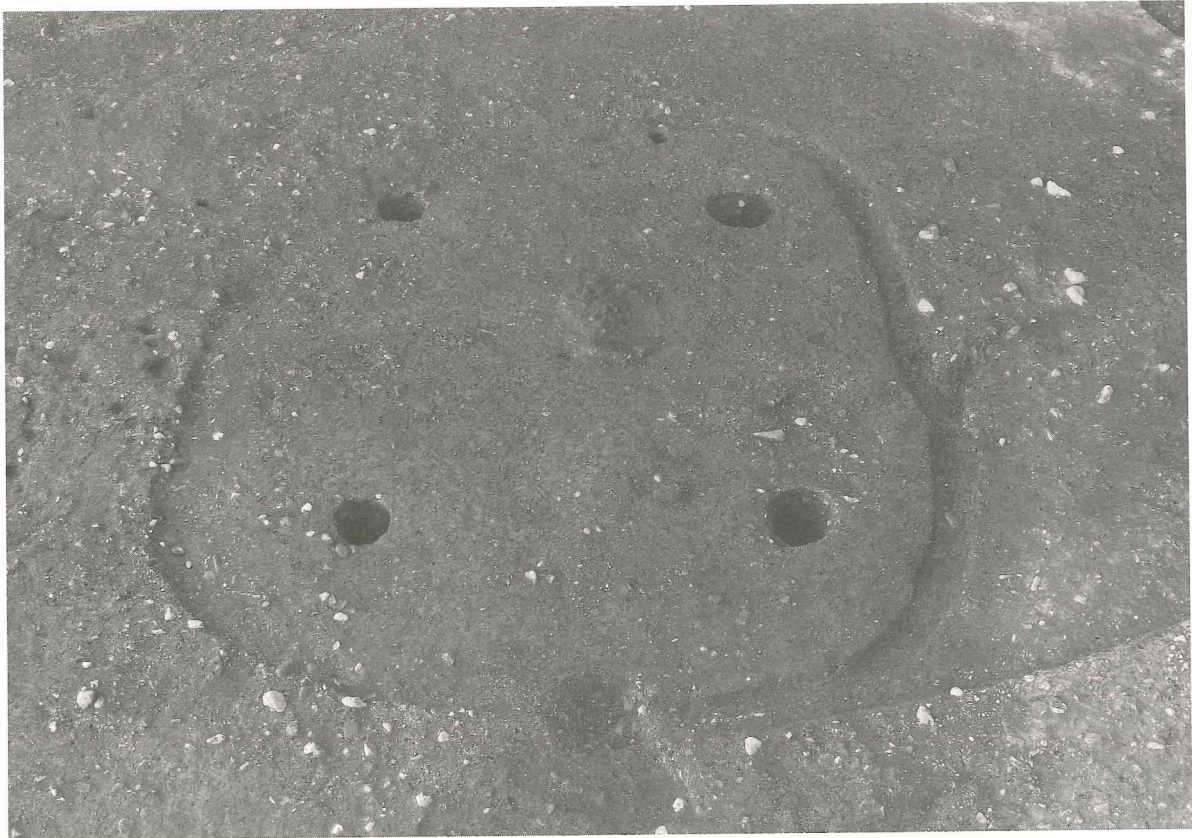
SB 8・SB 8-2・SB 7・SB 7-2 (手前はSB 9、東から)



SB 9 (右上はSB 3、左下はSB 8、西から)



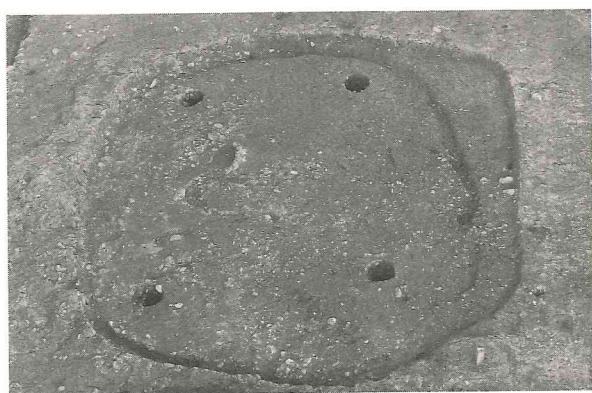
SB10・SB10-2 (上はSB11・SB12、西から)



SB11(南から)



SB12(南から)



SB13(左はSB14、西から)



SB13炉跡



SB14(南から)



SB15(上はSB16、西から)



SB16・SB16- 2 ・SB16- 3 ・SB16- 4 (西から)



SH 1 (南から)



SH 2 (西から)

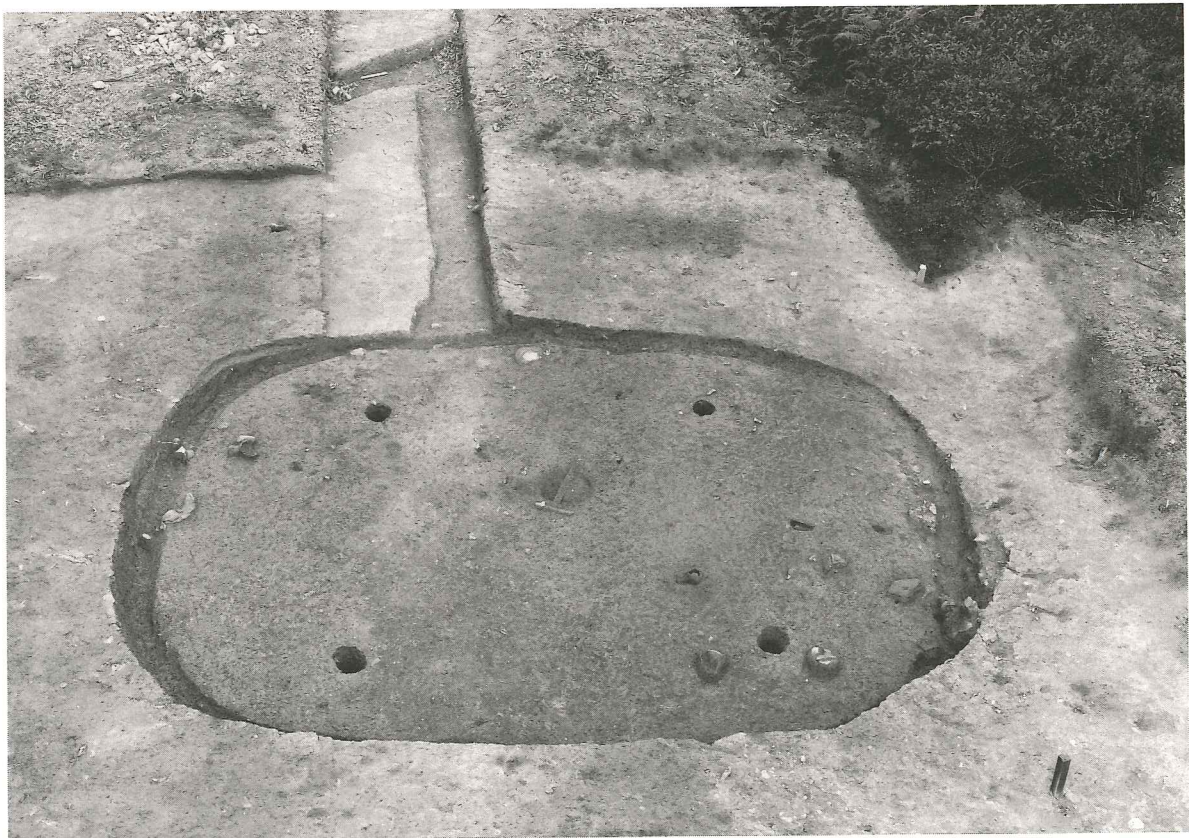
E・G 地点写真図版



E地点土器棺出土状況(確認調査)



E地点不明遺構遺物出土状況(確認調査)



G地点SB 1 (南から)

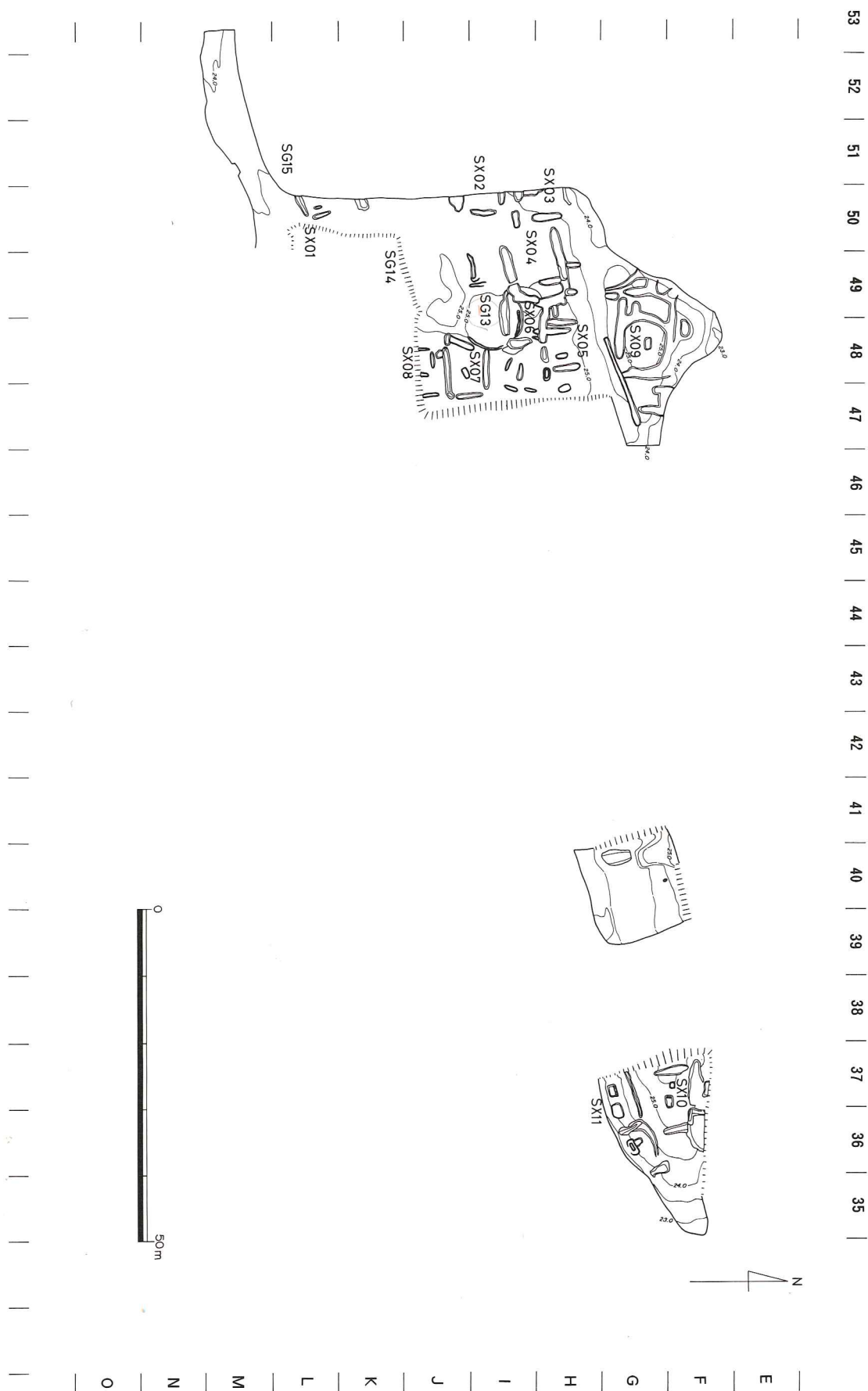


G地点SB 1 炉跡

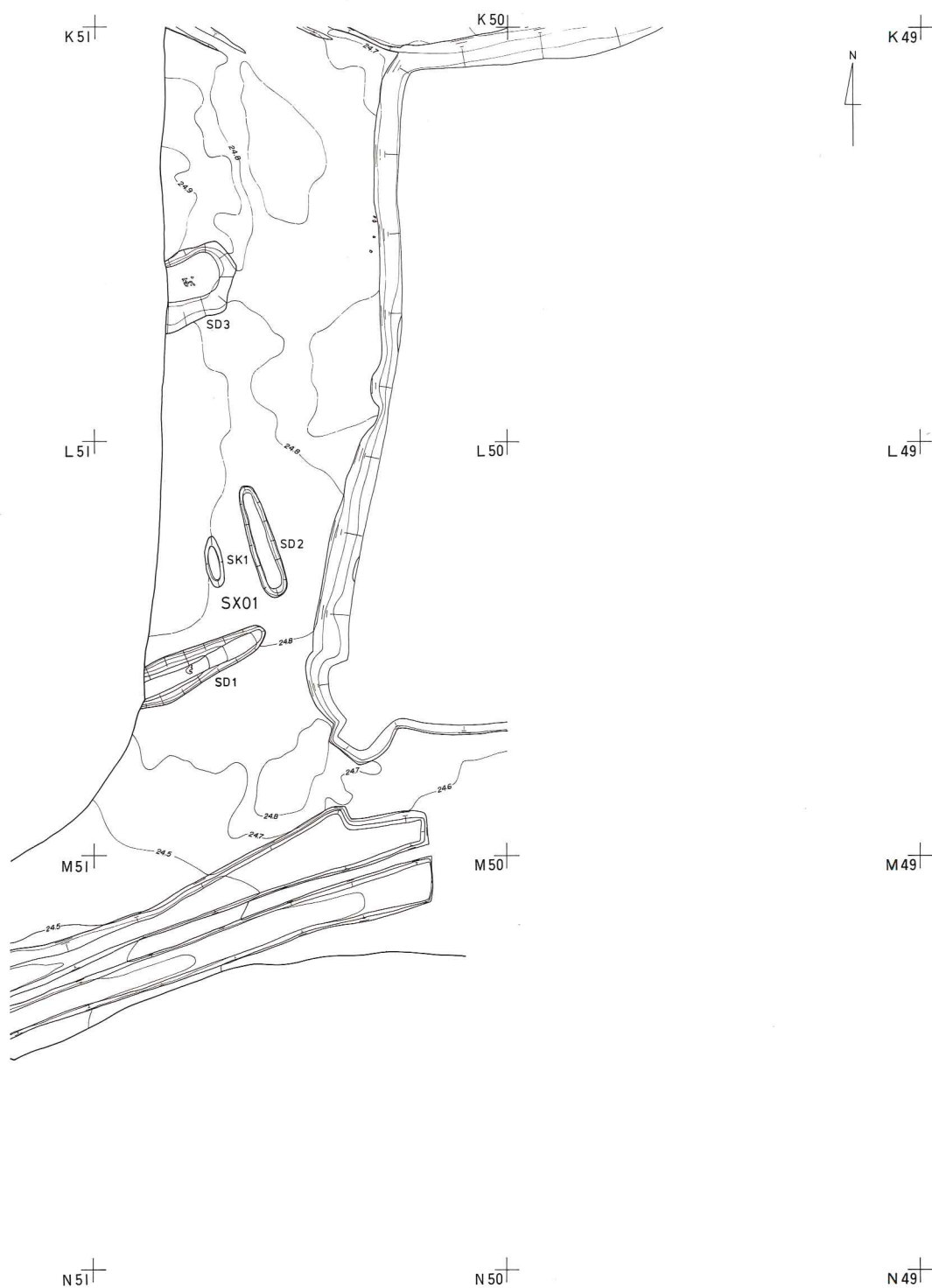


G地点SB 1 遺物出土状況(小型石斧)

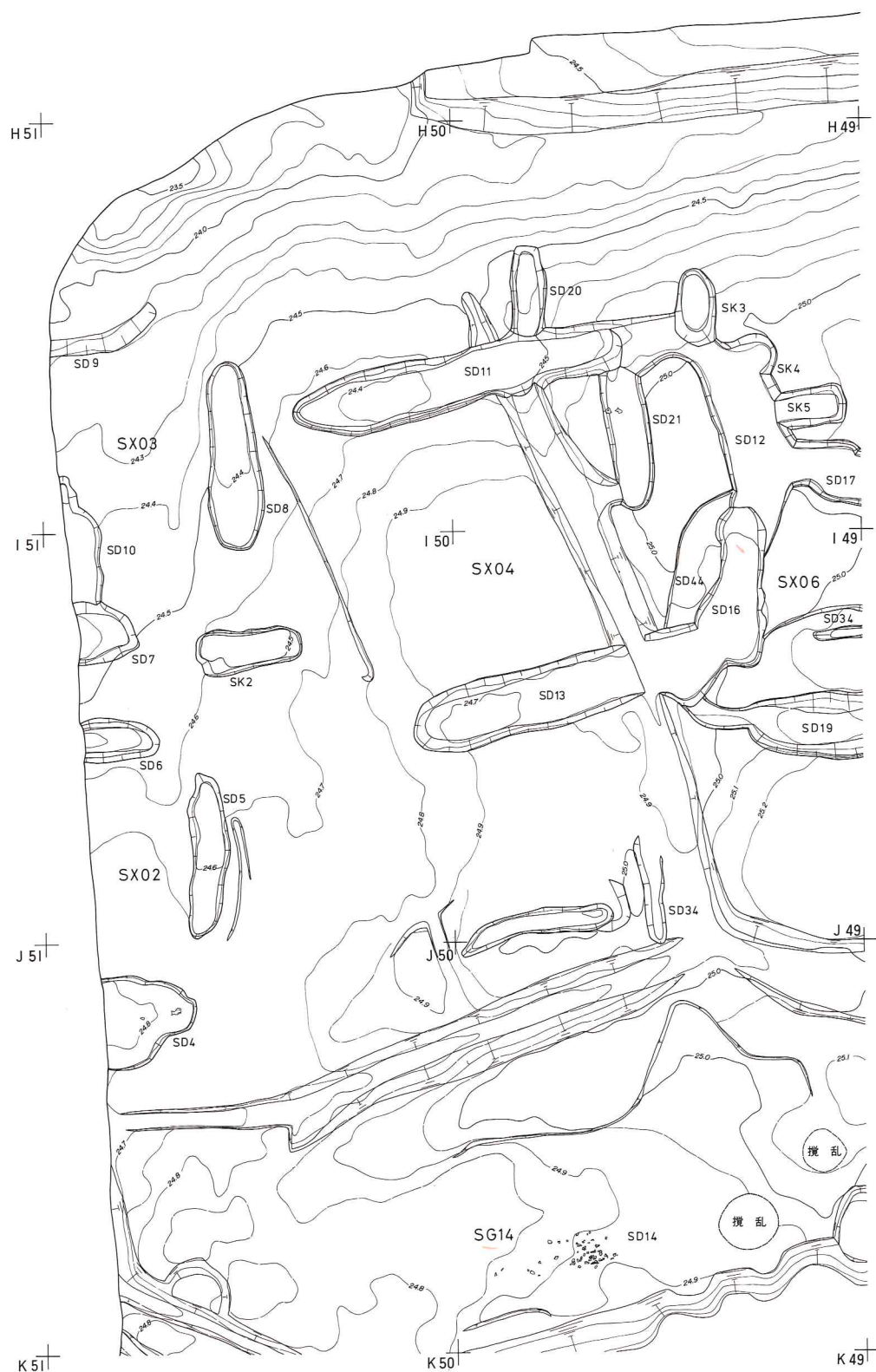
遺構図版



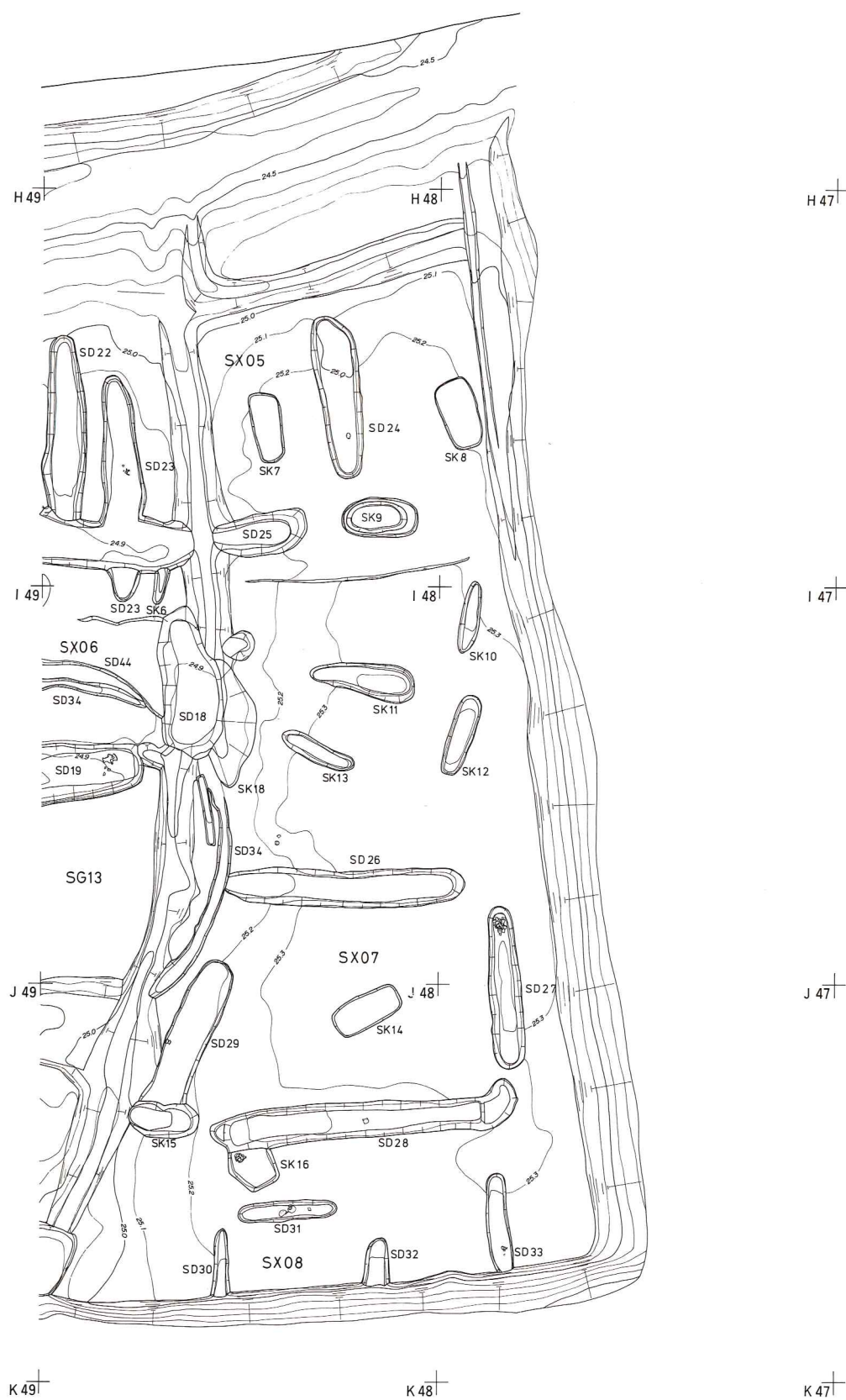
B地点遺構配置図



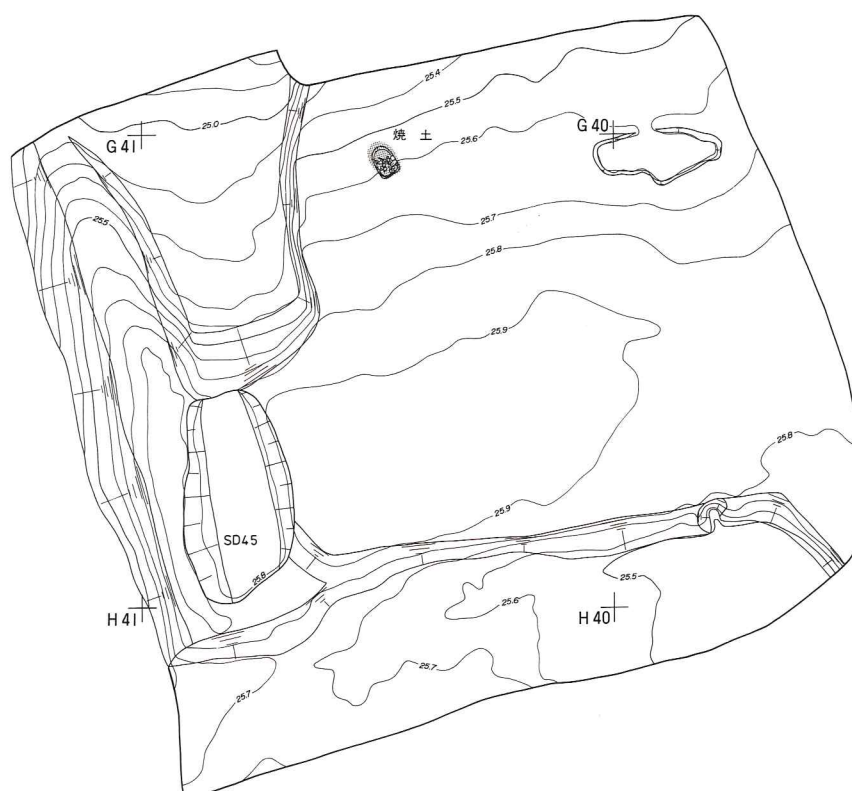
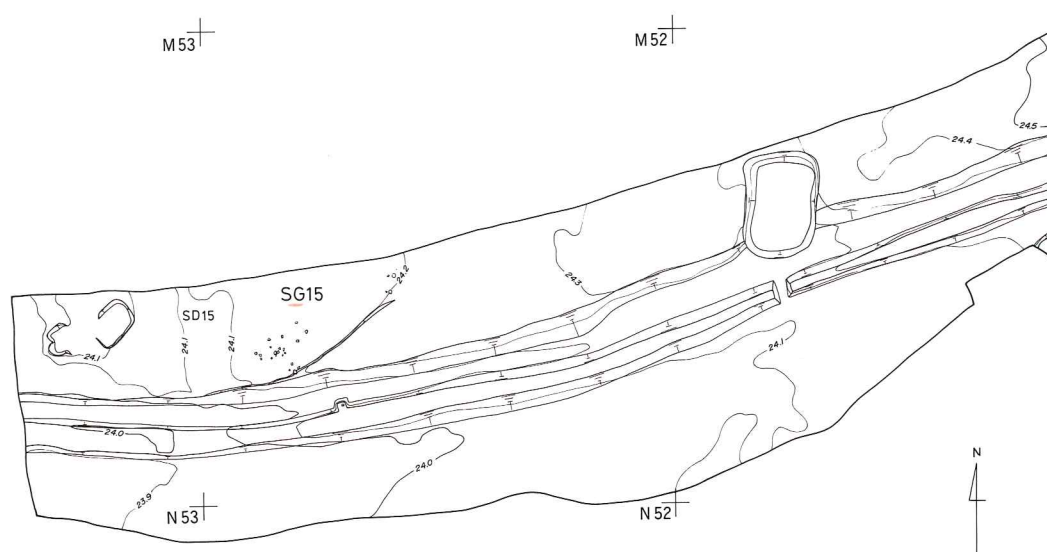
B地点遺構平面図(中央区)(No. 1) (1:160)



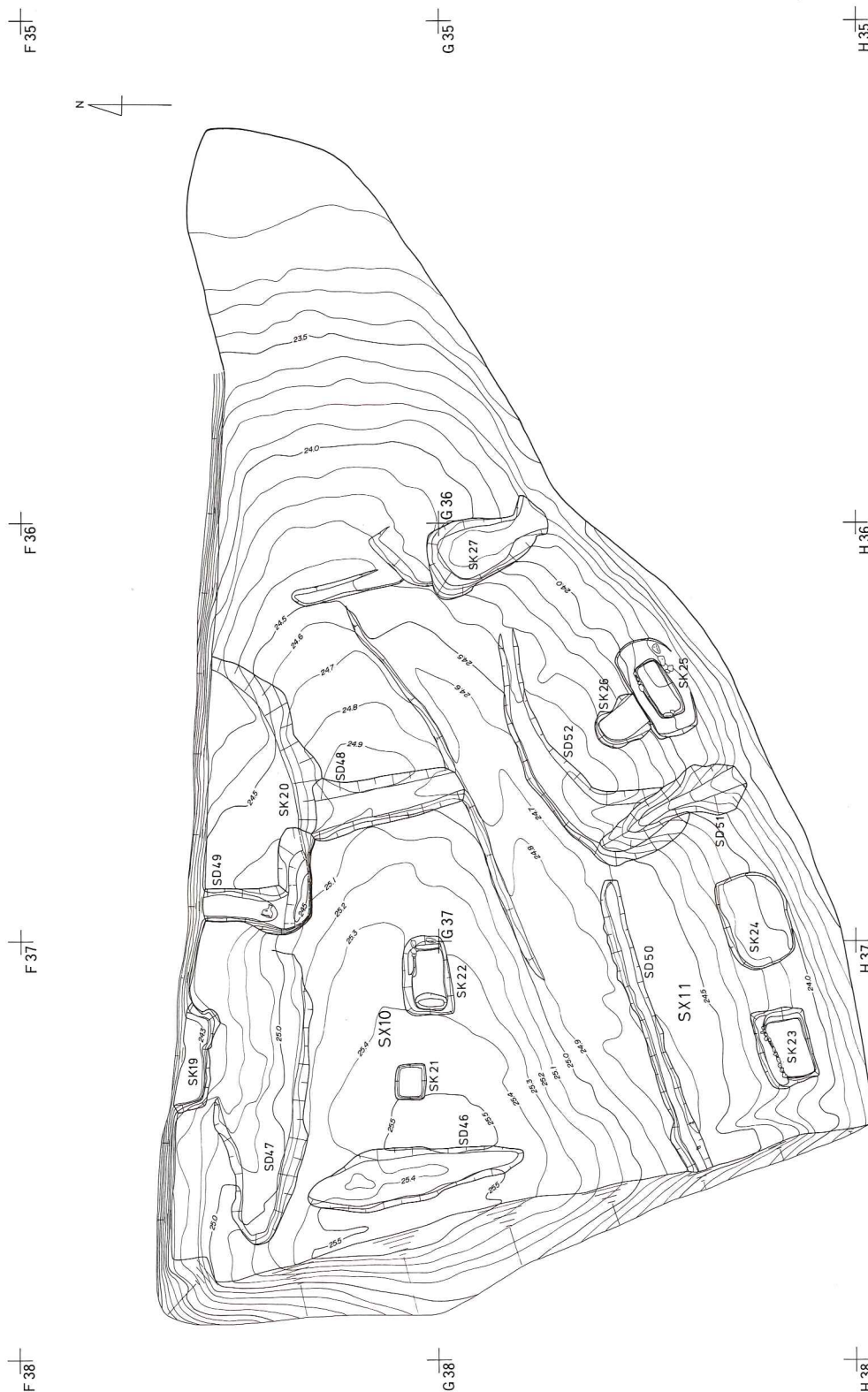
B地点遺構平面図(中央区)(No. 2) (1:160)



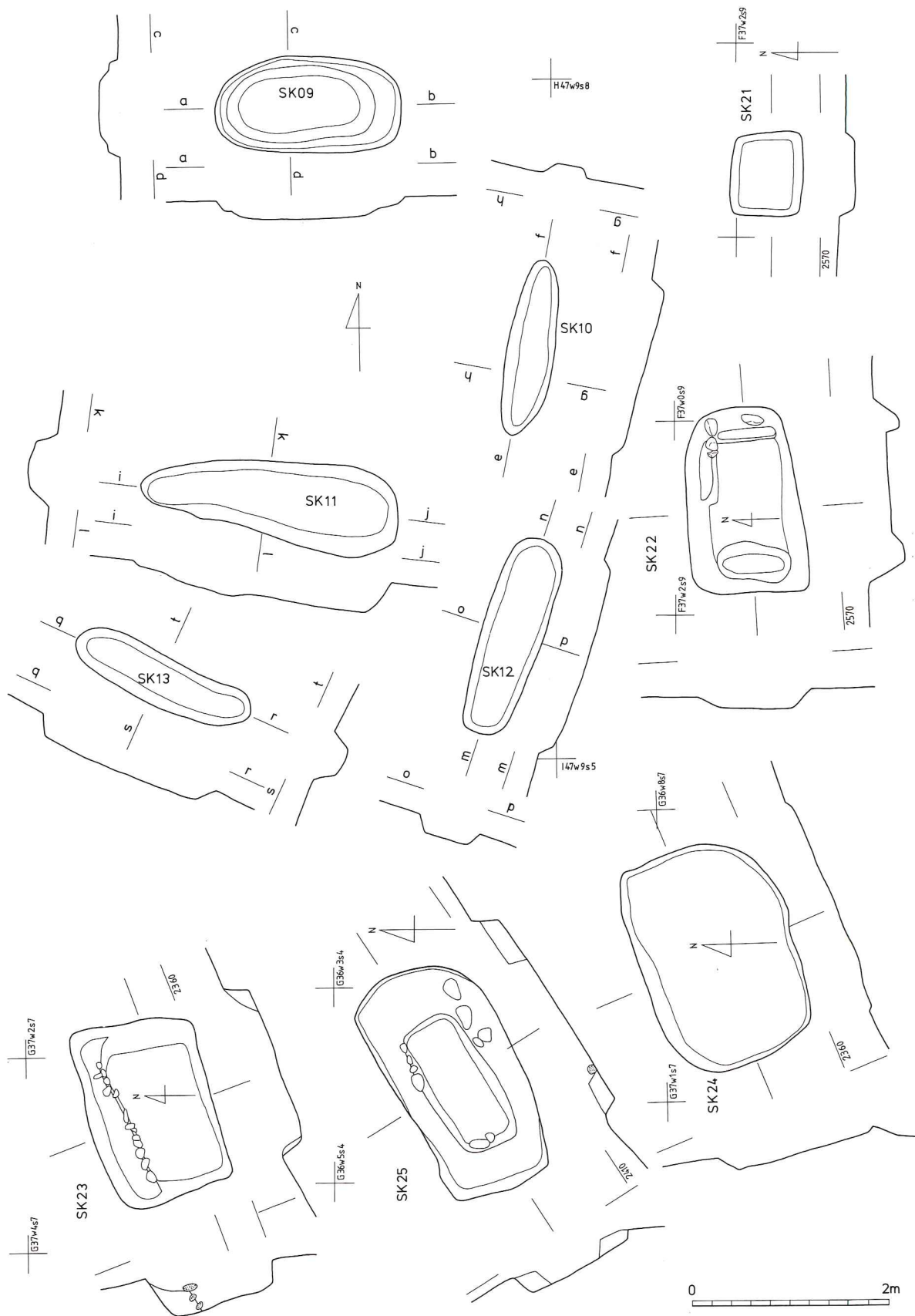
B地点遺構平面図(中央区)(No. 3) (1:160)



B地点遺構平面図(中央区・東区)(No. 4)(1:160)

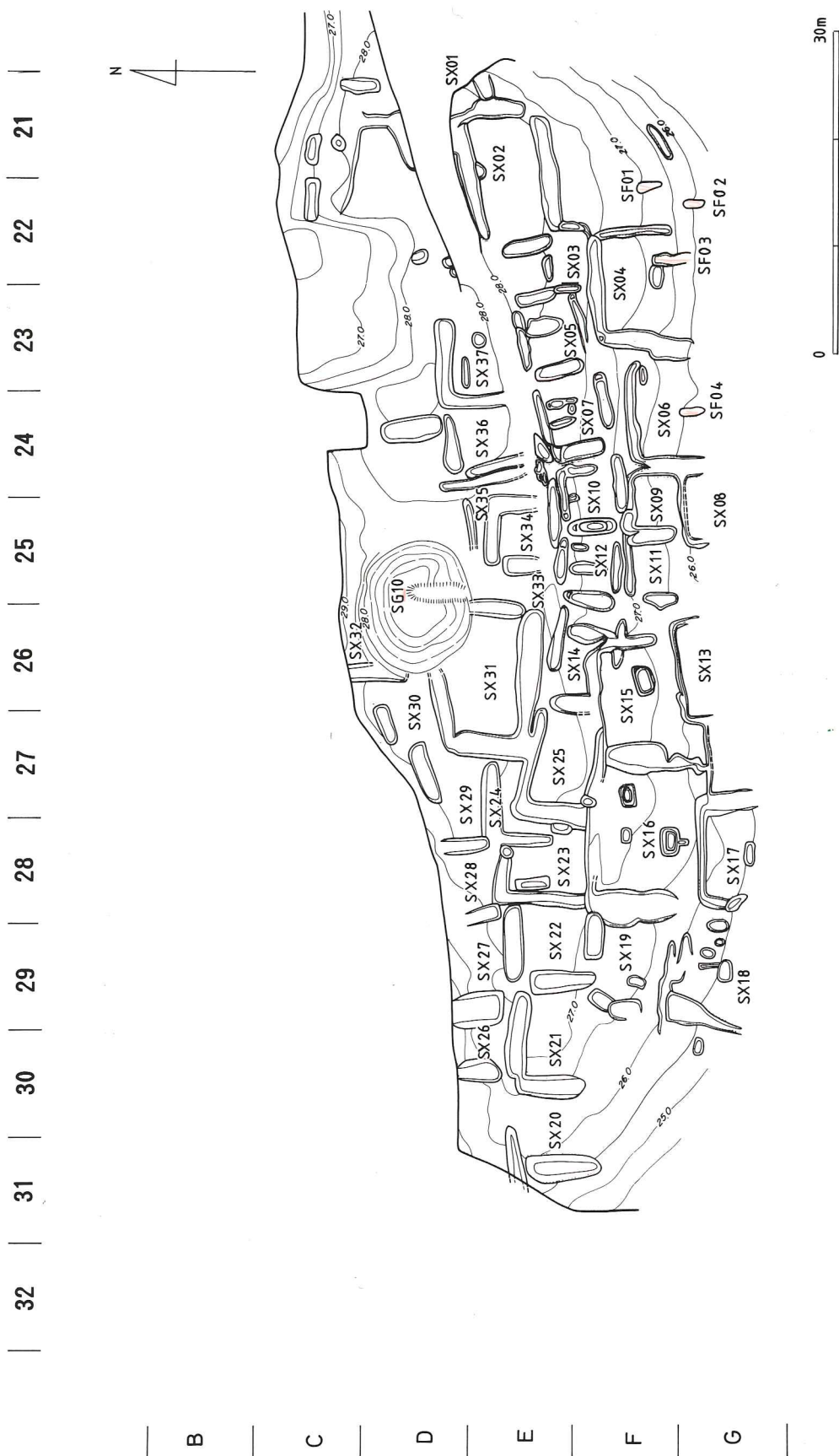


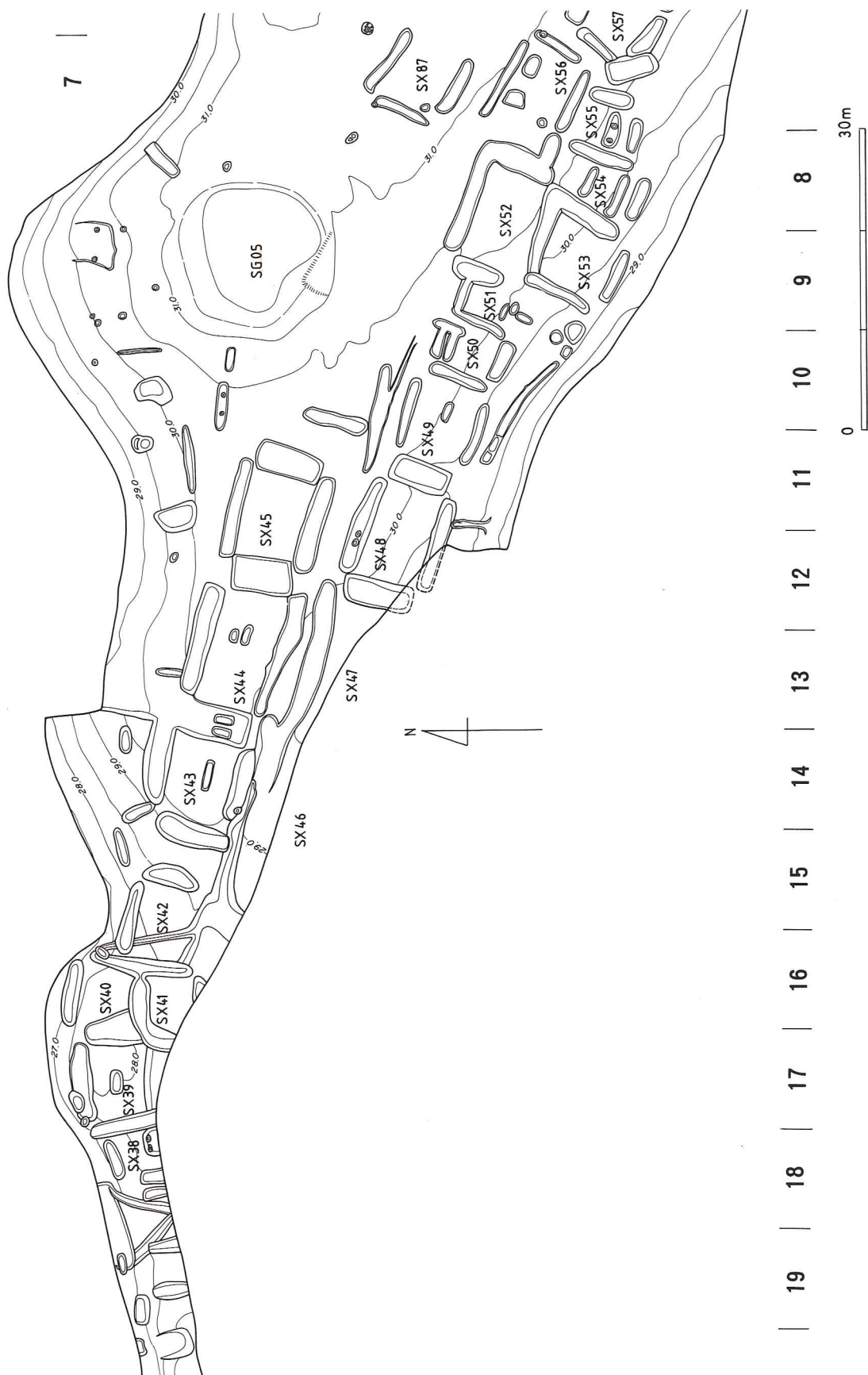
B地点遺構平面図(東区)(No. 5) (1:160)



B地点土坑实测图(SK 9·11·21~25)

C地点遺構配置図(No.1)





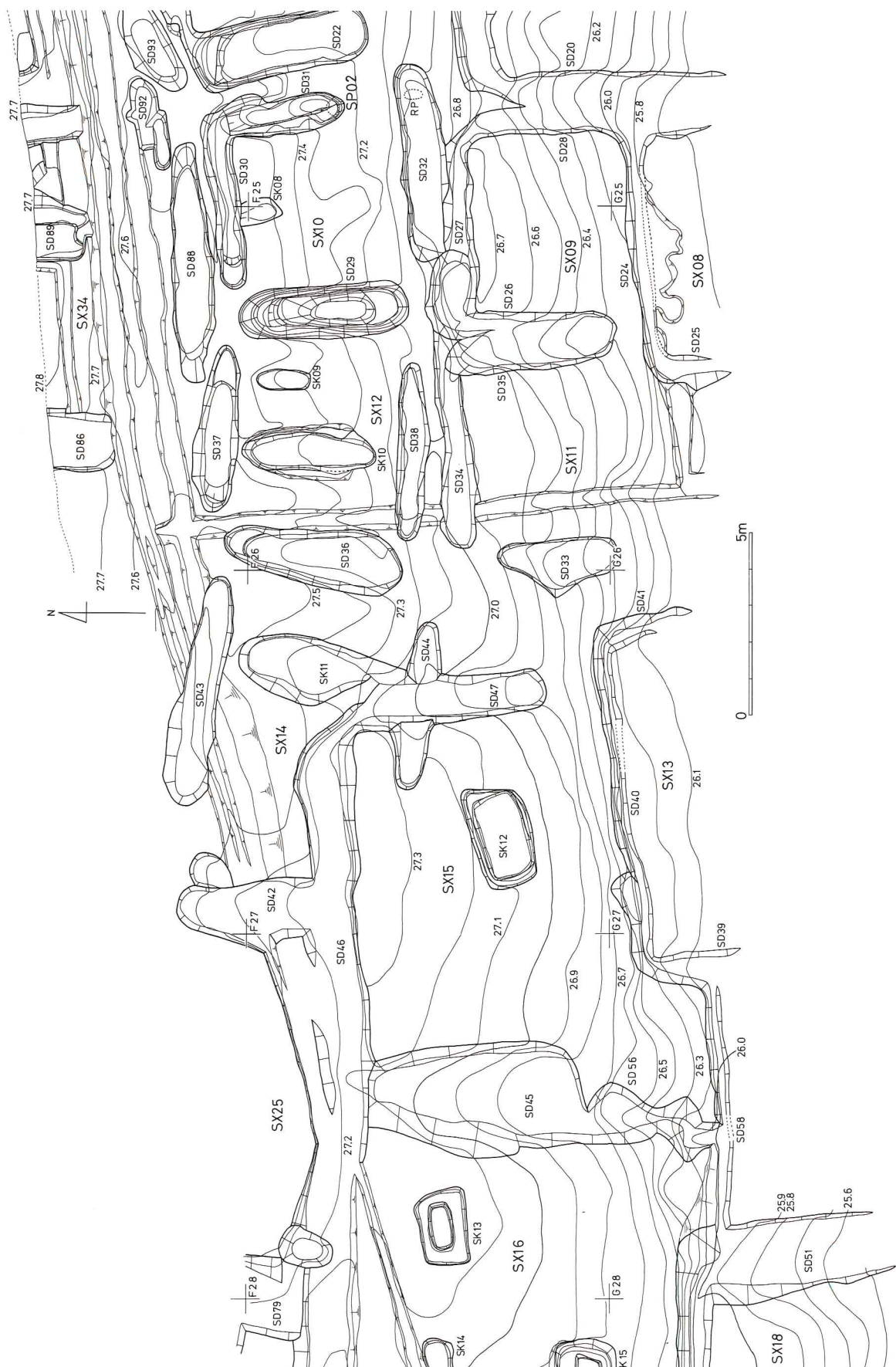
C地点遺構配置図(No. 2)



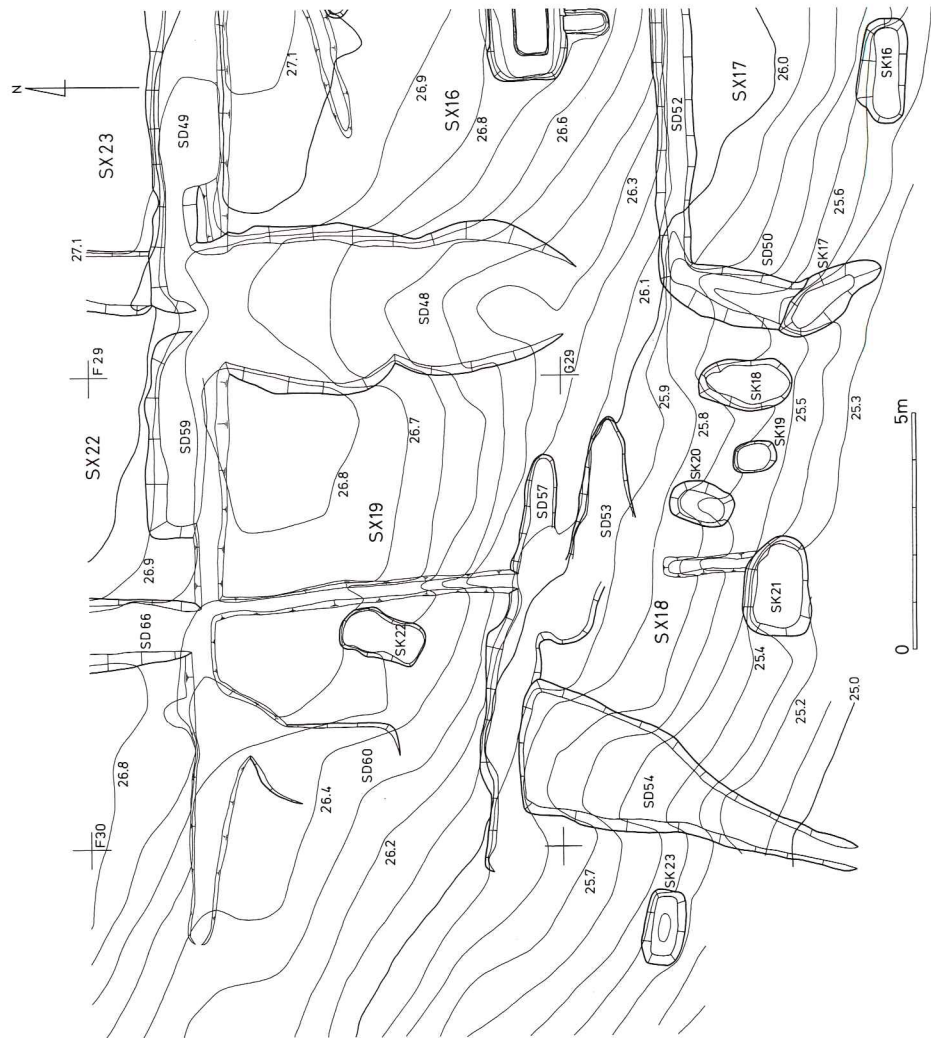
C地点遺構配置図(No. 3)



C地点遺構平面図(No.1)



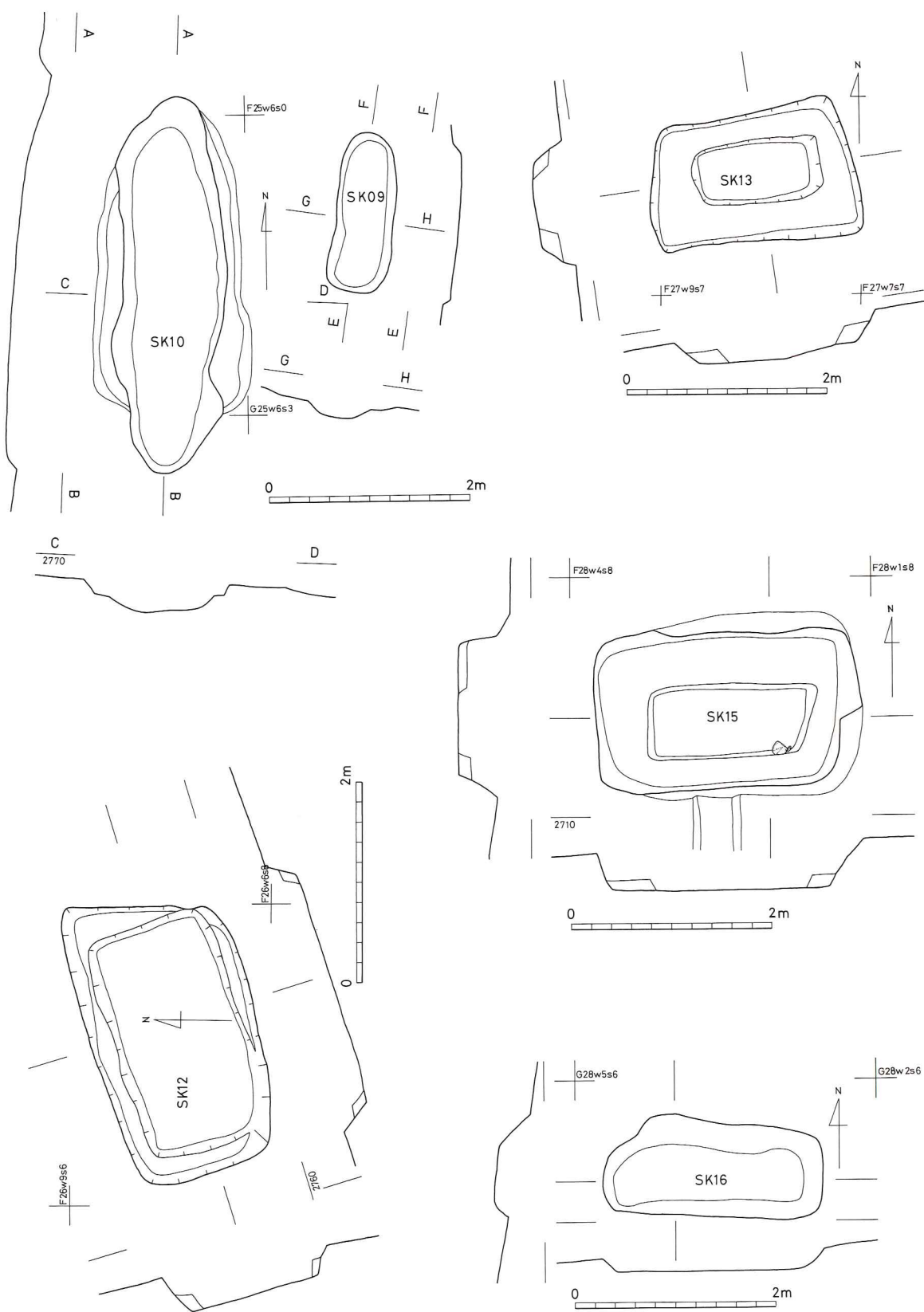
C地点遺構平面図(No. 2)



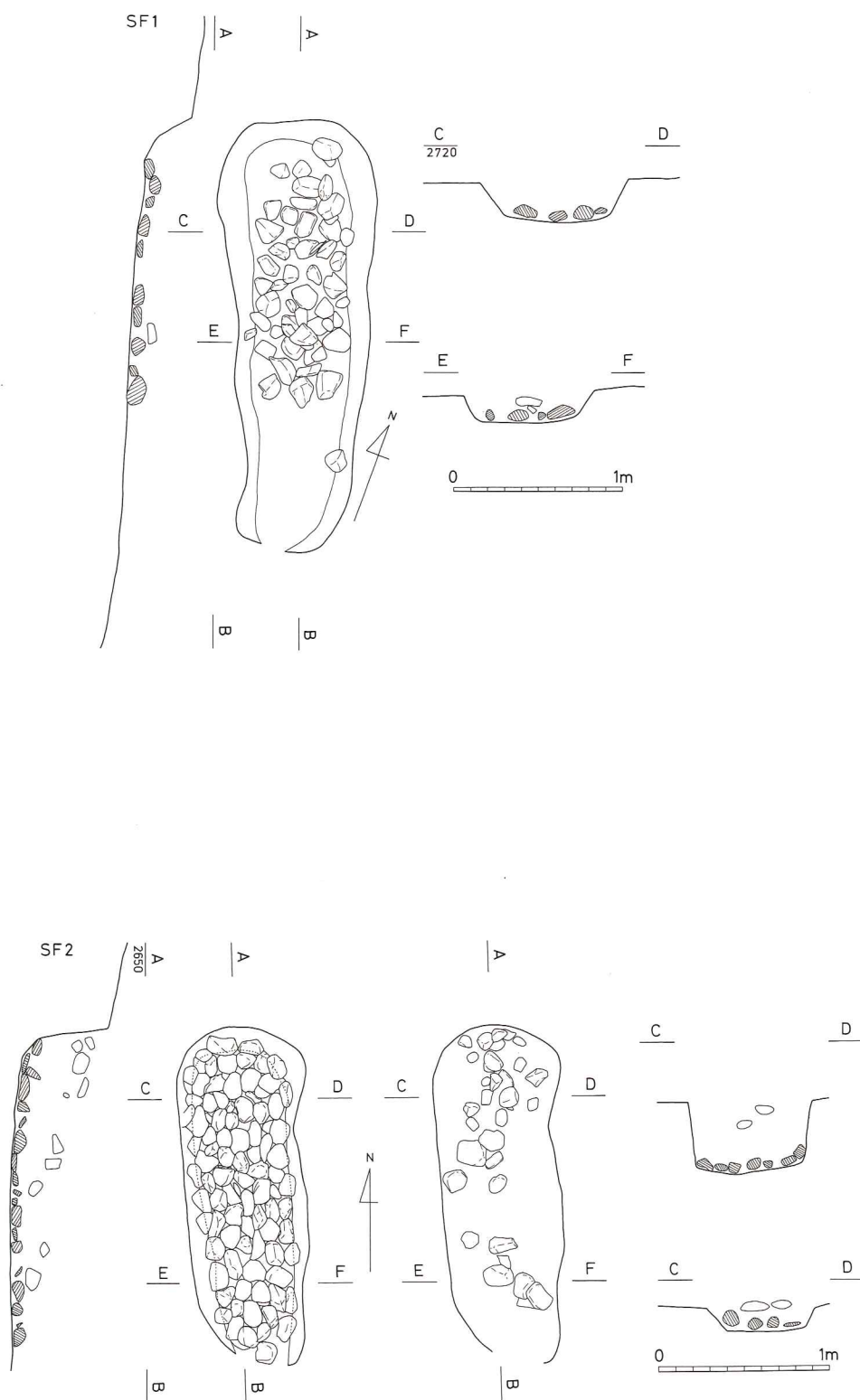
C地点遺構平面図(No. 3)



C地点土坑・土器棺および遺物出土状況実測図(SP1・2、SK2・4・23、SD32)

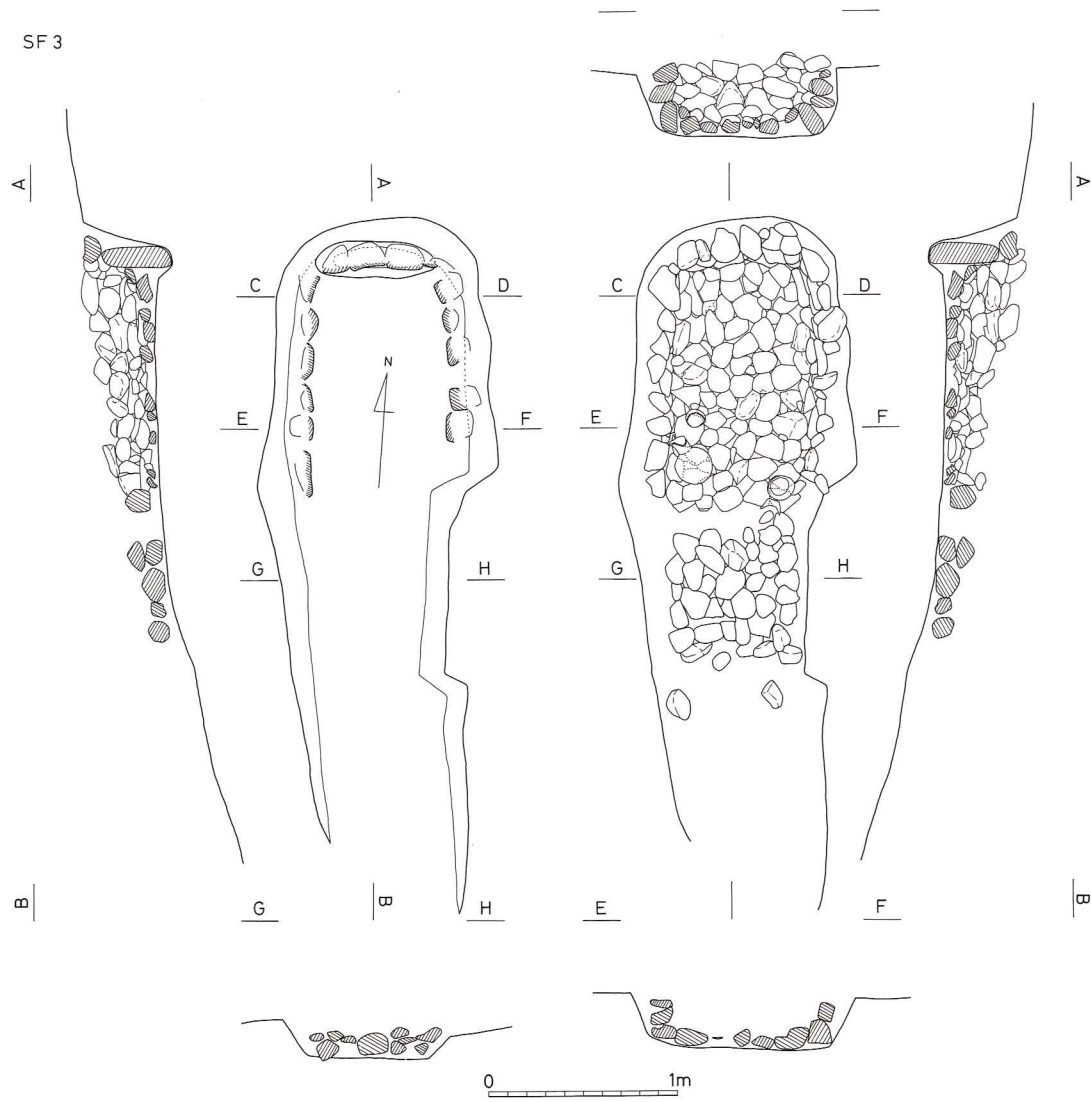


C 地点土坑实测图 (SK 9·10·12·13·15·16)

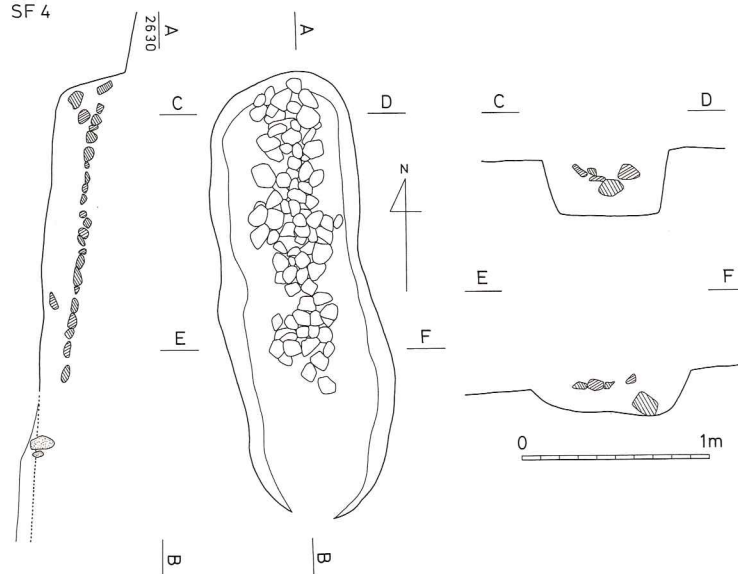


C地点1·2号墓实测图(SF1·2)

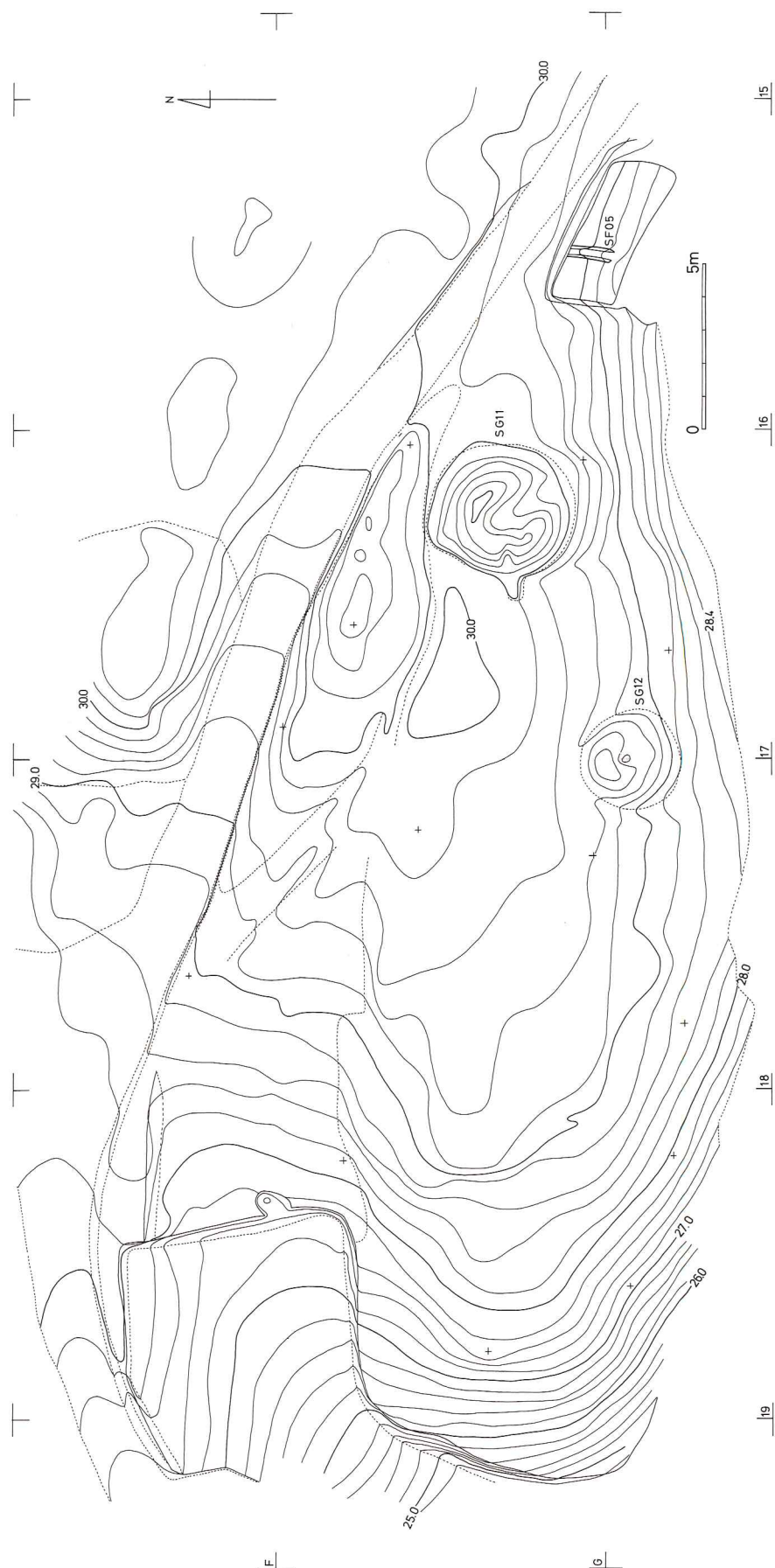
SF 3



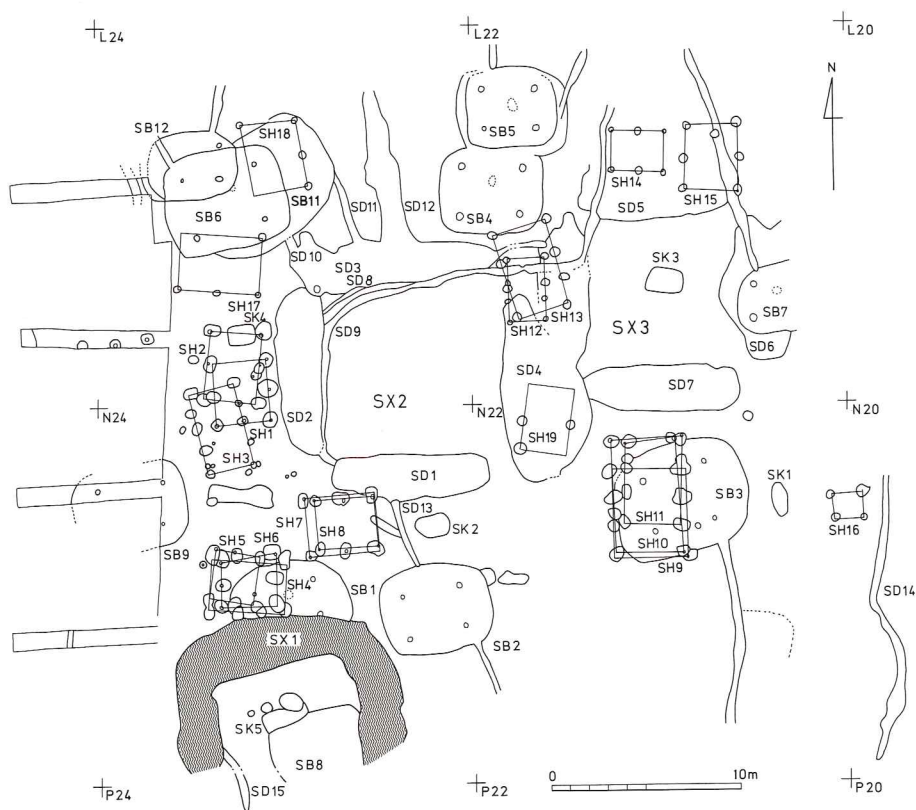
SF 4



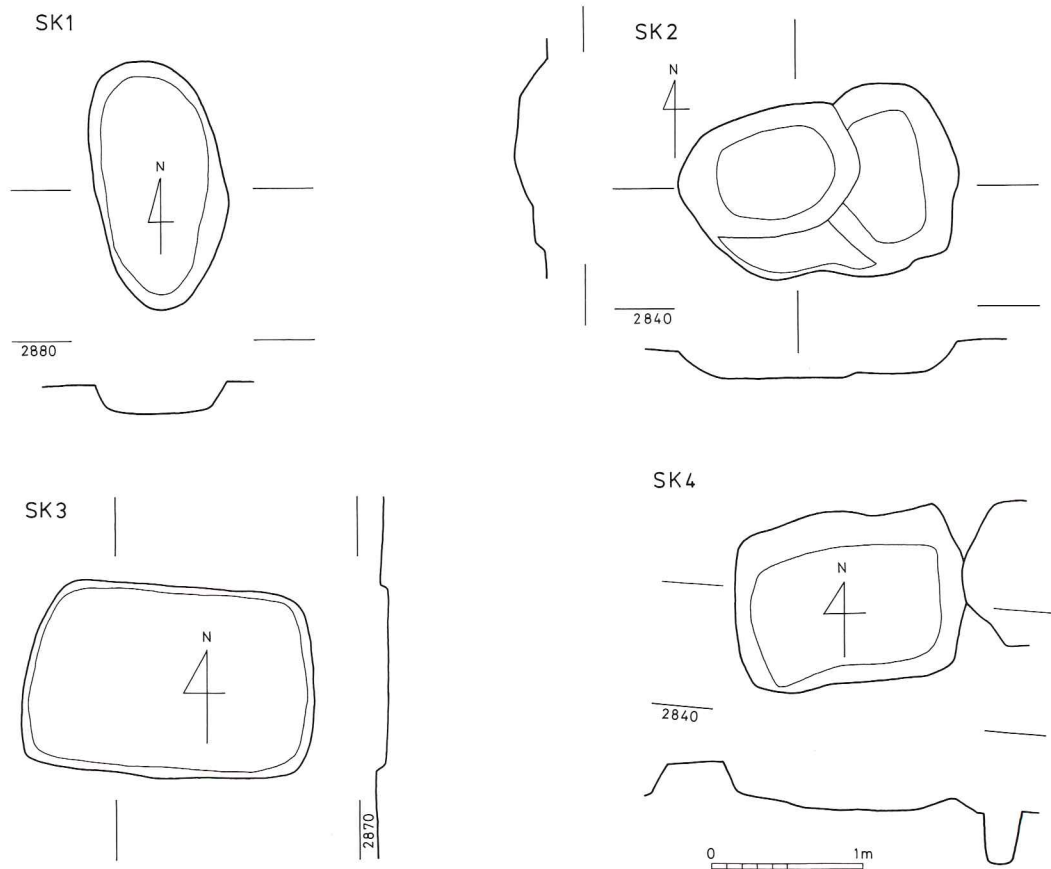
C地点3・4号墓実測図(SF 3・4)



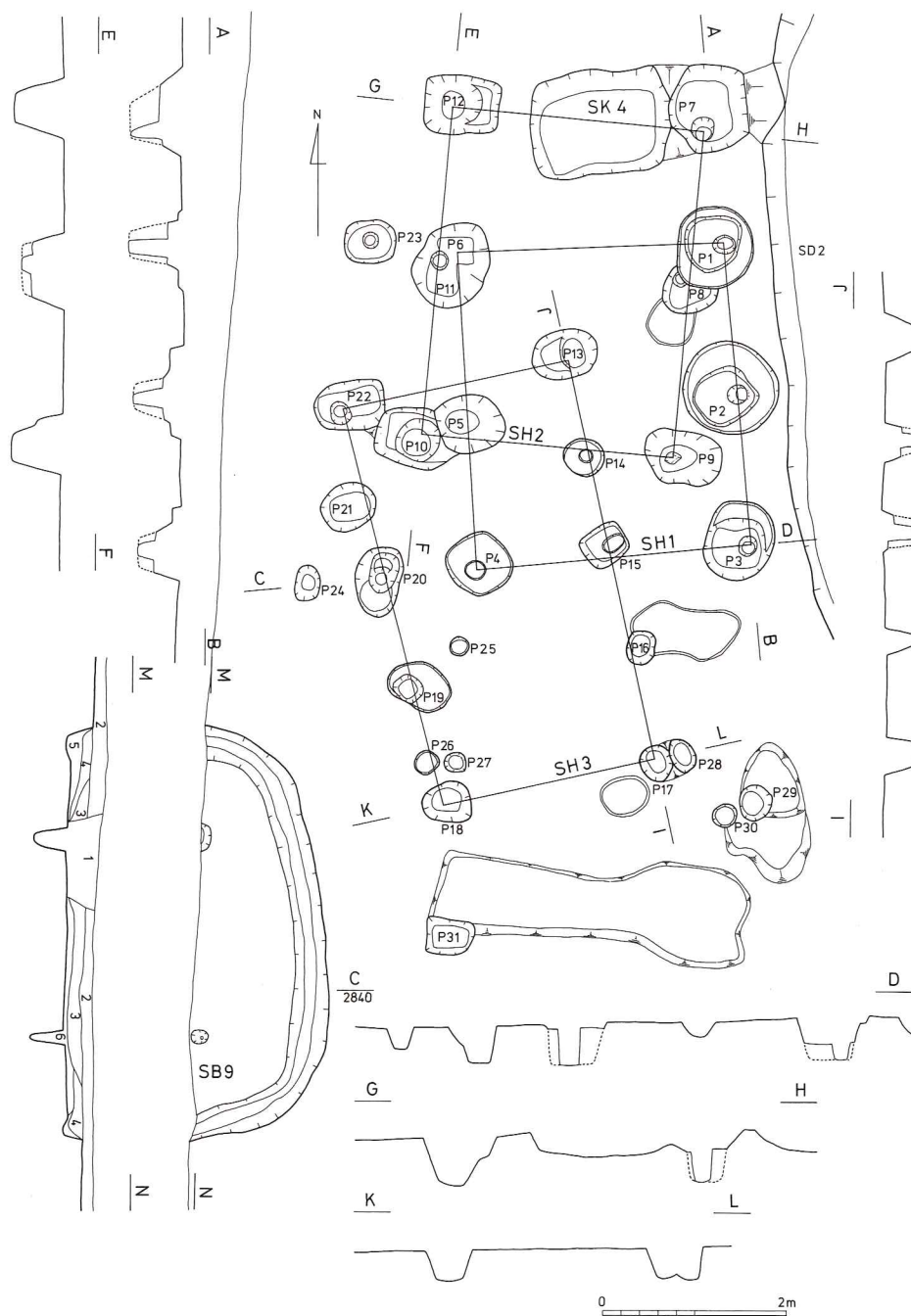
C地点保存用地現況測量図(C地点)



D地点遺構配置図



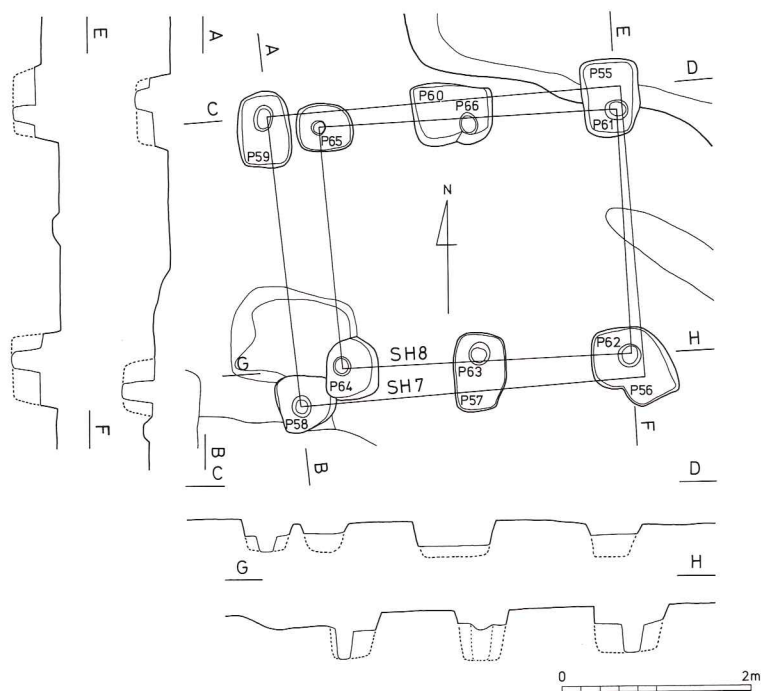
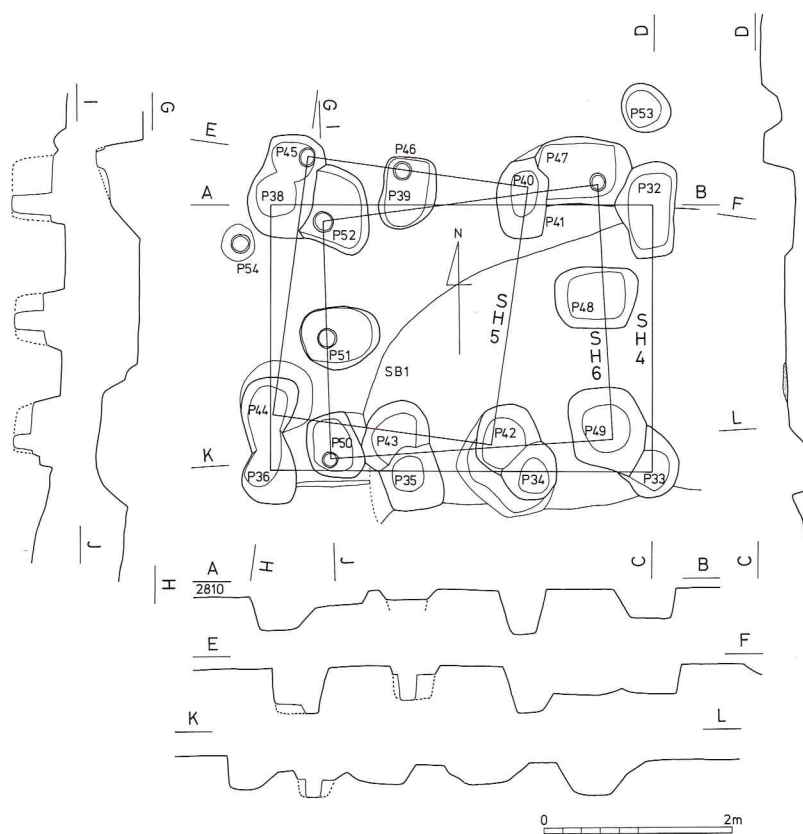
D地点土坑実測図



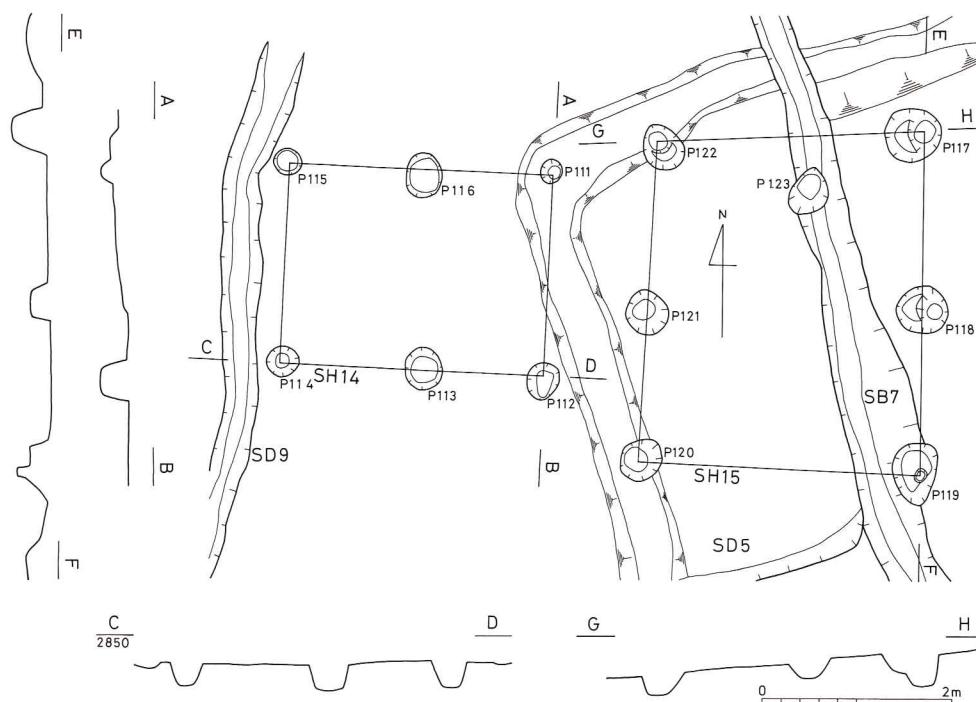
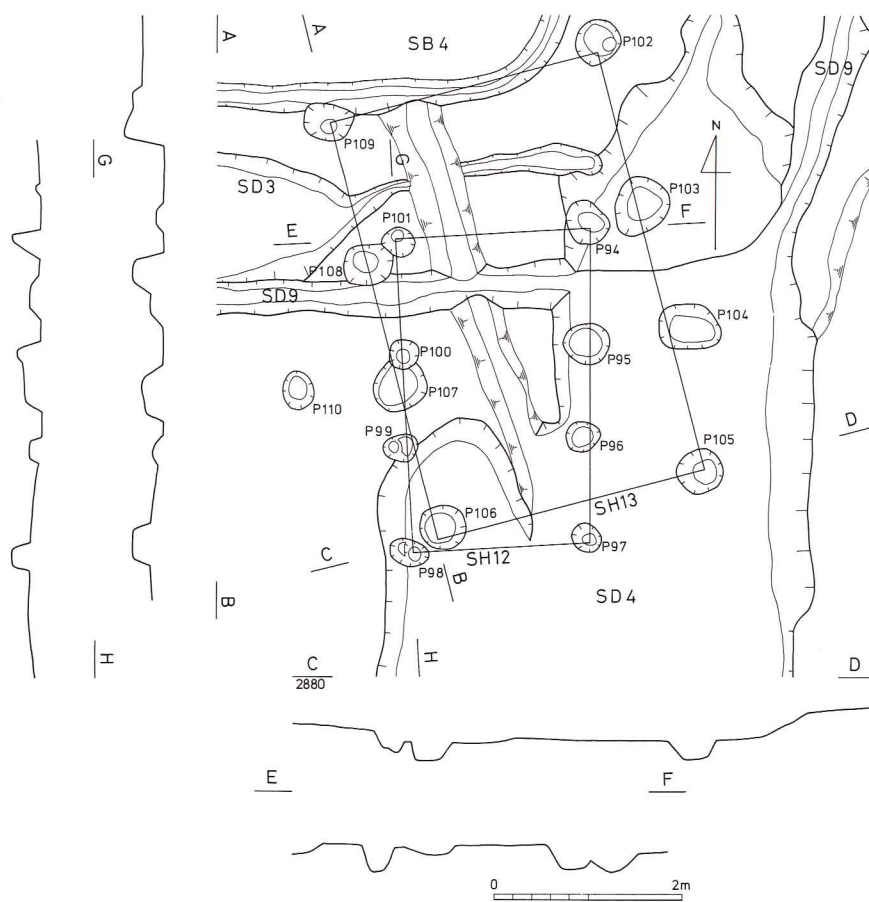
M-Nセクション土層説明

- 1, 試掘トレンチ(2T)、2, 耕作土、3, 黒褐色土、4, 褐色土
- 5, 黒褐色土(炭化物を多く含む)、6, 褐色土と黒褐色土の混合

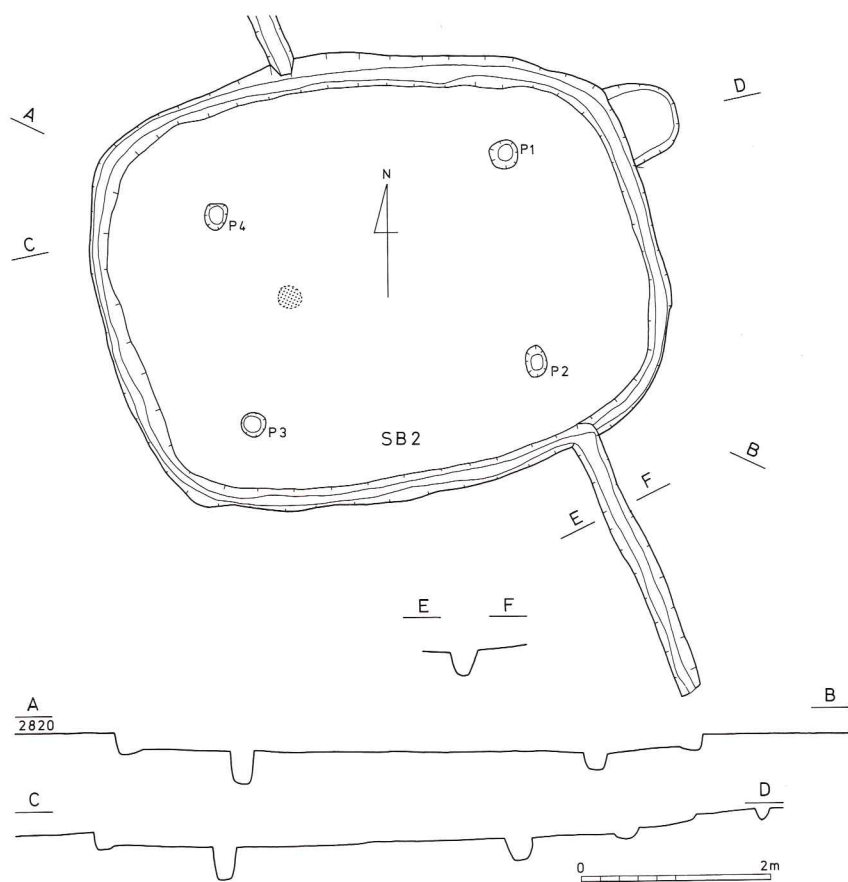
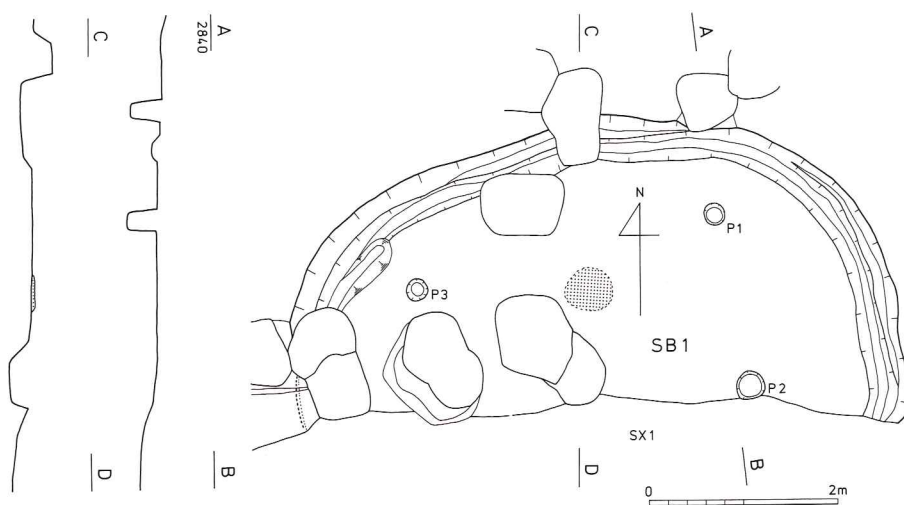
D地点SH1・2・3、SK4、SB9実測図



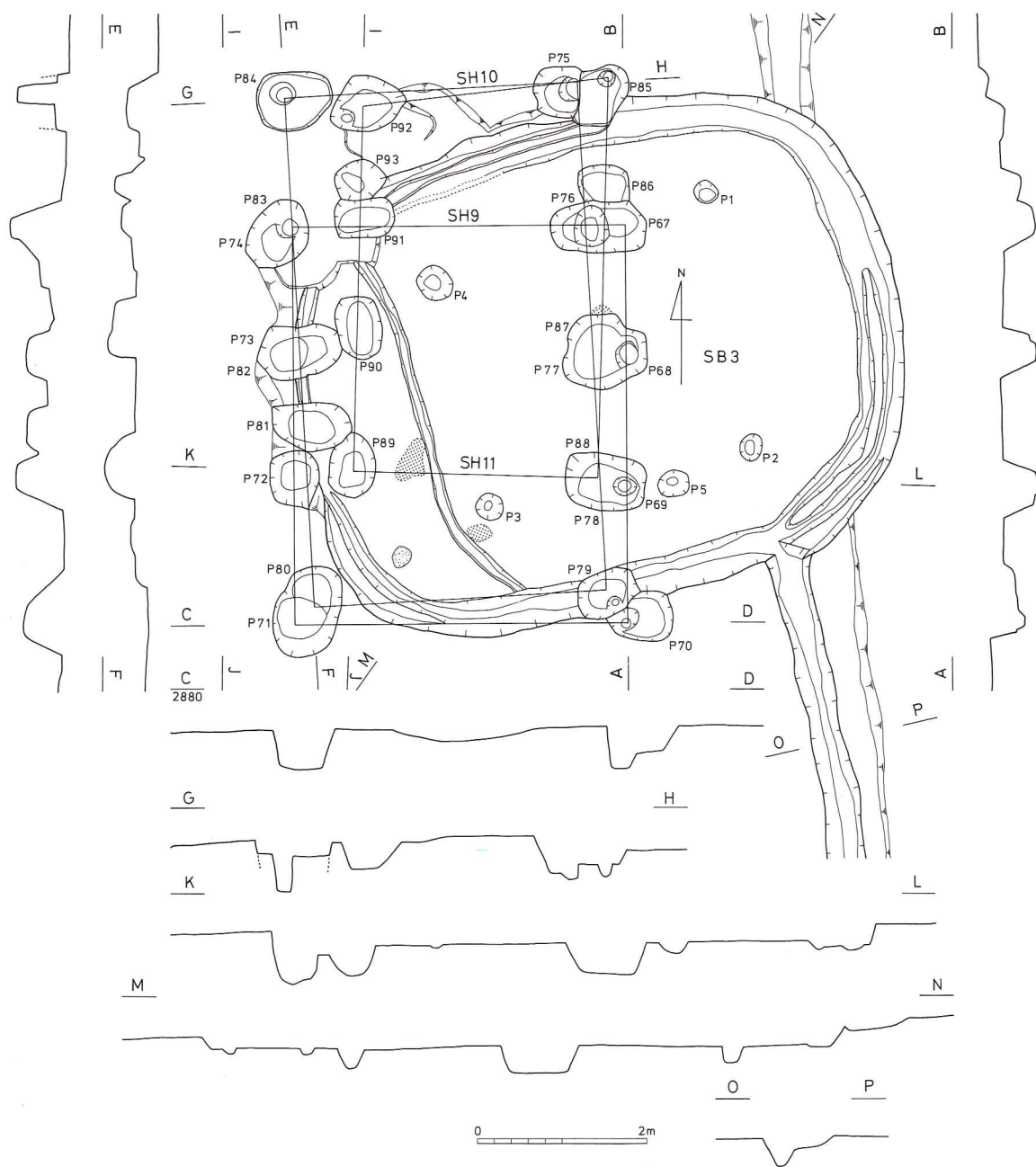
D地点SH 4・5・6 (上)、SH 7・8 (下)実測図



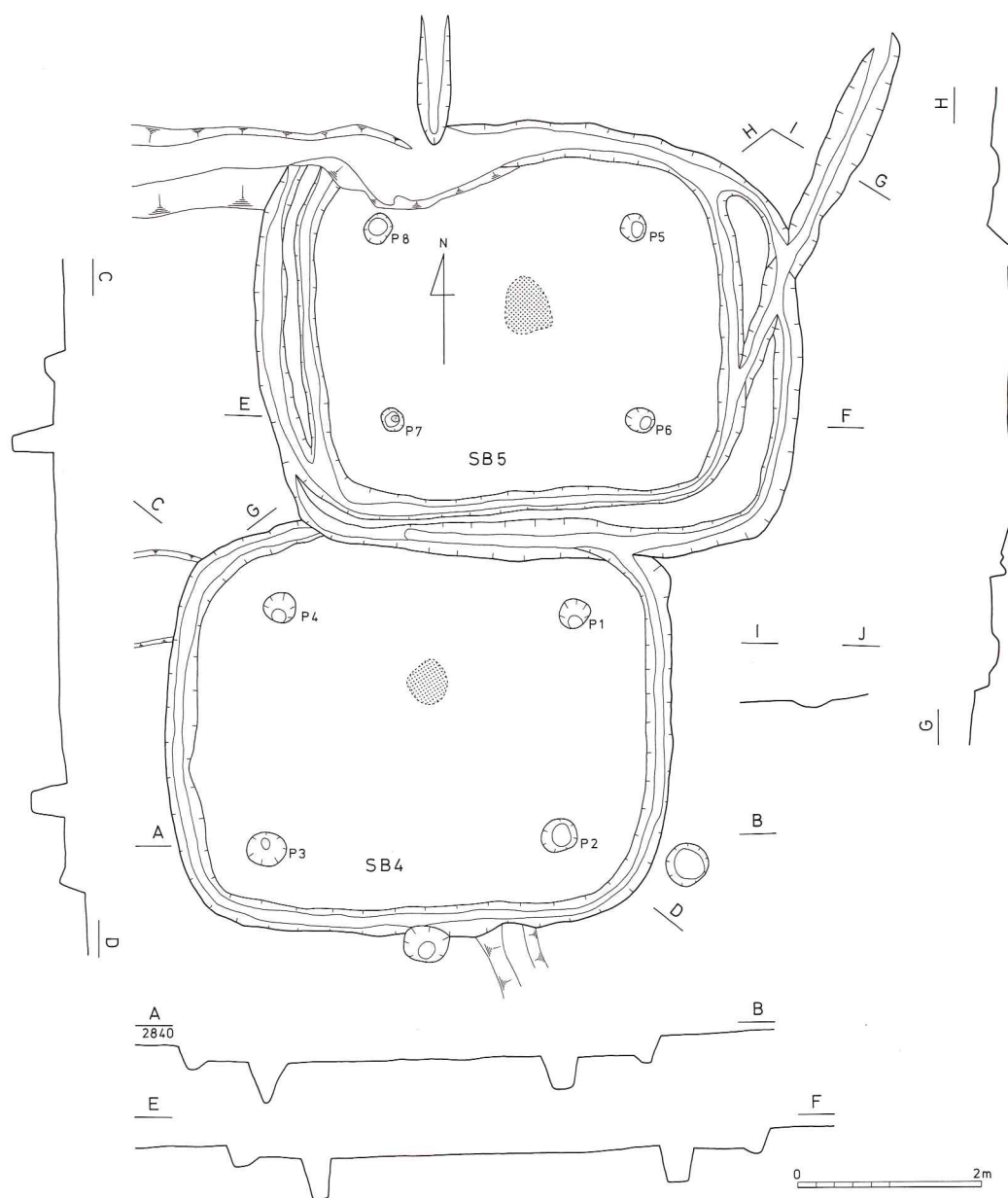
D地点SH12·13(上)、SH14·15(下)实测图



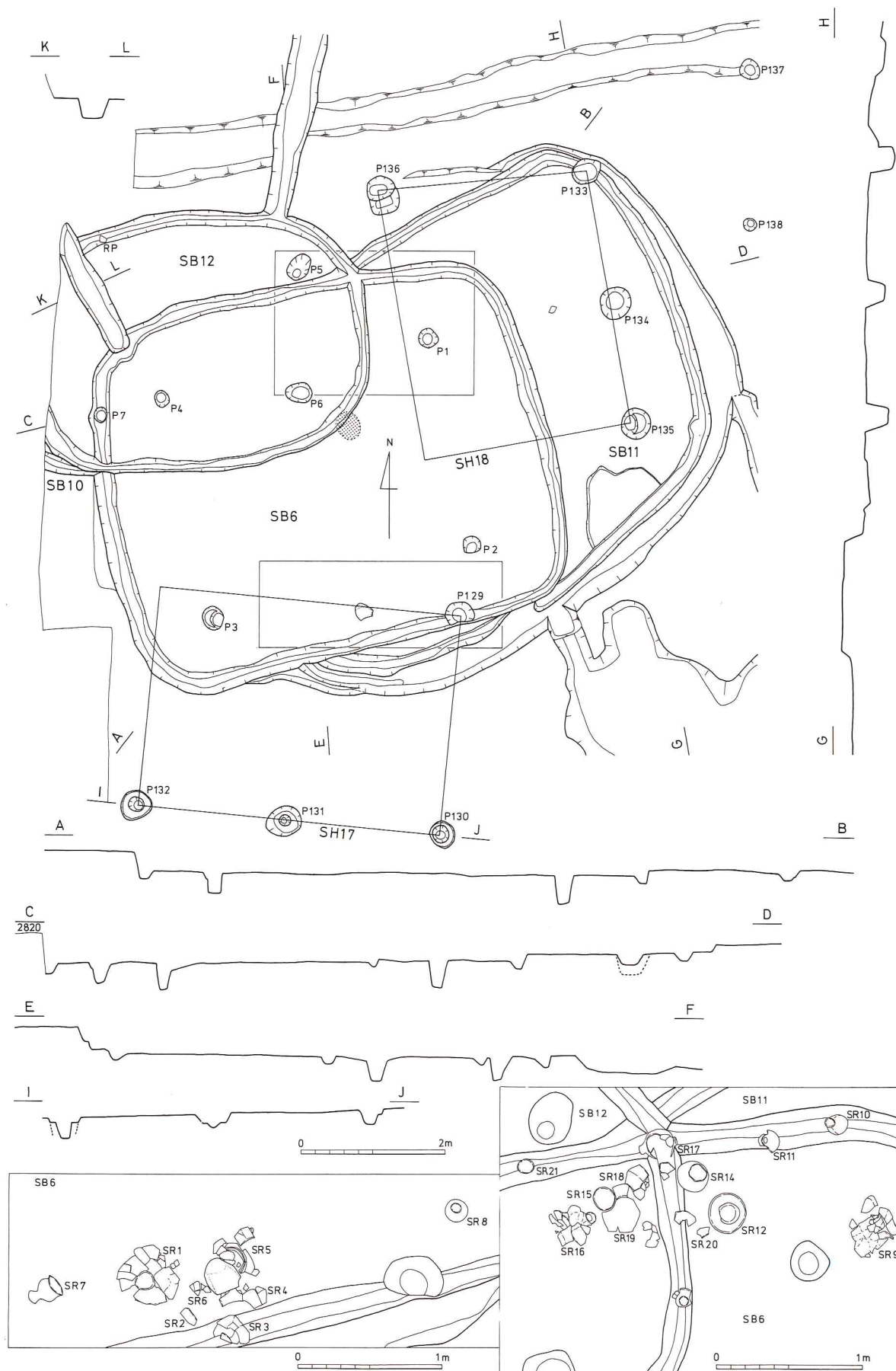
D地点SB1(上)、SB2(下)实测图



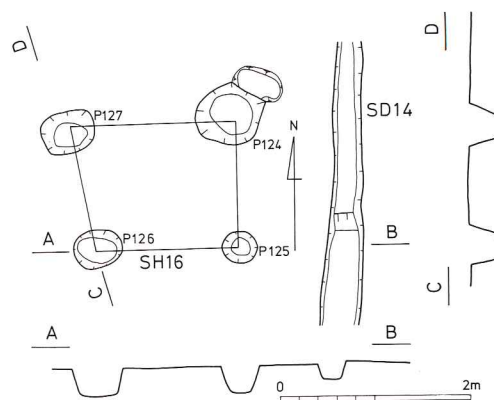
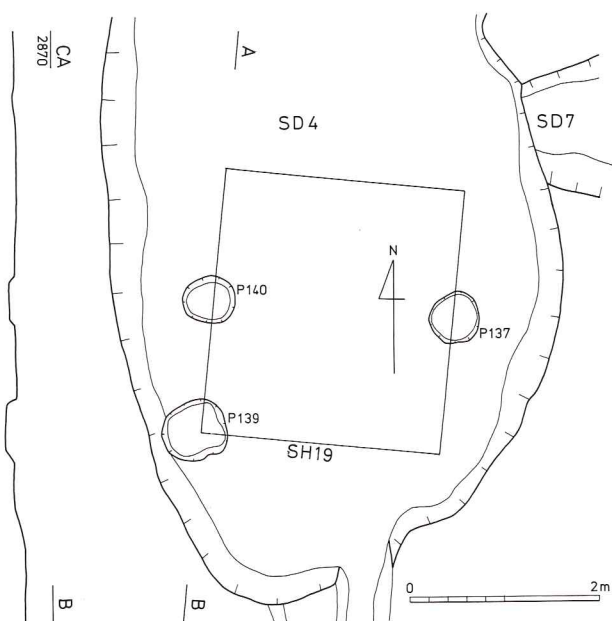
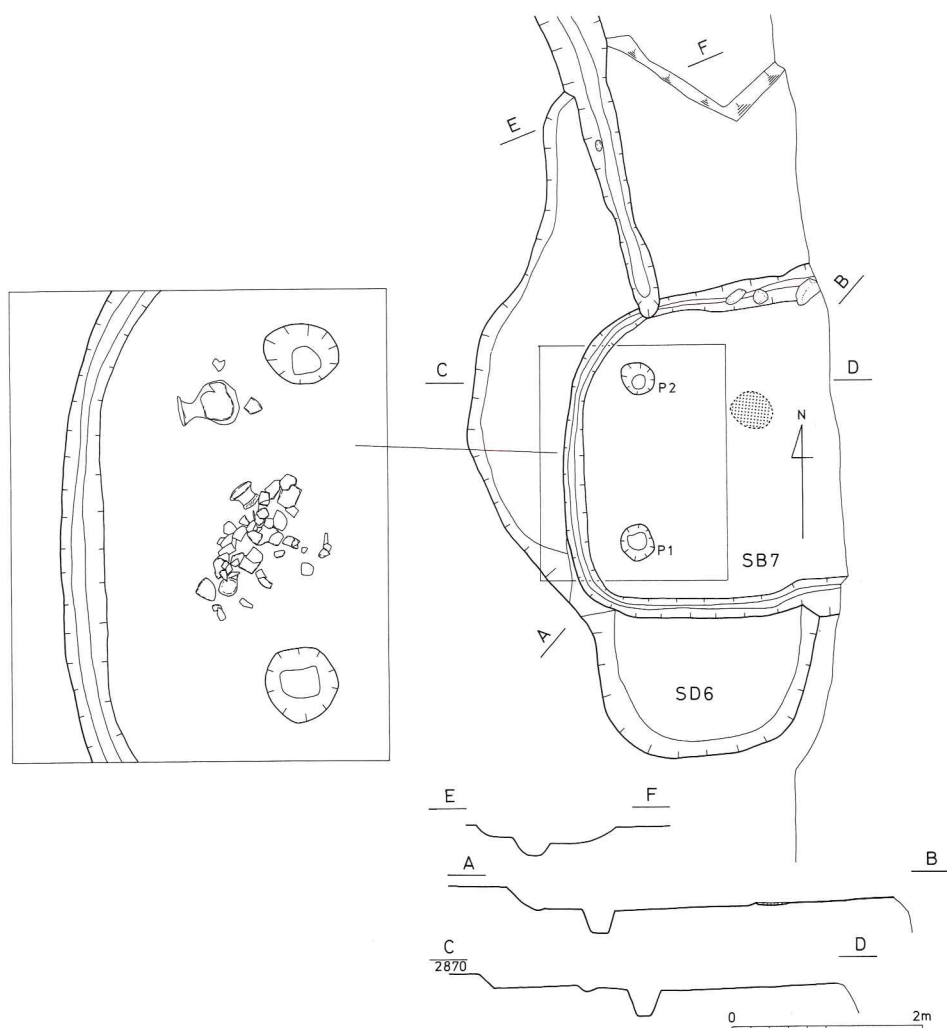
D地点SB 3、SH 9・10・11实测图



D地点SB4・5実測図



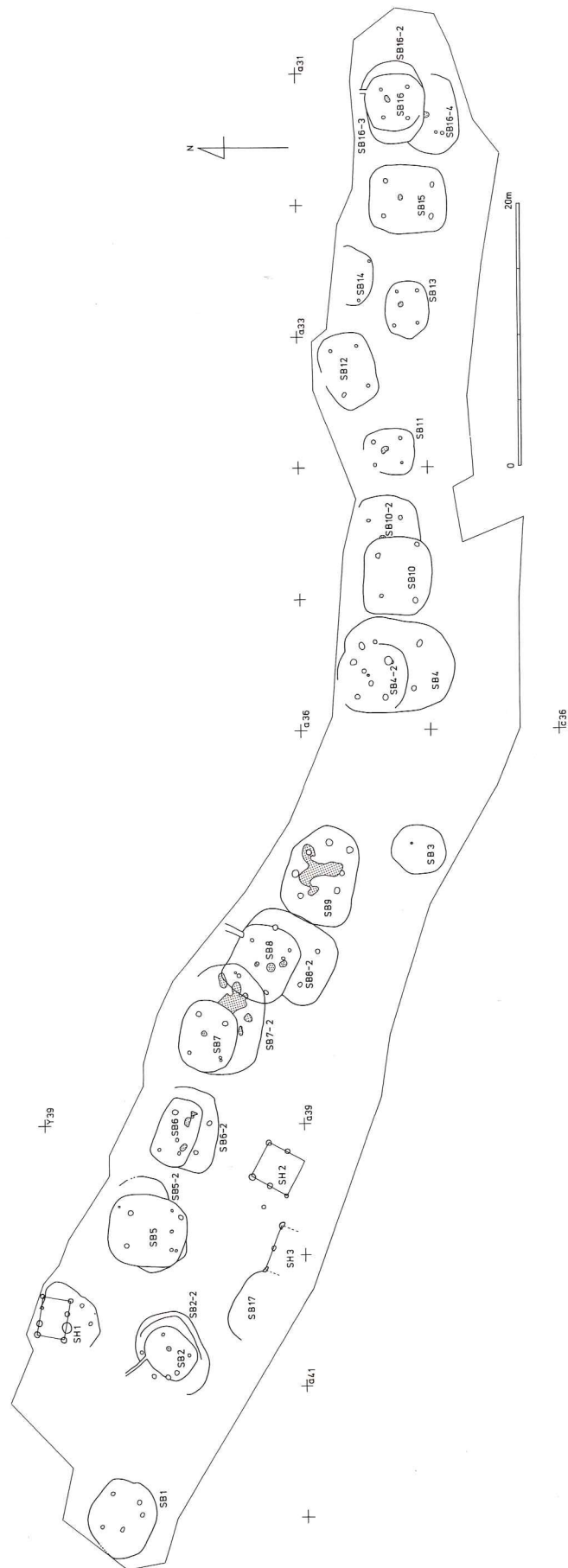
D地点SB 6・11・12、SH17・18実測図(下はSB 6内遺物出土状況)



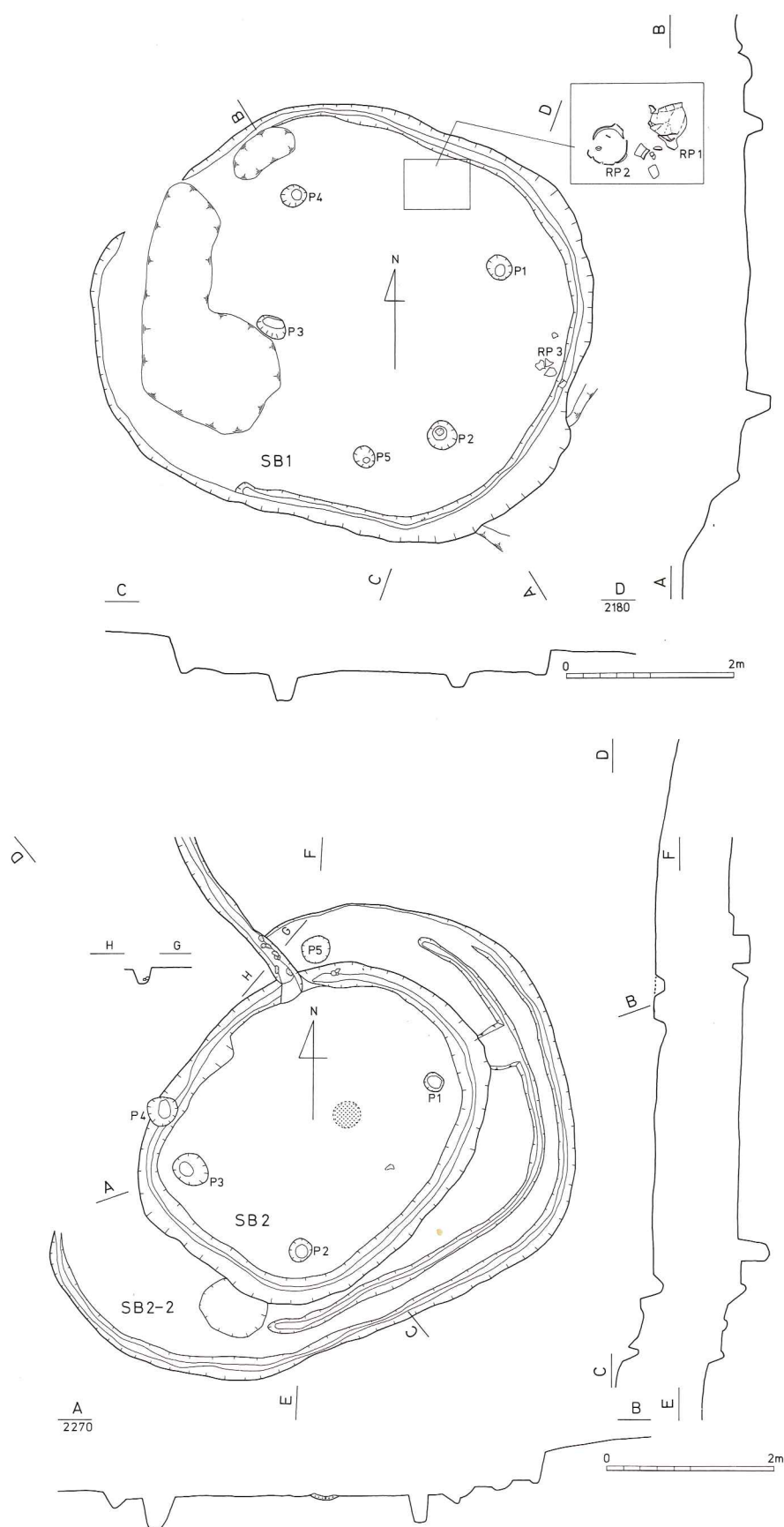
D地点SB7(上)、SH19(左下)、SH16(右下)実測図



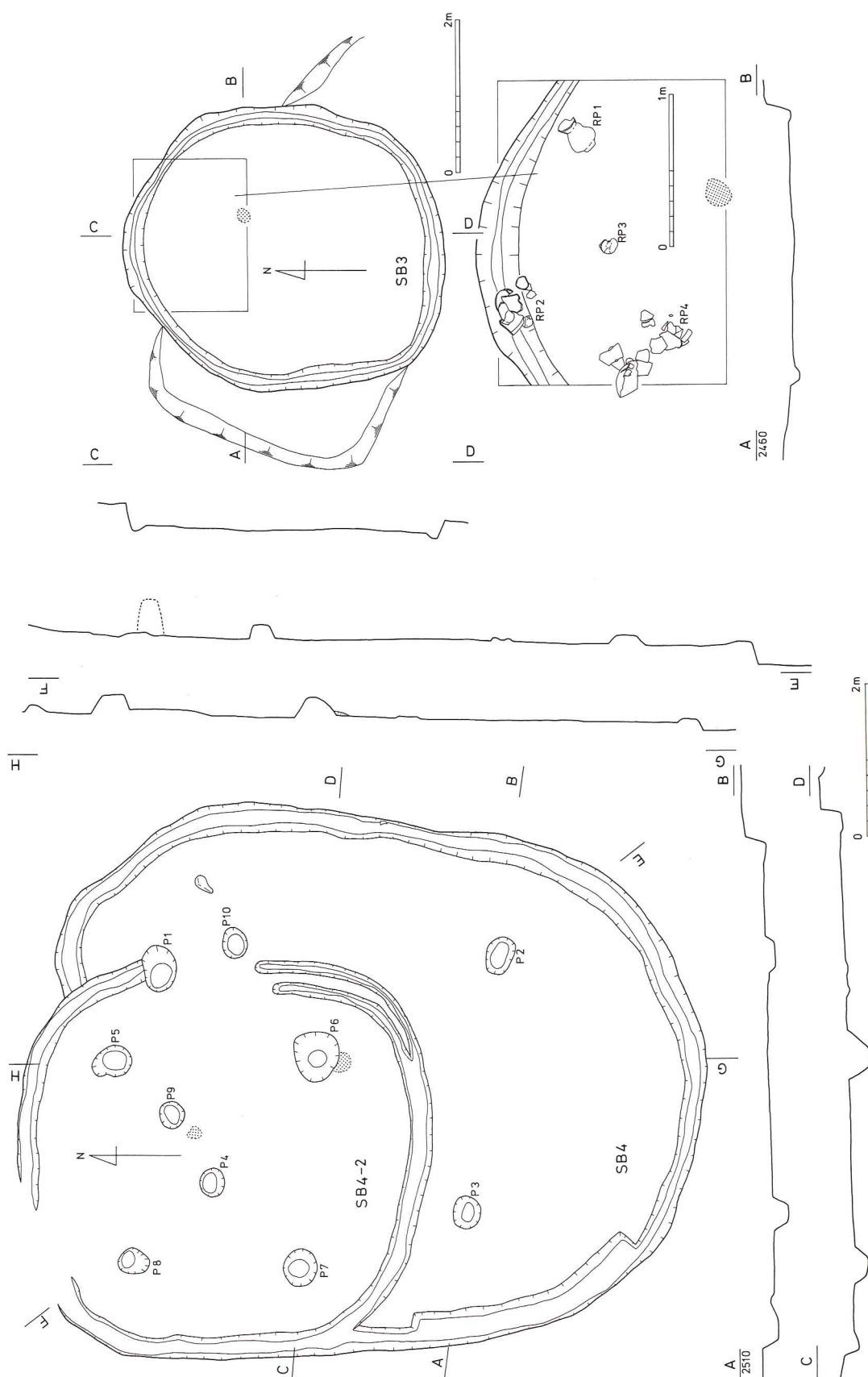
D地点SX1、SB8、SK5 実測図



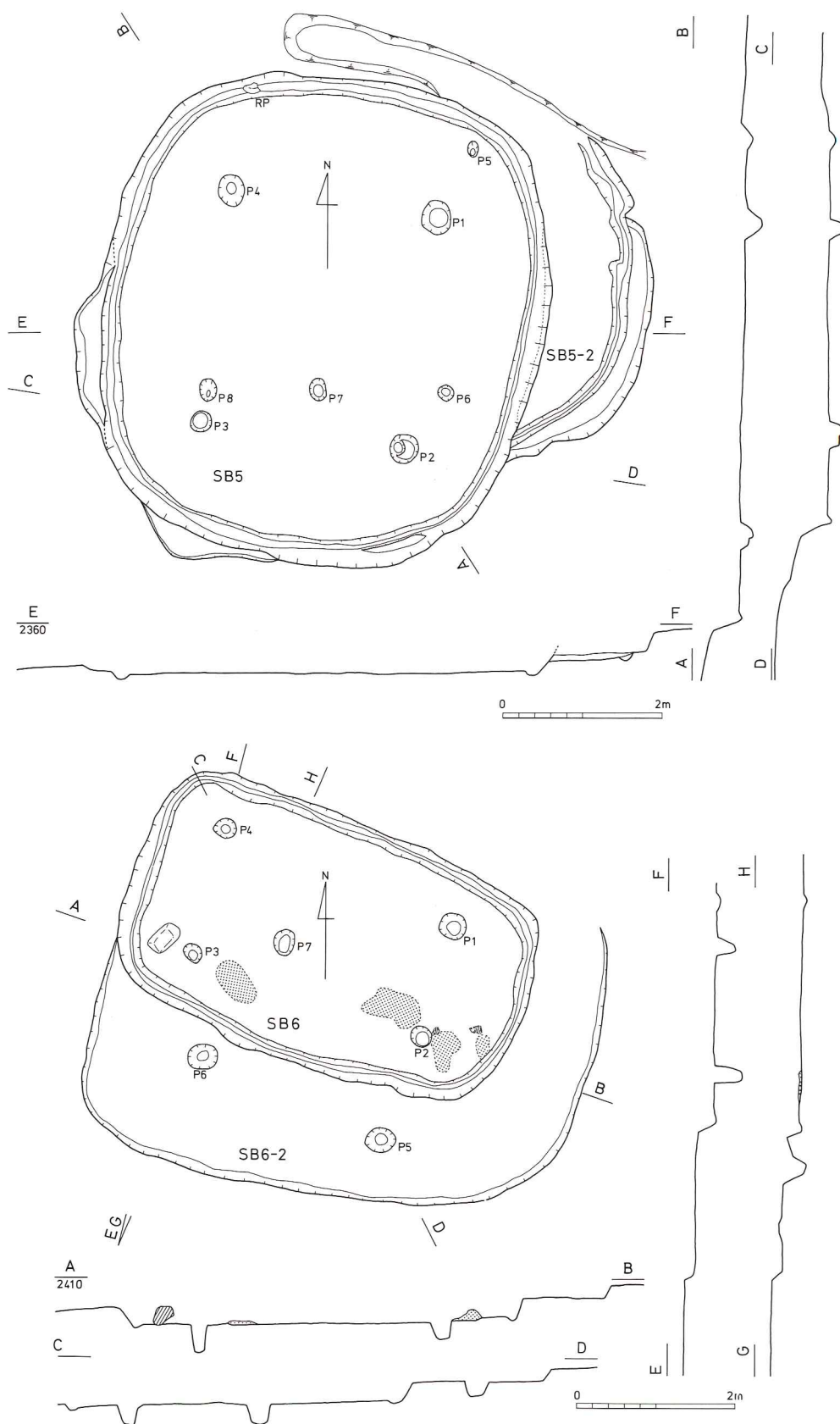
F 地点遺構配置図



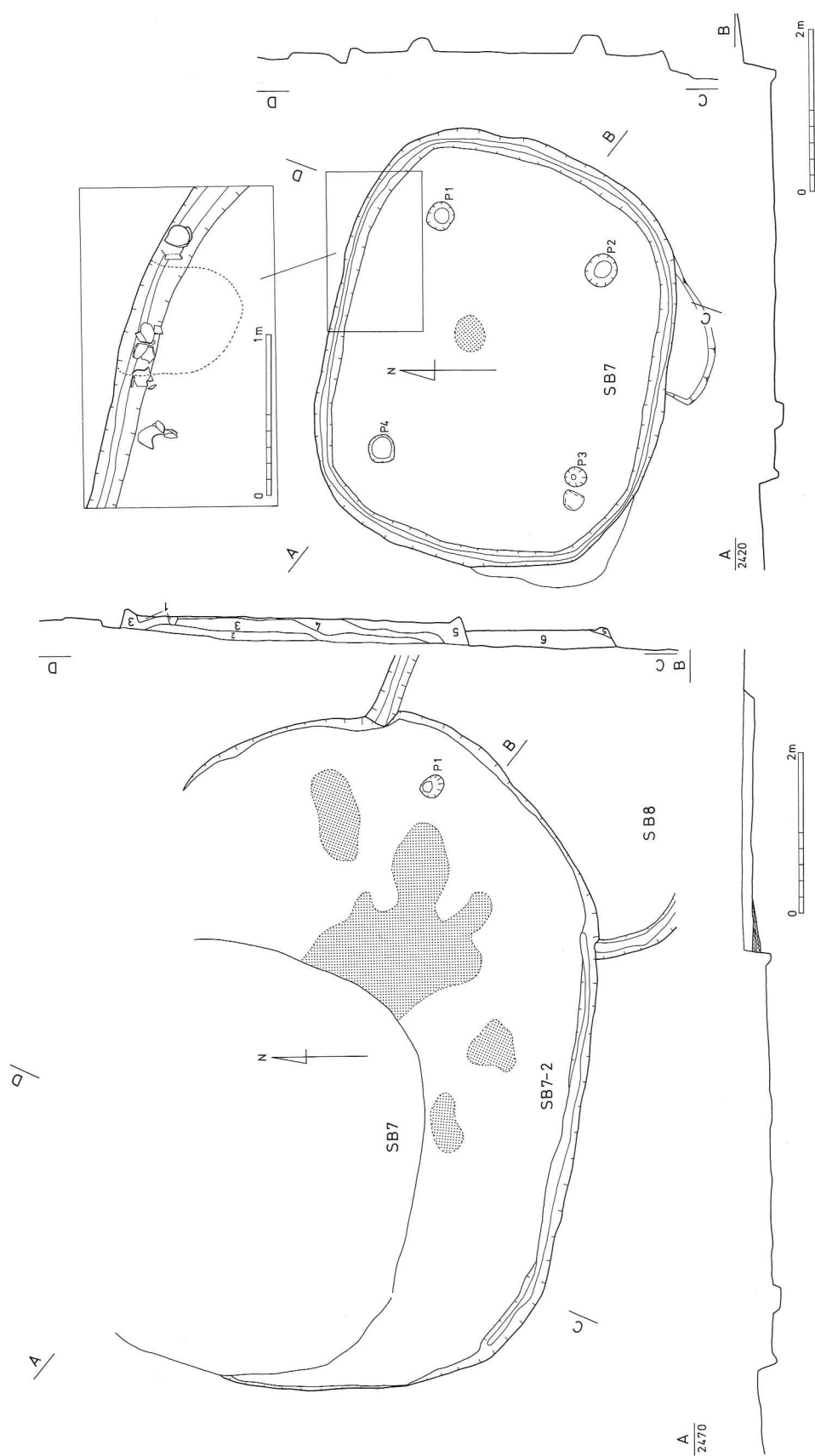
F地点SB1(上)、SB2(下)实测图



F地点SB3(上)、SB4(下)实测图



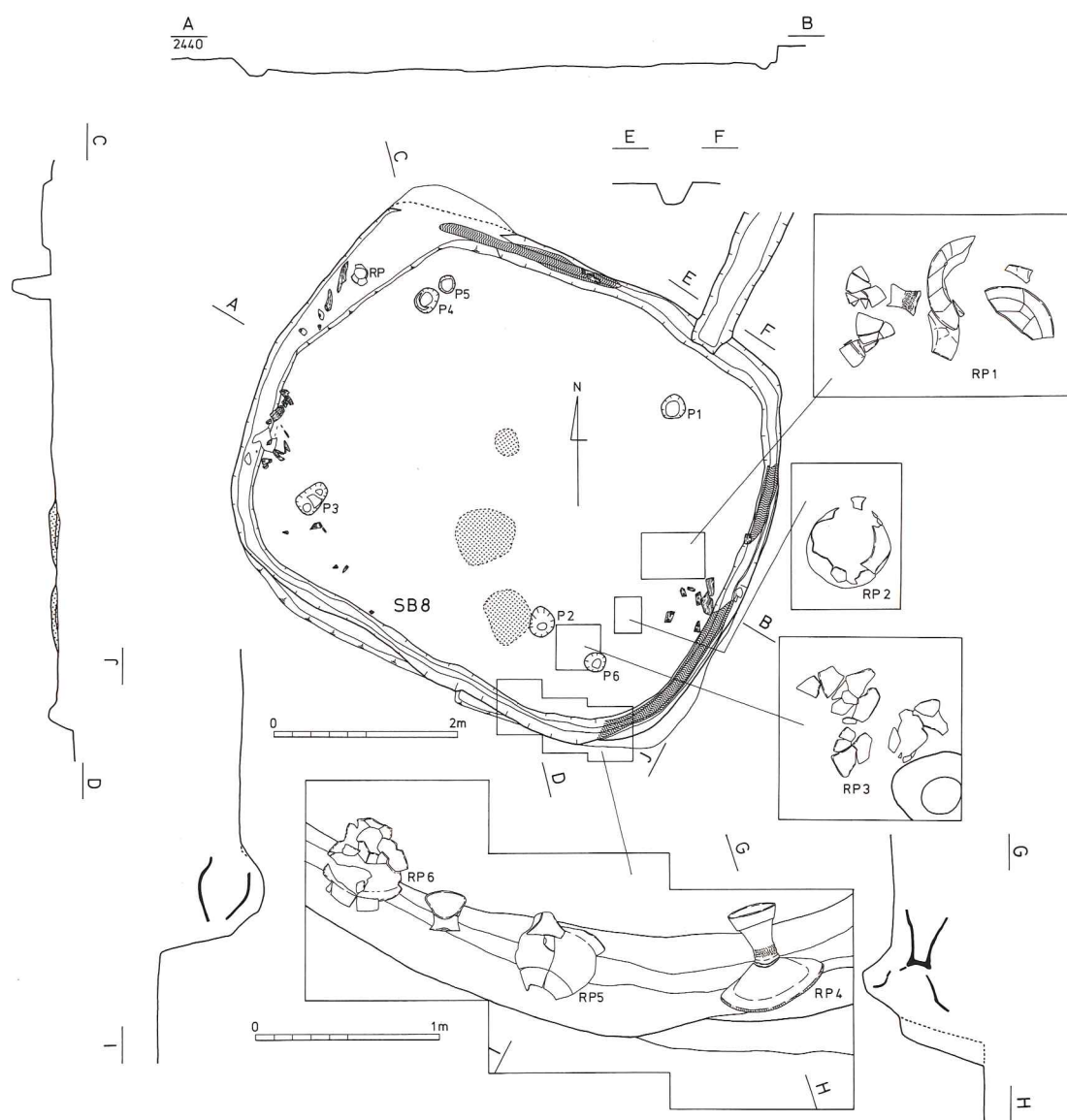
F地点SB5(上)、SB6(下)実測図



F地点SB7(上)、SB7-2(下)実測図

C-D 断面

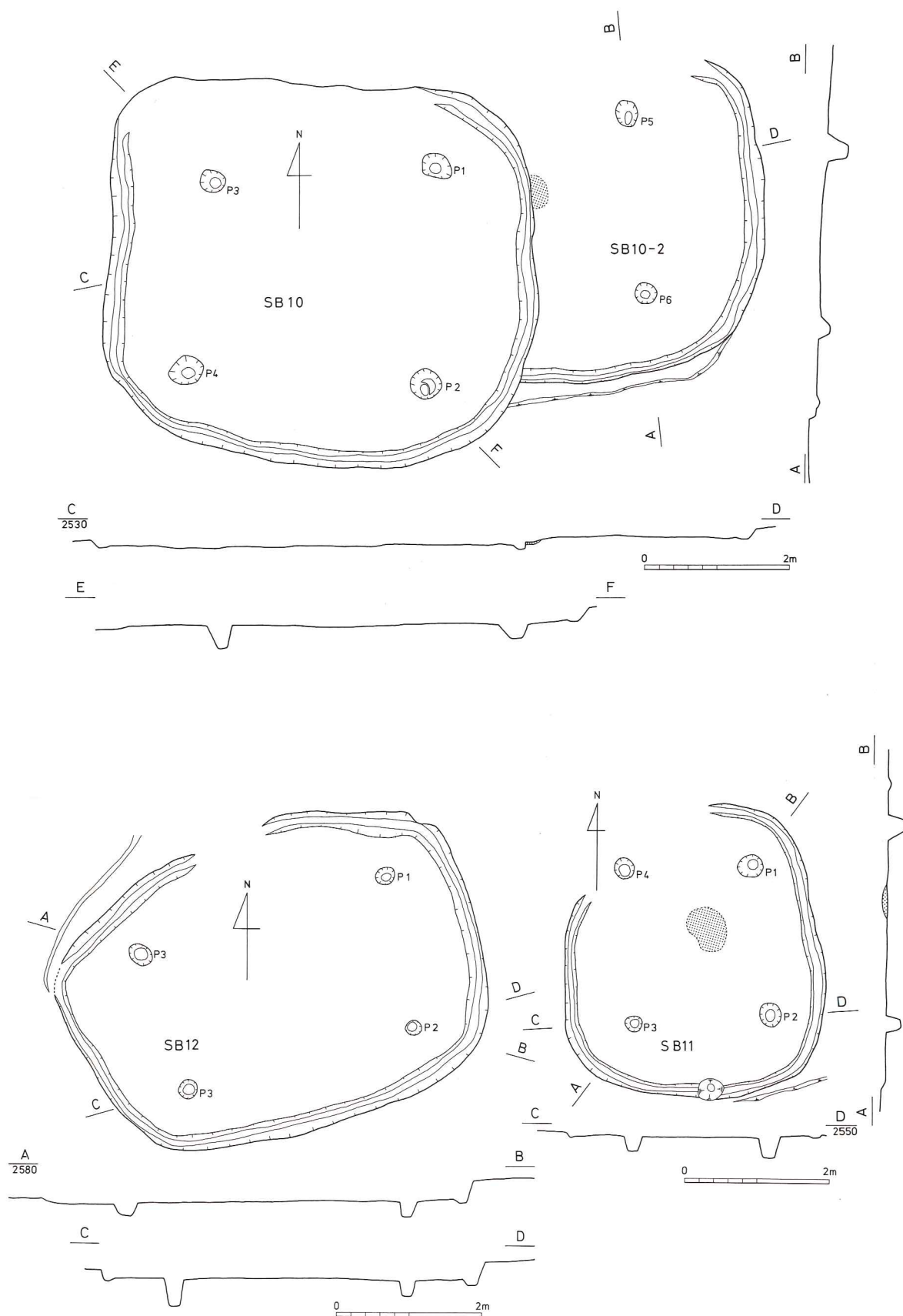
- 1, 木根の攪乱、2, 黒褐色土、3, 褐色土、4, 淡暗褐色土
5, 暗褐色土、6, 褐色粘質土(やや有機質)



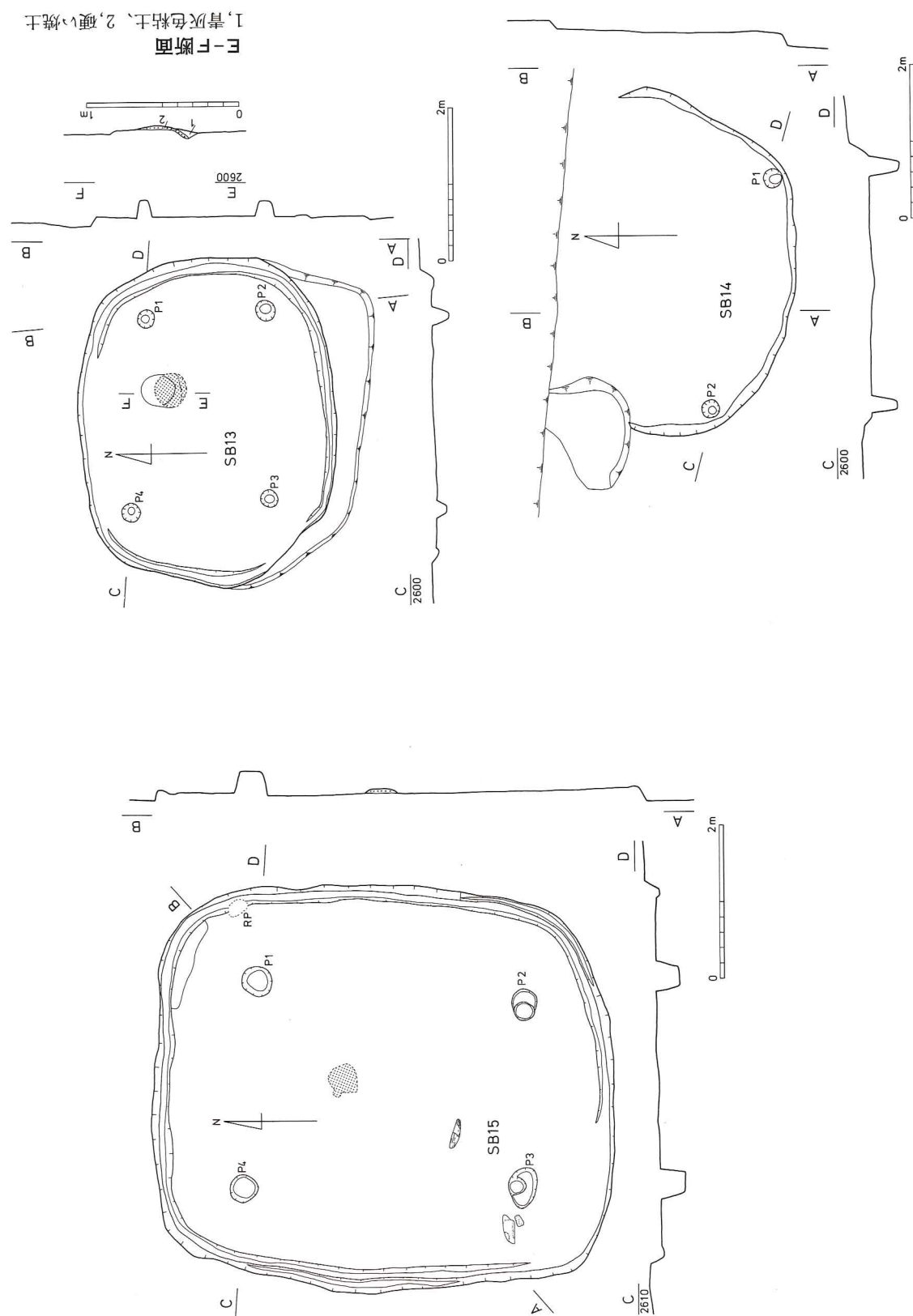
F 地点SB 8 实测图



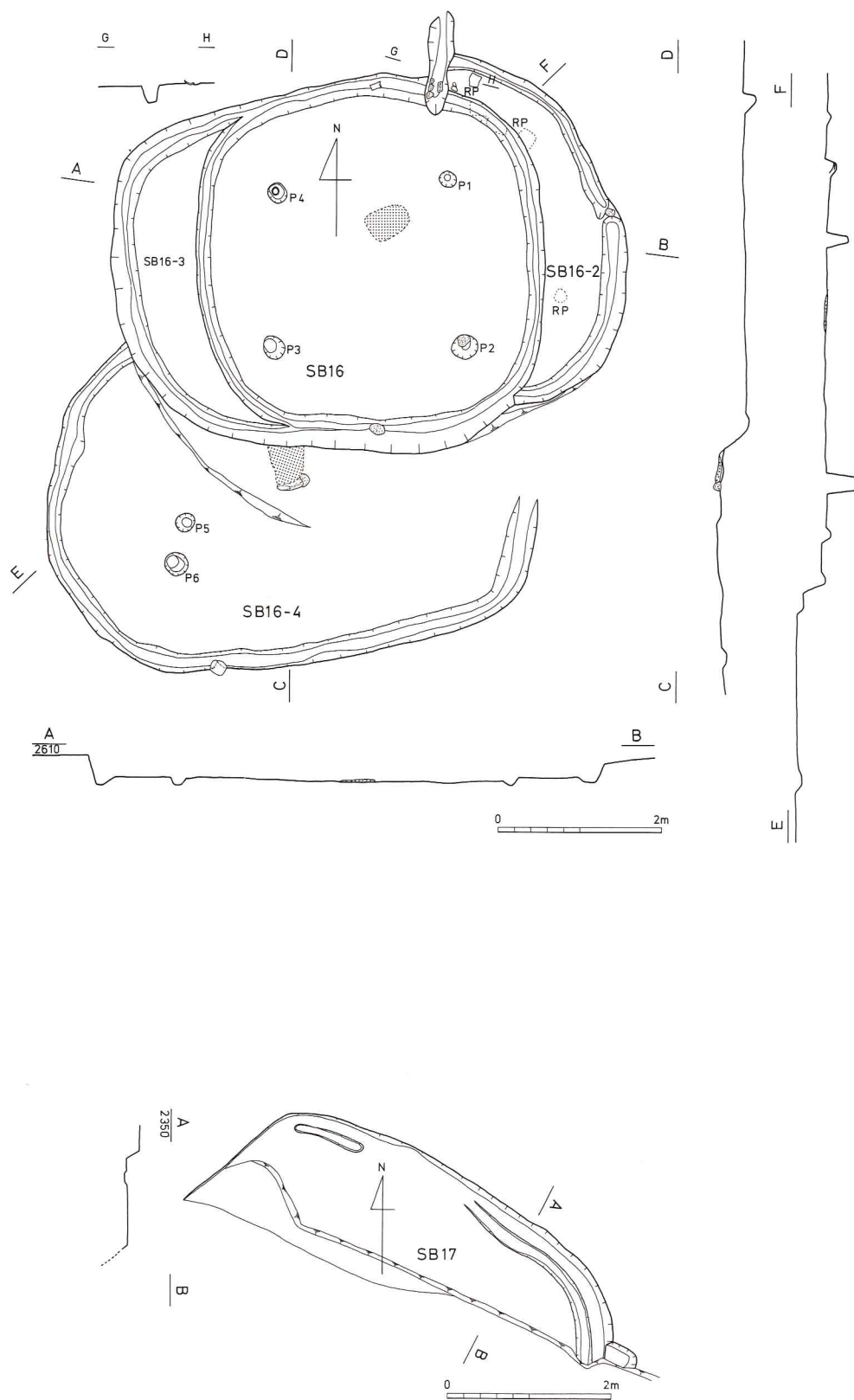
F地点SB8-2(上)、SB9(下)実測図



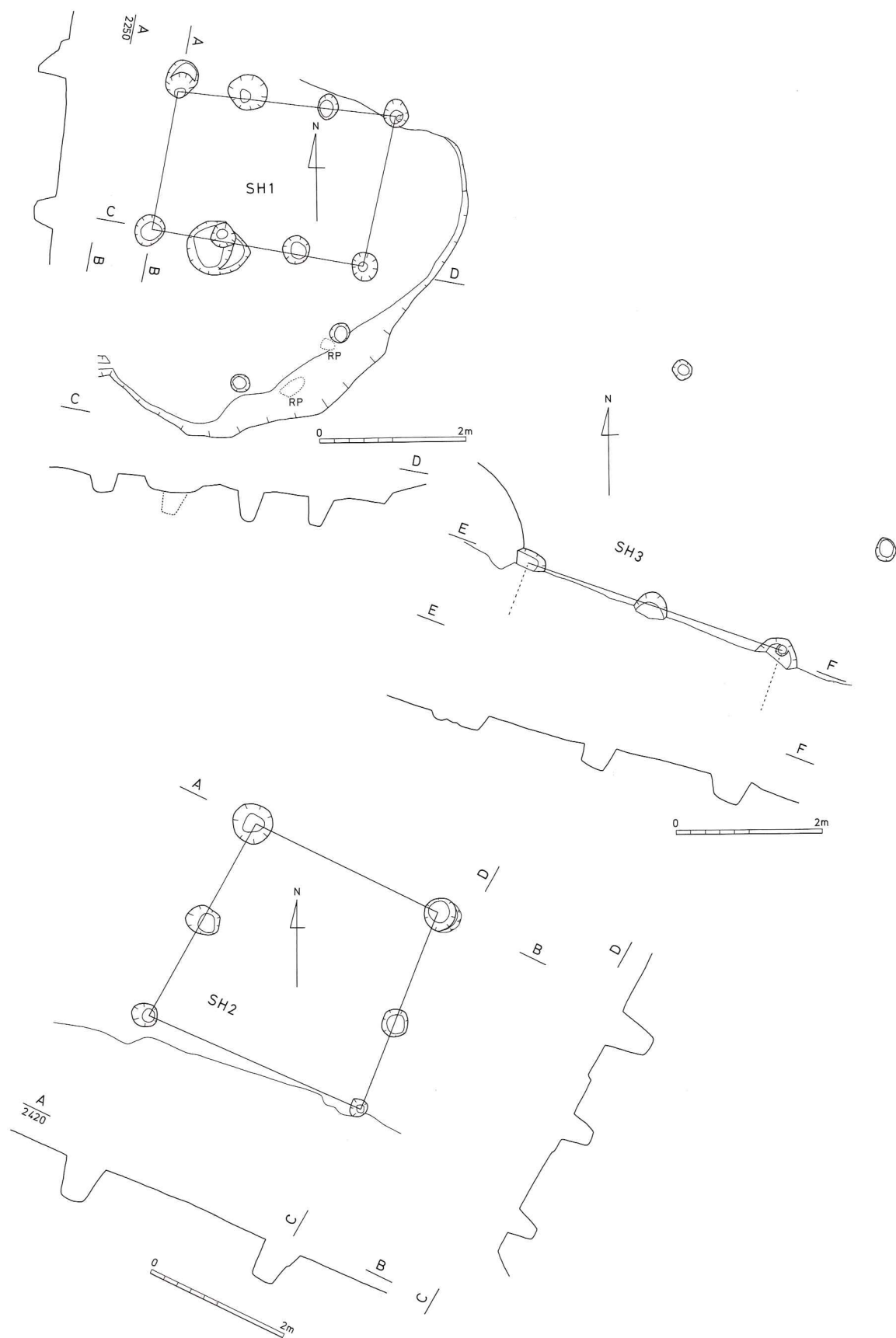
F地点SB10(上)、SB12(左下)、SB11(右下)实测图



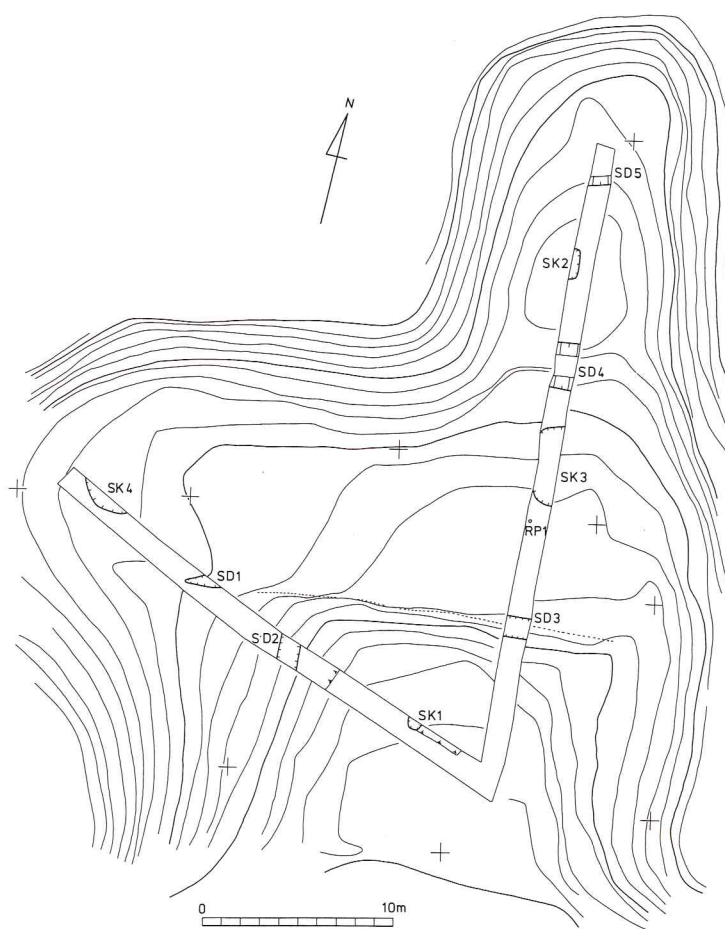
F地点SB13(左上)、SB14(右上)、SB15(下)実測図



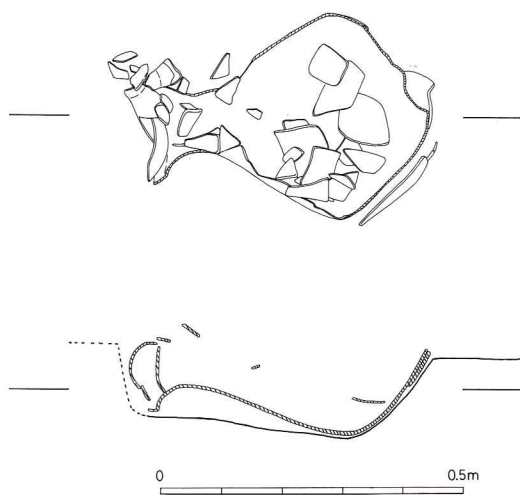
F地点SB16(上)、SB17(下)实测图



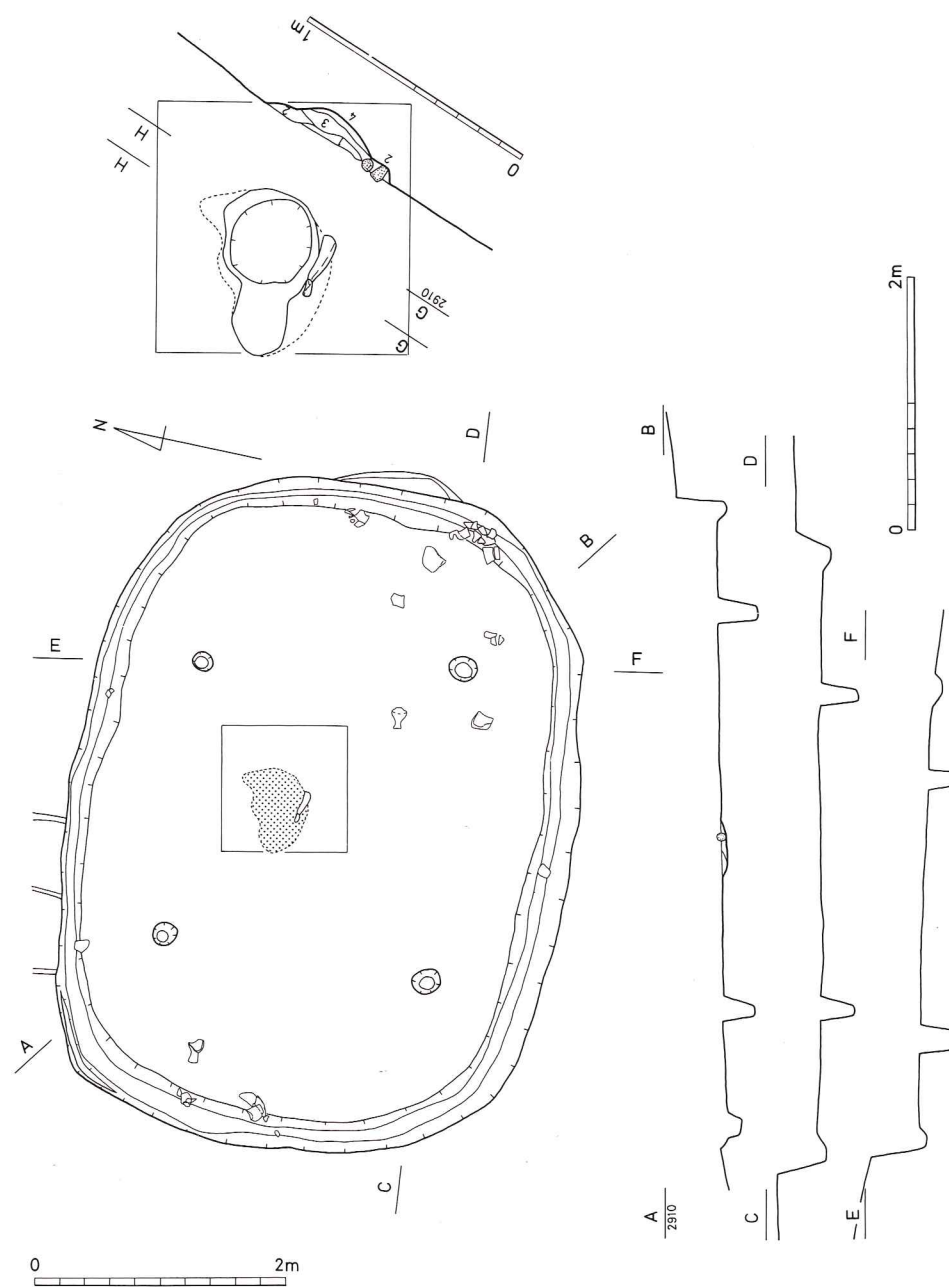
F地点SH1(上)、SH3(中)、SH2(下)实测图



E 地点全体図



E 地点土器棺出土状況(下)実測図



G-H断面

- 1, 焼土混じりの褐色粘質土、2, 少量の焼土を含む褐色粘土
3, 良く焼けた焼土、4, 白色粘土・小礫を含む褐色粘土

G地点SB1 実測図

1992年 3 月31日発行
ワコーゴルフクラブ諸井ショートコース
造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

団子塚遺跡(Ⅰ)

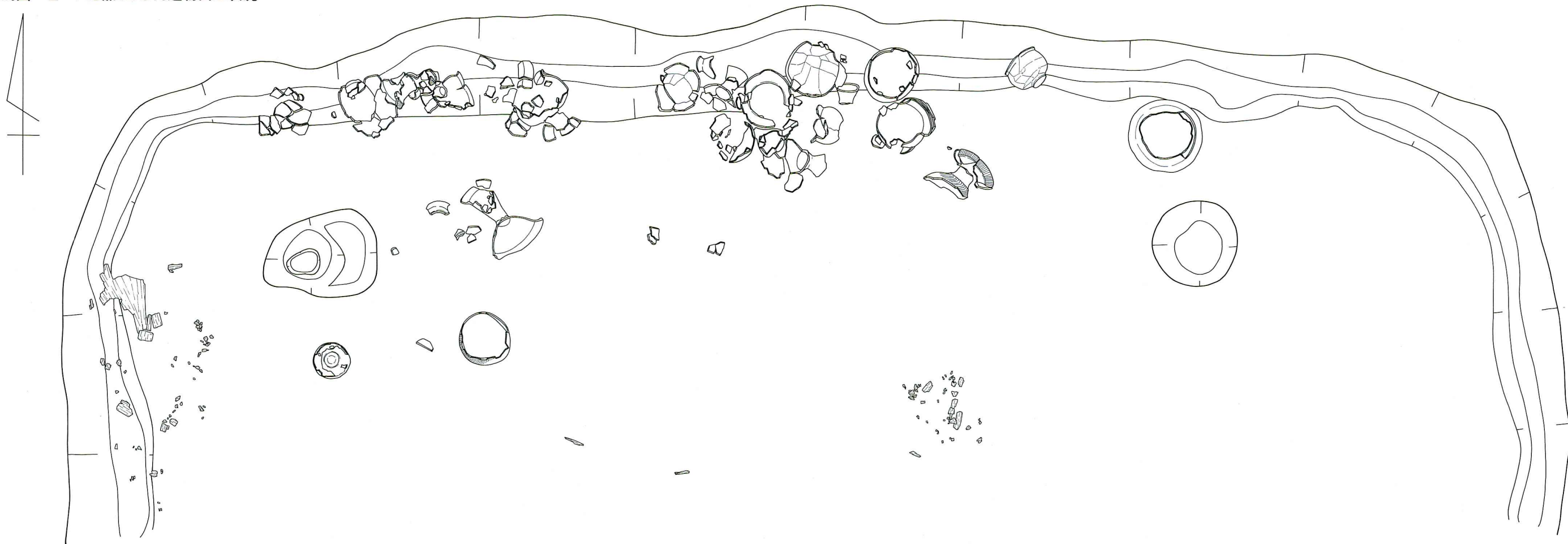
編集 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
発行

印刷 磐田市二之宮251
株式会社 山田印刷所

別図1 団子塚遺跡周辺の地形および調査地点



別図 2 F地点SB6内遺物出土状況



0 1m